

小説 不如歸

徳富蘆花

青空文庫

第百版不如歸の巻首に

不如歸ふじよきが百版になるので、校正かたがた久しぶりに読んで見た。お坊つちちゃん小説である。単純な説話で置いたらまだしも、無理に場面をにぎわすためかき集めた千々石山木ちぢねまきの安っぽい芝居しばいがかりやら、小川某女おがわの蛇足だそくやら、あらをいったら限りがない。百版という呼び声に対してももつとどうにかしたい気もする。しかし今さら書き直すのも面倒だし、とうとうほんの校正だけにした。十年ぶりに読んでいるうちに端はしなく思い起こした事がある。それはこの小説の胚胎はいたいせられた一夕せきの事。もう十二年前ぜんである、

相州そうしゅう 逗子ずしの柳屋やなぎやという家うちの間まを借りて住んでいたころ、病後の保養ほやうに童男こども一人ひとり連れて来られた婦人ふじんがあつた。夏の真盛りで、宿しゆくという宿は皆ふさがつて、途方に暮れておられるのを見兼ねて、妻さいと相談の上自分らが借りていた八畳二室ふたまたまのその一つを御用立てることにした。夏のことでなかの仕切りは形かたばかりの小簾おすひとえ一重、風も通せば話も通う。一月ひとつきばかりの間に大分懇意だいぶんになつた。三十四五の苦勞をした人で、（不如帰の小川某女ではない）大層情の深い話上じょうず手かたの方かただつた。夏も末方のちと曇つてしめやかな晩方の事、童男こどもは遊びあそびに出でしまふ、婦人と自分と妻と雑談ざつだんしているうちに、ふと婦人がさる悲酸ひさんの事實じじつ譚だんを話し出された。もうそのころは知る人は知っていたが自分にはまだ初耳はつみみこの「浪子」の話

である。「浪さん」が肺結核で離縁された事、「武男君」は悲し
 んだ事、片岡中將が怒つて女を引き取つた事、病女のために静
 養室を建てた事、一生の名残に「浪さん」を連れて京阪の遊を
 した事、川島家からよこした葬式の生花を突つ返した事、単
 にこれだけが話のなかの事実であつた。婦人は鼻をつまらせつ
 つしみじみ話す。自分は床柱にもたれてぼんやりきいている。
 妻は頭をたれている。日はいつか暮れてしもうた。古びた田舎家
 の間内が薄ぐらくなつて、話す人の浴衣ばかり白く見える。臨終
 のあわれを話して「そうお言いだったそうですね——もうも
 う二度と女なんか生まれはしない」——言いかけて婦人はとう
 とう嘘啼して話をきつてしもうた。自分の脊髄をあるものが電

のごとく走った。

婦人は間もなく健康になつて、かの一夕せきはなしの談を置き土産みやげに都に帰られた。逗子の秋は寂しくなる。話の印象はいつまでも消えない。朝な夕な波は哀音を送つて、蕭しょうしつ瑟しつたる秋光の浜に立てば影なき人の姿がつい眼前めまきに現われる。かあいそうは過ぎて苦痛になつた。どうにかしなければならなくなつた。そこで話の骨に勝手な肉をつけて一編未熟の小説を起草して国民新聞に掲げ、後一冊として民友社から出版したのがこの小説不如帰である。

で、不如帰のまずいのは自分が不才のいたすところ、それにも関せず読者の感を惹ひく節ふしがあるなら、それは逗子の夏の一夕にある婦人の口に藉かつて訴えた「浪子」が自ら読者諸君に語るのでは

る。要するに自分は電話の「線」はりがねになつたまでのこと。

明治四十二年二月二日

昔の武蔵野今は東京府下

北多摩郡千歳村粕谷の里にて

徳富健次郎識

上編

一の一

上州伊香保千明じょうしゅういかほちぎらの三階しょうじの障子開きて、夕景色ゆうげしきをながむる婦人。年は十八九。品よき丸鬚まげに結いて、草色の紐ひもつけし小こもん紋縮緬ちりめんの被布ひふを着たり。
 色白ほそおもての細面まゆあわい、眉の間まゆあわいややせまりて、頬ほおのあたりの肉寒げなるが、疵きずといわば疵なれど、瘡形やさがたのすらりとしおらしき人品ひとがら。

これや北風ほくふうに一輪つよ勁きを誇る梅花にあらず、また霞かすみの春こちよに蝴蝶こうたと化けて飛ぶ桜の花にもあらで、夏の夕やみにほのかににおう月見草、と品定めもしつべき婦人。

春ひあしの日脚ひあしの西かたがに傾かたがきて、遠くは日光、足尾あしお、越後境えちごぎかいの山々、近くは、小野子おのこ、子持こもち、赤城あかぎの峰々、入り日を浴びて花やかに夕こんじばえすれば、つい下の榎えのき離れて唾あ々と飛び行く鳥からすの声までも金色きに聞きこゆる時、雲ふたつ二片蓬ふらふら々然と赤城うしろの背より浮かび出いでたり。

三階の婦人は、そぞろにその行方ゆくえをうちまもりぬ。

両手ゆた優ゆたかにかき抱いだきつべきふつくりとかあいげなる雲は、おもむろに赤城いただきの巔いただきを離れて、さえぎる物もなき大空を相並んで金の蝶のごとくひらめきつつ、優々として足尾かたの方かたへ流れしが、やが

て日落ちて黄^{たそがれ}昏寒き風の立つままに、二片^{ふたつ}の雲今は薔薇色^{ばらいろ}に褪
 いつつ、上下^{うえした}に吹き離され、しだいに暮るる夕空を別れ別れに
 たどると見しもしばし、下なるはいよいよ細りていつしか影も残
 らず消ゆれば、残れる一片^{ひとつ}はさらに灰色^{うつつろ}に褪いて朦^{ぼいやり}乎と空にさ
 まよいしが、

果ては山も空もただ一^{ひとつ}色^{いろ}に暮れて、三階に立つ婦人の顔のみ
 ぞ夕やみに白かりける。

一の二

「お嬢——おやどういたしましょう、また口がすべって、おほほ

ほほ。あの、奥様、ただいま帰りましてございます。おや、まっくら。奥様工、どこにおいで遊ばすのでございますか？」

「ほほほほ、ここにいますよ」

「おや、ま、そちらに。早くおはいり遊ばせ。お風邪かぜを召しますよ。旦那様だんなはまだお帰り遊ばしませんでございませうか？」

「どう遊ばしたんだらうね？」と障子をあけて内うちに入りながら「何なんなら帳場したへそう言つて、お迎人むかいをね」

「さようでございますよ」言いつつ手さぐりにマツチをすりてランプを点つくるは、五十あまりの老女。

おりから階段はしごの音して、宿の女中おんなは上り来つ。

「おや、恐れ入ります。旦那様は大層ごゆっくりでいらつしやい

ます。……はい、あのいましてがた若い者をお迎えに差し上げましてでございます。もうお帰りでございましょう。——お手紙が——」

「おや、お父さまのお手紙——早くお帰りなさればいいに！」とまるまげ丸鬚の婦人はさもなつかしげに表書を打ちかえし見る。

「あの、殿様の御状で——。早く伺いたいものでございますね。おほほほほ、きつとまたおもしろいことをおっしゃってでございますましよう」

おんな女中は戸を立て、火鉢の炭をついで去れば、老女は風呂敷包みを戸棚にしまい、立ってあなたに來たり、

「本当に冷えますこと！ 東京とはよほど違いますでございます

ねエ」

「五月に桜が咲いているくらいだからねエ。ばあや、もつとこちらへお寄りな」

「ありがとうございます」言いつつ老女はつくづく顔打ちながめ「うそのようでございますねエ。こんなにお丸鬘まげにお結い遊ばして、ちゃんとすわっておいで遊ばすのを見ますと、ばあやがお育て申し上げたお方様とは思えませんでございますよ。先奥せんおくさま様がお亡なくなり遊ばした時、ばあやに負おふされて、母様かあ母様ツてお泣き遊ばしたのは、昨日きのうのようでございますがねエ」はらはらと落涙し「お輿こしいれ入の時も、ばあやはねエあなた、あの立派なごようすを先奥様せんおくさまがごらん遊ばしたら、どんなにおうれしかったろうと思いましてねエ」と襦じゆばん袷そでの袖引き出して目をぬぐう。

こなたも引き入れられるようにうつぶきつ、火鉢にかぎせし
左手の指環ゆびわのみ燦然さんぜんと照り渡る。

ややありて姥うばは面おもてを上げつ。「御免遊ばせ、またこんな事を。

おほほほ年が寄ると愚痴つぽくなりましてねエ。おほほほほ、お嬢——奥様もこれまではいろいろ御苦勞も遊ばしましたねエ。本当によく御辛抱遊ばしましたよ。もうもうこれからはおめでたい事ばかりでございますよ、旦那様はあの通りおやさしいお方様——

「お帰り遊ばしましてでございます」

と女中おんなの声階段はしごの口に響きぬ。

一の三

「やあ、くたびれた、くたびれた」

足袋たびわらじぬ草鞋脱ぎすてて、出迎ふたりう二人にちよつと会釈しながら、廊

下に上りて来し二十三四の洋服の男、提ちようちん燈持ちし若い者を見

返りて、

「いや、御苦労、御苦労。その花は、面倒だが、湯につけて置いてもらおうか」

「まあ、きれい！」

「本当にま、きれいな躑躅つづじでございますこと！ 旦那様、どちらでお採り遊ばしました？」

「きれいだろう。そら、黄色いやつもある。葉が石楠しやくなげに似と
るだろう。明朝浪あすなみさんに活いけてもらおうと思つて、折つて来たん
だ。……どれ、すぐ湯に入つて来ようか」

*

「本当に旦那様はお活発でいらつしやいますこと！ どうしても
軍人のお方様はお違い遊あそばしますねエ、奥様」

奥様は丁寧たいたに畳たたみし外がい套とうをそつと接せつ吻ぶんして衣い桁こうにかけつつ、
ただほほえみて無言なり。

階段はしごも轟とどろと上る足音障子の外に絶えて、「ああいい心地きもち！」と
入り来る先刻の壮夫わかもの。

「おや、旦那様もうお上がり遊あそばして？」

「男だもの。あはははは」と快く笑いながら、妻がきまりわるげに被る大縞の襦袢引きかけて、「失敬」と座ぶとんの上にあぐらをかき、両手に頬をなでぬ。栗虫のように肥えし五分刈り頭の、日にやけし顔はさながら熟せる桃のごとく、眉濃く目いきいきと、鼻下にうつつり毛虫ほどの髭は見えながら、まだどこやらに幼な顔の残りて、ほほえまるべき男なり。

「あなた、お手紙が」

「あ、乃舅だな」

わかももの
 丈夫はちよいといずまいを直して、封を切り、なかを出せば
 落つる別封。

「これは浪さんのだ——ふむ、お変わりもないと見える……はは

はは滑稽こっけいをおつしやるな……お話を聞くようだ」笑えみを含んで読み終えし手紙を巻いてそばに置く。

「おまえにもよろしく。場所が変わるから、持病の起ころぬように用心おしっておつしやってよ」と「浪さん」は饌ぜんを運べる老女を顧みつ。

「まあ、さようでございますか、ありがとうございます存じます」

「さあ、飯だ、飯だ、今日きょうは握り飯二つで終いちんち日歩きずめだったから、腹が減ったこつたらおびたしい。……ははは。こらあ何ちゆう魚さかなだな、鮎あゆでもなしと……」

「山女やまめとか申しましたつけ——ねエばあや」

「そう？ うまい、なかなかうまい、それお代わりだ」

「ほほほ、旦那様のお早うございますこと」

「そのはずさ。今日は榛名はるなから相馬そうまが嶽たけに上つて、それから二ツふた嶽だけに上つて、屏風岩びょうぶいわの下まで来ると迎えの者に会ったんだ」

「そんなにお歩き遊ばしたの？」

「しかし相馬が嶽のながめはよかつたよ。浪さんに見せたいくらいだ。一方は茫々ぼうぼうたる平原さ、利根とねがはるかに流れてね。一方はいわゆる山また山さ、その上から富士がちよつぽりのぞいてるなんぞはすこぶる妙だ。歌でも詠よめたら、ひとつ人麿ひとまろと腕うでつ比べをしてやるところだった。あはははは。それもひとつお代わりだ」

「そんなに景色けしきがようございますの。行って見とうございました

こと！」

「ふふふ。浪さんが上れたら、金鷄勲章きんしをあげるよ。そらあ急ひ峻どい山だ、鉄鎖かなぐさりが十本もさがってるのを、つたつて上るのだからね。僕なんざ江田島えたじまで鍛い上げたからだで、今でもすわというとマストでも綱リギングでもぶら下がる男だから、何でもないがね、浪さんなんざ東京の土踏んだ事もあるまい」

「まあ、あんな事を」につこり顔をあからめ「これでも学校では体操もいたしましたし——」

「ふふふ。華族女学校の体操じゃ仕方がない。そうそう、いつだっけ、参観に行ったら、琴だか何だかコロンコロン鳴つてて、一方で『地球の上に国くにという国くには』何とか歌うと、女生みんなが扇を持

つて起たつたりしやがんだりぐるり回まわつたりしとるから、踊まりの温ぬ習らかと思おもつたら、あれが体操たいそうさ！ あははははは

「まあ、お口がお悪い！」

「そうそう。あの時山木むすめの女むすめと並なんで、垂おさげ髪かみに結いつて、ありあ何なにとか言いつたつけ、葡萄ぶどう色いろの袴はかまはいて澄すみましておどつたのは、たしか浪なみさんだつけ」

「ほほほほ、あんな言ことを！ あの山木やまぎさんをご存ぞんじでいらつしやいますの？」

「山木やまぎはね、うちの亡おや父ちちが世話よちやしたんで、今いまに出入でいりしとるのさ。はははは、浪なみさんが敗北ばいぱくしたもんだから黙もくつてしまつたね」

「あんな言こと！」

「おほほほほ。そんなに御夫婦げんかを遊ばしちやいけません。さ、さ、お仲直りのお茶でございますよ。ほほほほ」

二

前回かりにわかもの壯夫といえるは、海軍少尉だんしやく男お爵か川島武男と

呼ばれ、このたび良媒ありて陸軍中將子爵かたおかき片岡毅とて名は海かいだ内いに震える將軍の長女浪子なみことめでたく合ごうきんの式を挙げしは、

つい先月の事にて、ここしばしの暇を得たれば、新婦とその実家よりつけられし老女の幾いくを連れて四五日前ぜんい伊香保かほに來たりしなり。浪子は八歳やっつの年実母ははに別れぬ。八歳やっつの昔なれば、母の姿すがた貌かたち。

ははつきりと覚えねど、始終笑を含みていられしことと、臨終の
その前にわれを臥床ふしどに呼びて、やせ細りし手にわが小さき掌たなぞこを握
りしめ「浪や、母かあさんは遠とおいところに行くからね、おとなしくして、
おとうさまを大事にして、駒こまちゃんをかあいがつてやらなければ
なりませんよ。もう五六年……」と言いさしてはらはらと涙を流
し「母さんがいなくなつても母さんをおぼえているかい」と今は
肩過ぎしわが黒髪くろかみのそのころはまだふっさりふっさりと額かみぎわまで剪きり下
げしをかいなでかいなでしたまいし事も記憶きおくの底深く彫えりて思
いぬ日はあらざりき。

一年ほど過ぎて、今の母は来つ。それより後は何もかも変わり
果てたることになりぬ。先の母はれつきとしたる土さむらいの家より来し

なれば、よろず折り目正しき風ふうなりしが、それにてもあのよう
に仲よき御夫婦は珍しと婢おんなの言えるをきけることもありし。今の母
はやはりれつきとした士さむらいの家から来たりしなれど、早くより英国
に留学して、男まさりの上に西洋風の染しみしなれば、何事も先と
は打って変わりて、すべて先の母の名残なごりと覚ゆるをばさながら打
ち消すように片端より改めぬ。父に対しても事ごとに遠慮もなく
語らい論ずるを、父は笑いて聞き流し「よしよし、おいが負けじ
や、負けじや」と言わるるが常なれど、ある時ごく気に入りの副
官、難波なんばといえるを相手の晩酌に、母も来たりて座に居しが、父
はじろりと母を見てからからと笑いながら「なあ難波君、学問の
出来でくる細君おくさんは持つもんじゃごわはん、いやさんざんな目にあわ

されませぬぞ、あはははは」と言われしとか。さすがの難波も母の手前、何と挨拶あいさつもし兼ねて手持ちぶさたさかさきに杯を上げ下げして居しが、その後のちおのが細君にくれぐれも女兒むすめどもには書物を読み過ごさせな、高等小学卒業で沢山と言ひ含められしとか。

浪子は幼きよりいたつて人なつくく、しかも伶俐りこうに、香炉峰こうろほう

の雪に簾すだれを巻くほどならずとも、三つのころより姥うばに抱かれて見

送る玄関にわれから帽をとつて阿爺ちちの頭かしらに載すほどの気はききた

り。伸びん伸びんとする幼おきなごころ心は、たとえば春の若菜のごとし。

よしやひとたび雪に降られしとて、ふみにじりだにせられずば、

おのずから雪融とけて青々とのぶるなり。慈母ははに別れし浪子の哀かなし

みは子供には似ず深かりしも、後あとの日だに照りたらば苦もなく育

つはずなりき。束髪に結いて、そばへ寄れば香水の香の立ち迷う、目少し釣りて口大きな今の母を初めて見し時は、さすがに少したじろぎつるも、人なつこき浪子はこの母君にだに慕い寄るべかりしに、継母はわれからさしはさむ一念にかあゆき児こをば押し隔てつ。世なれぬわがまま者の、学問の誇り、邪推、嫉妬しつとさえ手伝いて、まだ八つ九つの可愛児かあいこを心ある大人おとなななどのように相手にするより、こなたは取りつく島もなく、寒ささびしさは心にしみぬ。ああ愛されぬは不幸なり、愛いすることのできぬはなおさら不幸なり。浪子は母あれども愛するを得ず、妹いもとあれども愛するを得ず、ただ父と姥うばの幾いくと実母の姉あねなる伯母おばはあれど、何を言いても伯母はよその人、幾は召使いの身、それすら母の日常に注ぎ

てあれば、少しよくしても、してもらいても、互いにひいきの引き倒し、かえつてためにならず。ただ父こそは、父こそは渾身こんしん愛に満ちたれど、その父中將すらもさすがに母の前をばかねらるる、それも思えば慈愛の一つなり。されば母の前では余儀なくしかりて、陰へ回れば言葉少なく情深くいたわる父の人知らぬ苦心、さと伶俐き浪子は十分に酌くんで、ああうれしかたじけない、どうぞ身を粉こにしても父上のおためにと心に思いはあふるれど、気がつくほどにすれば、母は自分の領分に踏み込まれたるように気をおるくするがつらく、光を韞つつみて言寡ことほげなに気もつかぬ体ていに控え目にしていけば、かえつて意地わるのやれ鈍物どんぶつのと思われ言わるるも情けなし。ある時はいささかの間違いより、流るるごとき長州弁に

英国仕込みの論理法もて滔々とうとうと言いまくられ、おのれのみかは亡なき母の上までもおぼろげならずあてこすられて、さすがにくやしうかんだ唇開かんとしては縁側にちらりと父の影見ゆるに口をつぐみ、あるいはまたあまり無理なる邪推されては「母さまもあんまりな」と窓かけの陰に泣いたることもありき。父ありというや。父はあり。愛する父はあり。さりながら家が世界の女の兒こには、五人の父より一人の母なり。その母が、その母がこの通りでは、十年の間には癖もつくべく、艶つやも失うすべし。「本当に彼女あのこはちつともさつぱりした所がない、いやに執しゅうねい念ねんな人だよ」と夫人は常にののしりぬ。ああ土鉢どばちに植えても、高麗交趾こうらいこうちの鉢に植えても、花は花なり、いずれか日の光を待たざるべき。浪子は実

に日陰の花なりけり。

さればこのたび川島家と縁談整いて、輿こしいれ入済みし時は、浪子も息をつき、父中將も、継母も、伯母も、幾いくも、皆それぞれに息をつきぬ。

「奥様（浪子の継母）は御自分は華手はでがお好きなくせに、お嬢様にはいやアな、じみなものばかり、買つておあげなさる」とつねにつぶやきし姥うばの幾が、嫁入りじたくの薄きを気にして、先奥せんおく様さまがおいでになつたらとかき口説くどいて泣きたりしも、浪子はいそいそとしてわが家やの門かどを出いでぬ。今まで知らぬ自由と楽しさのこのさきに待つとし思えば、父に別わかるる哀かなしさもいささか慰めらるる心地こころちして、いそいそとして行ききたるなり。

三の一

伊香保より水沢みさわの觀音かんのんまで一里あまりの間は、ひとすじ一條の道、
へび蛇のごとく禿山はげやまの中腹に沿うてうねり、ただ二か所ばかりの山
 の裂け目の谷をなせるに陥りてまた這はい上がれるほかは、目をね
 むりても行かるべき道なり。下は赤城あかぎより上じょう毛もうの平原を見晴
 らしつ。ここらあたりは一面の草原なれば、春のころは野焼きの
 あとの黒める土より、さまざまの草萱かやはぎ萩はぎ桔き梗きょう女郎花おみなえしの若芽な
 ど、生はえ出いでて毛氈もうせんを敷けるがごとく、美しき草花その間に咲
 き乱れ、綿帽子着た錢卷ぜんまい、ひよろりとした蕨わらび、ここもそこもた

ちて、ひとたびここにおり立たば春の日の永ながきも忘るべき所なり。

たけお武男夫婦は、今日きょうの晴れを蕨わらび狩りすとて、姥うばの幾いくと宿の女中

ひとり

を一人つれて、午食ひるご後よりここに来つ。はやひとしきり採りある

きて、少しくたびれが来しと見え、女中に持たせし毛布けつとを草のや

わからなるところに敷かせて、武男は靴くつばきのままごろりと横に

なり、浪子なみこは麻裏草履あさうらを脱ぎ桃紅色ときいろのハンケチにて二つ三つ膝ひざの

あたりをはらいながらふわりとすわりて、

「おおやわらか！ もつたいないようでございますね」

「ほほほお嬢——あらまた、御免遊ばせ、お奥様のいいお顔色いろに

おなり遊ばしましたこと！ そしてあんなにお唱歌なんぞお歌い

遊ばしましたのは、本当にお久しぶりでございますねエ」と幾は

うれしげに浪子の横顔をのぞく。

「あんまり歌ってなんだか渴かわいて来たよ」

「お茶を持ってまいりませんで」と女中は風呂敷解ふろしききて夏蜜柑なつみかん、袋入りの乾菓子ひがし、折り詰めまきずしの巻鮓まきずしなど取り出す。

「何、これがあれば茶はいらんさ」と武男はポケットよりナイフ取り出して蜜柑をむきながら「どうだい浪さん、僕の手ぎわには驚いたろう」

「あんな言ことをおっしゃるわ」

「旦那様だんなのおとり遊あそばしたのには、杓へごがどっさりまじっておりましてございますよ」と、女中が口を出す。

「ばかを言うな。負け惜しみをするね。ははは。今日は実に愉快

だ。いい天気じゃないか」

「きれいな空ですこと、碧々あおあおして、本当に小袖こそでにしたいようで

ございますね」

「水兵の服にはなおよかろう」

「おいしい香かおり！ 草花の香でしようか、あ、雲雀ひばりが鳴いてますよ」

「さあ、お鮓すしをいただきお腹なかができたから、もうひとかせぎし

て来ましようか、ねエ女中うばさん」と姥うばの幾は宿の女を促し立てて、

また蕨採りにかかりぬ。

「すこし残しといってくれんとならんぞ——健まめな姥ばあじゃないか、ね

エ浪さん」

「本当に健まめでございますよ」

「浪さん、くたびれはしないか」

「いいえ、ちつとも今日は疲れませんの、わたくしこんなに楽しいことは始めて！」

「遠洋航海なぞすると随分いい景色を見るが、しかしこんな高い山の見晴らしはまた別だね。実にせいせいするよ。そろそこの左の方に白い壁が閃々するだろう。あれが来がけに浪さんと昼飯を食った渋川さ。それからもつとこつちの碧いリボンのようなものが利根川さ。あれが坂東太郎た見えなだらう。それからあの、赤城の、こうずうと夷とる、それそれ煙が見えとるだらう、あの下の方に何だかうじやうじやしてるね、あれが前橋さ。何？　ずっと向こうの銀の針のようなの？　そうそう、あれはやつ

ぱり利根の流れだ。ああもう先はかすんで見えない。両眼鏡を持つて来るところだったねエ、浪さん。しかし霞かすみがかけて、先がはつきりしないのもかえっておもしろいかもしれん」

浪子はそつと武男の膝ひざに手を投げて溜息といきつき

「いつまでもこうしていとうございますこと！」

「黄色の蝶二つ浪子の袖をかすめてひらひらと飛び行きしあとより、さわさわと草踏む音して、帽子かぶりし影法師だしぬけに夫婦の眼前めまきに落ち来たりぬ。

「武男君」

「やあ！ 千々岩ちぢわ君か。どうしてここに？」

三の二

新来の客は二十六七にや。陸軍中尉の服を着たり。軍人には珍しき色白の好男子。惜しきことには、口のあたりどことなく鄙しげなるところありて、黒水晶のごとき目の光鋭く、見つめらるる人に不快の感を起こさすが、疵きずなるべし。こは武男が従兄いとこに当たる千々岩ちちわやすひこ安彦とて、当時参謀本部の下僚におれど、腕ききの聞こえある男なり。

「だしぬけで、びつくりだろう。実は昨日きのう用があつて高崎たかさきに泊まつて、今朝けさ渋川まで来たんだが、伊香保はひと足と聞いたから、ちよつと遊びに来たのさ。それから宿に行ったら、君たちは蕨採わらび

りの御遊ぎょゆうだと聞いたから、路みちを教おそわつてやつて来たんだ。なに、明日あすは帰かえらなけりやならん。邪魔じまに來たようだな。はッはッ」

「ばかな。——君それから宅うちに行つてくれたかね」

「昨朝きのうちよつと寄つて來た。叔母おばさん様も元氣でいなさる。が、もう

君たちが帰りそうなものだつてしきりとこぼしていなすツたツけ。

——赤坂あかさかの方でもお変わりもありませんです」と例の黒水晶の

目はぎらりと浪子の顔に注ぐ。

さつきからあからめし顔はひとしお紅あこうなりて浪子は下向きぬ。

「さあ、援兵が來たからもう負けないぞ。陸海軍一致したら、娘じ

子軍ようし百万ありといえども恐るるに足らずだ。——なにさ、さつ

きからこの御婦人方がわが輩ひとり一人をいじめて、やれ蕨の取り方が

少ないの、採ったが蕨じやないだの、悪口あつこうして困ったんだ」と
武男は顛あごもて今来し姥うばと女中をさす。

「おや、千々岩様——どうしていらツしやいまして？」と姥うばはび
つくりした様子にて少し小鼻にしわを寄せつ。

「おれがさつき電報かけて加勢に呼んだんだ」

「おほほほ、あんな言ことをおしやるよ——ああそれで、へえ、明日あす
はお帰り遊ばすンで。へえ、帰ると申しますと、ね、奥様、お夕ゆ
飯うのしたくもございますから、わたくしどもはお先に帰りますで
ございますよ」

「うん、それがいい、それがいい。千々岩君も来たから、どつさ
りごちそうするんだ。そのつもりで腹を減らして来るぞ。ははは

はは。なに、浪さんも帰る？ まあいるがいいじゃないか。味方がなくなるから逃げるんだな。大丈夫さ、決していじめはしないよ。あははははは」

引きとめられて浪子は居残れば、幾は女中おんなと荷物になるべき毛ケ布ツト蕨などとりおさめて帰り行きぬ。

あとに三人はひとしきり蕨を採りて、それよりまだ日も高ければとて水沢みさわの観音もうに詣で、さきに蕨を採りし所まで帰りてしばらく休み、そろそろ帰途に上りぬ。

夕日は物聞山ものききやまの肩より花やかにさして、道の左右の草原は萌も黄えぎの色燃えんとするに、そこここに立つ孤ひとつまつ松の影長々と横たわりつ。目をあぐれば、遠き山々静かに夕日を浴び、麓ふもとの方は夕

煙諸処に立ち上る。はるか向こうを行く草負い牛の、しかられてもうと鳴く声空に満ちぬ。

武男は千々岩と並びて話しながら行くあとより浪子は従いて行く。三人は徐かみたりしらずに歩みて、今しも壑たにを涉わたり終わり、坂を上りてまばゆき夕日の道に出いでつ。

武男はたちまち足をとどめぬ。

「やあ、しまった。ステツキを忘れた。なに、さつき休んだところだ。待っててくれたまえ、ひと走り取って来るから——なに、浪さんは待ってればいいじゃないか。すぐそこだ。全速力で駆け来る」

と武男はしいて浪子を押しとめ、ハンケチ包みの藪を草の上に

さし置き、急ぎ足に坂を下りて見えずなりぬ。

三の三

武男が去りしあとに、浪子は千々岩ちぢわと一間ばかり離れて無言に立ちたり。やがて谷を渉わたりてかなたの坂を上り果てし武男の姿小さく見えたりしが、またたちまちかなたに向かいて消えぬ。

「浪子さん」

かなたを望みいし浪子は、耳もと近き声に呼びかけられて思わず身を震わしたり。

「浪子さん」

一步近寄りぬ。

浪子は二三歩引き下がりで、余儀なく顔をあげたりしが、例の黒水晶の目にひたとみつめられて、わき向きたり。

「おめでとう」

こなたは無言、耳までさつと紅くれないになりぬ。

「おめでとう。イヤ、おめでとう。しかしめでたくないやつもどこかにいるですがね。へへへへ」

浪子はうつむきて、杖つえにしたる海老色えびいろの洋傘パラソルのさきもてしきりに草の根をほじりつ。

「浪子さん」

蛇へびにまつわらるる栗鼠りすの今は是非なく顔を上げたり。

「何でございます?」

「男爵に金、はやっぱりいいものですよ。へへへへへ、いやおめでどう」

「何をおっしゃるのです?」

「へへへへへ、華族で、金があれば、ほかでも嫁に行く、金がなけりやどんなに慕つても唾つばきもひツかけん、ね、これが当いま今の姫御前ごせです。へへへへ、浪子さんなンぎそんな事はないですがね」

浪子もさすがに血相変えてきつと千々岩をにらみたり。

「何をおっしゃるんです。失敬な。も一度武男の目前まえで言つてごらんなさい。失敬な。男らしく父に相談もせず、無礼千万な艶ふ書を吾みにひとやったりなンぞ……もうこれから決して容赦はしませぬ」

「何ですと？」千々岩の額はまっ暗くなり来たり、唇をかんで、
一歩二歩寄らんとす。

だしぬけにいななく声足あしもと下に起こりて、馬上の半身坂より上
に見え来たりぬ。

「ハイハイハイッ。お邪魔があすよ。ハイハイハイッ」と馬上
なる六十あまりの老翁おやし、頬ほお被かりをとりながら、怪しげに二人の
ようすを見かえり見かえり行き過ぎたり。

千々岩は立ちたるままに、動かず。額の条すじはややのびて、結び
たる唇のほとりに冷笑のみぞ浮かびたる。

「へへへへ、御迷惑ならお返しなさい」

「何をですか？」

「何が何をですか、おきらいなものを！」

「ありません」

「なぜないのです」

「汚らわしいものは焼きすててしまいました」

「いよいよですな。別に見た者はきつとないですか」

「ありません」

「いよいよですか」

「失敬な」

浪子は忿然^{ふんぜん}として放ちたる眼光の、彼がまつ黒き目のすさま

じきに見返されて、不快に得堪^{えた}えずぞつと震いつつ、はるかに目をそらしぬ。あたかもその時谷を隔てしかなたの坂の口に武男の

姿見え来たりぬ。顔一点棗なつめのごとくあかく夕日にひらめきつ。

浪子はほつと息つきたり。

「浪子さん」

千々岩は懲りずまにあちこち逸そらす浪子の目を追いつつ「浪子さん、一言ひとこといって置くが、秘密、何事なにも秘密に、な、武男君に

も、御両親にも。で、なけりや——後悔しますぞ」

電いなすまのごとき眼光を浪子の面おもてに射つつ、千々岩は身を転じて、俛ふしてそこらの草花を摘み集めぬ。

靴くつおと音高く、ステツキ打ち振りつつ坂を上り来し武男「失敬、

失敬。あ苦しい、走りずめだツたから。しかしあつたよ、ステツ

キは。——う、浪さんどうかしたかい、ひどく顔いろ色が悪いぞ」

千々岩は今摘みしすみれ堇の花を胸の飾紐ひもにさしながら、

「なに、浪子さんはね、君があまりひま取ったもんだから、おおかた迷子まいごになったンだろうツて、ひどく心配しなすツたンさ。はッはははは」

「あはははは。そうか。さあ、そろそろ帰ろうじやないか」

みたり三人の影法師は相並んで道べの草に曳ひきつつ伊香保の片かたに行きぬ。

四の一

午後三時高崎発上り列車の中等室のかたすみ、人なきを幸い、

靴ばきのまま腰掛けの上に足さしのばして、
まきたばこ 巻 蓆 をふかしつ
 つ、新聞を読みおるは千々岩安彦なり。

手荒く新聞を投げやり、

「ばか！」

齒の間よりもの言う拍子に落ちし巻蓆を腹立たしげに踏み消し、
 窓の外に唾つばはきしまましばらくたたずみていたるが、やがて舌打
 ち鳴らして、室の全長ながさを二三度往來どゆくきして、また腰掛けに戻りつ。
 手をこまぬきて、目を閉じぬ。まつ黒まゆき眉は一文字にぞ寄りたる。

*

千々岩安彦みなしごは孤ごなりき。父は鹿兒島かごしまの藩士にて、維新の戦争に
うちじに討死し、母は安彦が六歳の夏そのころ霍乱かくらんと言いけるコレラ

に斃^{たお}れ、六歳の孤児は叔母^{おば}——父の妹の手に引き取られぬ。父の妹はすなわち川島武男の母なりき。

叔母はさすがに少しは安彦をあわれみたれども、叔父^{おじ}はこれを厄介者に思いぬ。武男が仙^{せん}台^{だい}平^{ひら}の袴^{はかま}はきて儀式の座につく時、小倉袴^{こくらばかま}の菱^なえたるを着て下座にすくまされし千々岩は、身は武男のごとく親、財産、地位などのあり余る者ならずして、全くわが拳^{こぶし}とわが知恵に世を渡るべき者なるを早く悟り得て、武男を悪^{にく}み、叔父をうらめり。

彼は世渡りの道に裏と表の二^{ふた}条^{すじ}あるを見ぬきて、いかなる場合にも捷^{しょうけい}徑^{けい}をとりて進まんことを誓いぬ。されば叔父の陰によりて陸軍士官学校にありける間も、同窓の者は試験の、点数の

と騒ぐ間に、千々岩は郷党の先輩にも出入り油断なく、いやしくも交わるに身の便宜たよりになるべき者を選び、他の者どもが卒業証書握りてほつと息つく間に、早くも手づるつとうて陸軍の主脳なる参謀本部の囲い内うちに乗り込み、ほかの同窓生なかもはあちこちの中隊付きとなりてそれ練兵やれ行軍と追いつかわるるに引きかえて、千々岩は参謀本部の階下に煙吹かして 戯談じょうだんの間に軍国の大事もあるいは耳に入るうらやましき地位に巣くいたり。

この上は結婚なり。猿猴えんこうのよく水に下るはつなげる手あるがため、人の立身するはよき縁あるがためと、早くも知れる彼は、戸籍吏ならねども、某男爵は某侯爵の婿、某学士兼高等官は某伯の婿、某富豪は某伯の子息の養父にて、某侯の子息の妻さいも某富豪

の女むすめと暗に指を折りつつ、早くもそこごと配れる眼まなこは片岡陸

軍中將の家に注ぎぬ。片岡中將としいえば、当時予備にこそおれ、

ぎようめい

驍

名

天下に隠れなく、

かしこ

畏きあたりの御覚おんおぼえもいとめでたく、

度量かつだい濶大にして、誠に国家の干城と言いつべき將軍なり。千々

岩は早くこの將軍の隠然として天下に重き勢力を見ぬきたれば、

いささかの便たよりを求めて次第に近寄り、如才なく奥にも取り入りつ。

目は直ちに第一の令嬢浪子をにらみぬ。一には父中將の愛おのず

からもつとも深く浪子の上に注ぐをいち早く看みて取りしゆえ、二

には今の奥様はおのずから浪子を疎うとみてどこにもあれ縁あらば早

く片づけたき様子を見たるため、三にはまた浪子のつつしみ深く

けだか

気高きを好ましと思う念もまじりて、すなわちその人を目がけし

なり。かくて様子を見るに中将はいわゆる喜怒容易に色にあらわれぬ太腹の人なれば、何と思わるるかはちと測り難けれど、奥様の気には確かに入りたり。二番目の令嬢の名はお駒こまとて少し跳はねたる三五の少女おとめはことにわれと仲よしなり。その下には今の奥様の腹にて、二人の子供ふたりあれど、こは問題のほかとしてここに老女の幾いくとて先の奥様の時より勤め、今の奥様の輿こし入いれ後奥台所の大更迭を行われし時も中将の声がかかりにて一人居残りし女、これが終始浪子のそばにつきてわれに好意の乏しきが邪魔なれど、なかに、本人の浪子さえ攻め落とさばと、千々岩はやがて一年ばかり機会をうかがいしが、今は待ちあぐみてある日宴会帰りの酔えいまぎれ、大胆にも一通の艶書えんしよふたえかう二重封にして表書きを女文字もじに、こと

さらに郵便をかりて浪子に送りつ。

その日命ありてにわかには遠方に出張し、三月あまりにして帰れば、わが留守に浪子は貴族院議員加藤某かとう 某にがしの媒ばいしやく酌しやくにて、人もあるべきにわが従弟川島武男いとこと結婚の式すでに済みてあらんとは！

思わぬ不覚をとりし千々岩は、腹立ちまぎれに、色よき返事このようにと心に祝みやげいて土産みやげに京都より買こうて来し友染ゆうぜん縮ちりめん緬めんずたずたに引き裂くずきて屑籠くずかごに投げ込みぬ。

さりながら千々岩はいかなる場合にも全くわれを忘れおわる男にあらざれば、たちまちにして敗余の兵を収めつ。ただ心外なるはこの上かの艶書ふみの一条もし浪子より中將に武男に漏れなば大事の便宜たよりを失う恐れあり。持ち込みよき浪子の事なれば、まさかと

思えどまたおぼつかなく、高崎に用ありて行きしを幸い、それとなく伊香保に滞留する武男夫妻を訪うて、やがて探りを入れたるなり。

いまいましきは武男――

*

「武男、武男」と耳近にたれやら呼びし心地して、愕と目を開きし千々岩、窓よりのぞけば、列車はまさに上尾の停車場にあり。駅夫が、「上尾上尾」と呼びて過ぎたるなり。

「ばかなツ！」

ひとり自らののしりて、千々岩は起ちて二三度車室を往き戻りつ。心にまとう或るものを振り落とさんとするように身震いして、

座にかえりぬ。冷笑の影、目にも唇にも浮かびたり。

列車はまたも上尾を出でて、疾風のごとく馳せつつ、幾駅か過ぎて、王子に着きける時、プラットホームの砂利踏みにじりて、

五六人ドヤドヤと中等室に入り込みぬ。なかに五十あまりの男の、
いちちらくにまい 一 楽の上下ぞろい 白縮緬しろちりめんの兵児帯へこおびに岩丈な金鎖ゆびわをきらめかせ、

右手の指めてに分厚ぶあつな金の指環ゆびわをさし、あから顔の目じり著しくたれて、左の目下にしたたかなる赤黒子あかぼくろあるが、腰かくる拍子にフツト目を見合わせつ。

「やあ、千々岩さん」

「やあ、これは……」

「どちらへおいででしたか」言いつつ赤黒子は立って千々岩がそ

ばに腰かけつ。

「はあ、高崎まで」

「高崎のお帰途かえりですか」ちよつと千々岩の顔をながめ、少し声を低めて「時にお急ぎですか。でなけりや夜食でもごいつしよにやりましたよう」

千々岩はうなずきたり。

四の二

橋場の渡しなにかしのほとりなるとある水荘の門に山木兵造やまきひょうぞう別邸とあるを見ずば、某なにかしの待まち合あいかと思わるべき家やぶく作りの、しかも音ね締じ

めの響おとしめやかに婀娜あだめきたる島田の障しょう子じに映るか、さもなく
ば紅くれないの毛もう氈せん敷かれて花牌はなふだなど落ち散るにふさわしかるべき二
階ひとまの一室ひとまに、わざと電燈の野暮やぼを避けて例の和洋行燈あんどうらんぷを据え、
取り散らしたる杯盤はいばんの間に、あぐらをかけるは千々岩ひたりと今一人の
赤黒子は問うまでもなき当家の主人山木兵造なるべし。

遠とほざけにしや、そばはんに侍べる女もあらず。赤黒子の前には小形の
手帳を広げたり、鉛筆を添えて。番地官名など細かに肩書きして
姓名あまたしる数多記せる上に、鉛筆にてさまざまの符号しるしつけたり。丸。四
角。三角。イの字。ハの字。五六七などの数字。あるいはローマ
数字。点かけたるもあり。ひとたび消してイキルとしたるもあり。
「それじゃ千々岩さん。その方はそれと決めて置いて、いよいよ

定^きまつたらすぐ知らしてくれたまえ。——大丈夫間違はあるまい
ね」

「大丈夫さ、もう大臣の手もとまで出ているのだから。しかし何
しろ競^あ争^{いて}者がしよつちゆう運動しとるのだから例のも思い切つて
撒^まかんといけない。これだがね、こいつなかなか食えないやつだ。
しツかり轡^{くつわ}をかませんといけないぜ」と千々岩は手帳の上の一^{いつ}の
名をさしぬ。

「こらあどうだね？」

「そいつは話せないやつだ。僕はよくしらないが、ひどく頑^{がんこ}固^こな
やつだそうだ。まあ正面から平身低頭でゆくのだな。悪くすると
しくじるよ」

「いや陸軍にも、わかつた人もあるが、実に話のできん男もいるね。去年だつた、師団に服を納めるンで、例の筆法でまあ大概は無事に通つたのはよかつたが。あら何とか言ツたツけ、赤髯あかひげの大佐だつたがな、そいつが何のかの難癖つけて困るから、番頭をやつて例の菓子箱を出すと、ばかめ、賄賂わいろなんぞ取るものか、軍人の体面に関するなんて威張つて、とどのつまりあ菓子箱を蹴け飛ばしたと思いなさい。例の上層うへえが干菓子で、下が銀貨しろいのだから、たまらないさ。紅葉もみじが散る雪が降る、座敷じゆう——の雨だろう。するとそいつめいよいよ腹あ立てやがツて、汚らわしいの、やれ告発するのなんのぬかしやがるさ。やつと結局まとめをつけはつけたが、大骨折らしアがツたね。こんな先生がいるからばかばかしく事が

面倒になる。いや面倒というと武男さんなぞがやつぱりこの流で、
実に話せないに困る。こないだも——」

「しかし武男なんざ親父おやしが何万という身代をこしらえて置いたの
だから、頑固だツて正直だツて好きなまねしていけるのだがね。

吾輩ぼくのごときは腕一本——」

「いやすっかり忘れていた」と赤黒子はちよいと千々岩の顔を見
て、懐中より十円紙幣さつ五枚取り出しいだ「いずれ何はあとからとして、
まあ車代に」

「遠慮なく頂戴ちようだいします」手早くかき集めて内ポケットうちにしま
いながら「しかし山木さん」

「？」

「なにさ、播かぬ種は生えんからな！」

山木は苦笑にがわらいしつ。千々岩が肩ぽんとたたいて「食えん男だ、

惜しい事だな、せめて経理局長ぐらいに！」

「はははは。山木さん、清正きよまさの短刀は子供の三尺三寸よりか切れるぜ」

「うまく言ったな——しかし君、蠣殻町かきがらちようだけは用心したまえ、素人しろうとじゃどうしてもしくじるぜ」

「なあに、端金はしたがねだからね——」

「じゃいずれ近日、様子がわかり次第——なに、車は出てから乗った方が大丈夫です」

「それじゃ——家内も御挨拶ごあいさつに出るのだが、娘が手離されんで

ね」

「お豊とよさんが？ 病気ですか」

「実はその、何です。この一月ばかり病気をやってな、それで家内が連れて此家ここへ来ているですて。いや千々岩さん、妻かかだの子だの滅多に持つもんじゃないね。金もうけは独身に限るよ。はッははは」

主人あるじと女中おんなに玄関まで見送られて、千々岩は山木の別邸を出いて行きたり。

四の三

千々岩を送り終わりて、山木が奥へ帰り入る時、かなたの襖ふすますうと開きて、色白きただし髪薄くしてしかも前歯二本不行儀に反そりたる四十あまりの女入り来たりて山木のそばに座を占めたり。

「千々岩さんはもうお帰り？」

「今追つぱらったとこだ。どうだい、豊とよは？」

反そ齒つばの女はいとど顔を長くして「ほんまに良あんた人。彼あれ女にも困り

切りますがな。——兼かね、御身おまえはあち往いつておいで。今日きょうもなあん

た、ちいと何かが気に食わんたらいうて、お茶ちやわん碗わんを投げたり、

着物を裂いたりして、しようがありまへんやつた。ほんまに十八

という年をして——」

「いよいよもつて巢すかも鴨もだね。困ったやつだ」

「あんだ、そないな戯談じょうだんどころじゃございませんがな。――

でもかあいそうや、ほんまにかあいそうや、今日もな、あんだ、竹たけにそういいましたてね。ほんまに憎らしい武男はんや、ひどいひどいひどいひどい人や、去年のお正月には靴くつした下を編んであげたし、それからハンケチの縁を縫ってあげたし、それからまだ糸の手袋だの、腕ぬきだの、それどころか今年の御年始には赤い毛糸でシャツまで編んであげたに、皆みな自腹ア切ツて編んであげたのに、何なの沙汰あんなしであるの不器量いじな意地いじわるの威張つた浪子はんをお嫁にもらつたり、ほんまにひどい人だわ、ひどいわひどいわひどいわひどいわ、あたしも山木の女むすめやさかい、浪子はんなんかに負けるものか、ほんまにひどいひどいひどいひどいひどいッてな、あ

んた、こないに言つて泣いてな。そないに思い込んでいますに、あああ、どうにかしてやりたいがな、あんた」

「ばかを言いなさい。勇将の下もとに弱卒なし。御身おまえはさすがに豊が

母おつかさんだよ。そらア川島だツて新華族にしちやよつぽど財産もあ

るし、武男さんも万まんざら更まばかでもないから、おれもよほどお豊を

入れ込もうと骨折つて見たじやないか。しかしだめで、もうちや

んと婚礼が済んで見れば、何もかも御破算さ。お浪さんが死んで

しまうか、離縁にでもならなきやア仕方がないじやないか。それ

よりもばかな事はいいい加減に思い切ツてさ、ほかに嫁かたづく分別が肝

心じやないか、ばかめ」

「何が阿呆あほうかいな？ はい、あんた見たいに利口やおまへんさか

いな。好年配えいとしをして、彼女あれや此女これや足袋たびとりかえるような——」

「そう雄弁滔とうとう々まくしかけられちやア困るて。御身おまえは本当に馬ば

——だ。すぐむきになりよる。なにさ、おれだつて、お豊は子だもの、かあいがらずにどうするものか、だからさ、そんなくたらぬ繰り言ばつかり言つてるよりも、別にな、立派なとこに、な、生涯樂をさせようと思つてるのだ。さ、おすみ、来なさい、二人ふたりでちつと説諭でもして見ようじゃないか」

と夫婦打ち連れ、廊下伝いに娘お豊の棲すめる離室はなれにおもむきたり。

山木兵造というはいずこの人なりけるにや、出所定かならねど、今は世に知られたる紳商とやらの一人にんなり。出世の初め、今は故

人となりし武男が父の世話を受けしこと少なからざれば、今も川島家に入入りすという。それも川島家が新華族中にての財産家なるがゆえなりという者あれど、そはあまりに酷なる評なるべし。

本宅を芝しばさくらがわちよう桜川町に構えて、別荘を橋場の渡しのほとりに持

ち、昔は高利も貸しけるが、今はもつぱら陸軍その他官省の請負を業とし、嫡男を米国ボストンの商業学校に入れて、女むすめお豊はつ

い先ごろまで華族女学校に通わしつ。妻はいついかにして持ちに

けるや、ただ京都者というばかり、すこぶる醜きを、よくかの山

木は辛抱するぞという人もありしが、実は意気あだ婀娜など形容詞の

つくべき女諸処いえいに家居して、輪かわるがわる番行く山木を待ちける由は妻

もおぼろげならずさとりしなり。

四の四

床には琴、月琴、ガラス箱入りの大人形などを置きたり。すみ
 には美しき女机あり、こなたには姿見鏡あり。いかなる高貴の姫
 君や住みたもうらんと見てあれば、八畳のまんなかに絹ぶとん敷
 かせて、玉蜀黍とうもろこしの毛を束ねて結つたようなる島田を大童おおわらわに
 振り乱し、ごろりと横に臥ふしたる十七八の娘、色白の下しもぶくれ豊と
 いえばかあいげなれど、その下しもぶくれ豊が少し過ぎて頬ほおのあたりの
 肉今や落ちんかと危ぶまるるに、ちよつぽりとあいた口は閉ずる
 も面倒がといお貌がに始終どうもん洞門を形づくり、うつすりとあるかなき

かの眉まゆの下にありあまる肉をかるうじて二三分ぶうえした上下に押し分けつつ開きし目のうちいかにも春がすみのかけたるごとく、前の世からの長き眠りがとんと今もつてさめぬようなり。

今何かいいつけられて笑いを忍んで立つて行く女の背せなに、「ばか」と一つ後ろ矢を射つけながら、女むすめはじれつたげに搔か卷踏まきみぬぎ、床の間にありし大形の——袴はかまはきたる女生徒の多くうつれる写真をとりて、糸のごとき目にまばたきもせず見つめしが、やがてその一人ひとりの顔と覚しきあたりをしきりに爪つまはし弾はじきしつ。なおそれにも飽き足らでや、爪つめもてその顔の上に縦横に疵きずをつけぬ。

ふすま
襖ふすまの開く音。

「たれ？ 竹かい」

「うん竹だ、頭の禿はげた竹だ」

笑いながら枕まくらべにすわるは、父の山木と母なり。娘はさすがにあわてて写真を押し隠し、起きもされず寝もされずといわんがごとく横になりおる。

「どうだ、お豊、気分は？ ちつとはいいか？ 今隠したのは何だい。ちよつと見せな、まあ見せな。これさ見せなといえば。——なんだ、こりア、浪子さんの顔じゃないか、ひどく爪かたをつけたじゃないか。こんな事するよりか丑うしの時参りでもした方がよっぽど気がきいてるぜ！」

「あんたまたそないな事を！」

「どうだ、お豊、御身おまえも山木兵造の娘じゃないか。ちつと気を大

きくして山氣やまきを出せ、山氣を出せ、あんなけちけちした男に心中立て——それもさこつちばかりでお相手なしの心中立てするよりか、こら、お豊、三井みつゐか三菱みつびし、でなけりやア大将か総理大臣の息子むすこ、いやそれよりか外国の皇族でも引っかける分別をしろ。そんな肝ツ玉の小せ工事でどうするものか。どうだい、お豊」

母の前では縦横だだに駄々だだをこねたまえど、お豊姫もさすがに父の前をば憚はばりたもうなり。突つ伏して答えなし。

「どうだ、お豊、やつぱり武男さんが恋しいか。いや困った小浪こなみ御察ごりようだ。小浪といえは、ねエお豊、ちつと気晴らしに京都にでも行つて見んか。そらアおもしろいぞ。祇園清ぎおんきよみず水ちおんいん知恩院き、金閣寺んかくじ拜見にしじんがいやなら西陣にしじんへ行つて、帯まがさねか三枚襲まがさねでも見立てる

さ。どうだ、あいた口に牡丹餅ぼたもちよりうまい話だろう。御身おまえも久し

ぶりだ、お豊を連れて道行きと出かけなさい、なあおすみ」

「あんたもいつしよに行きなはるのかいな」

「おれ？ ばかを言いなさい、この忙せわしいなかに！」

「それならわたしもまあ見合わせやな」

「なぜ？ 飛んだ義理立てさするじゃないか。なぜだい？」

「おほ」

「なぜだい？」

「おほほほほほ」

「気味の悪いわり笑い方をするじゃないか。なぜだい？」

「あんた一人ひとりの留守が心配やさかい」

「ばかをいうぜ。お豊の前でそんな事いうやつがあるものか。お豊、母おつかさんの言ってる事ことア皆うそだぜ、真まに受けるなよ」

「おほほほ。どないに口で言わはつてもあかんさかいなア」

「ばかをいうな。それよりか——なお豊、気を広く持て、広く。待てば甘露じゃ。今におもしれ工事が出て来るぜ」

五の一

赤坂氷川町ひかわまちなる片岡中将の邸内くりに栗の花咲く六月半ばのある土曜ひるすぎの午後、主人子爵片岡中将はネルの单衣ひとえに鼠縮緬ねずみちりめんの兵へ児こおび帯びして、どっかりと書斎の椅子いすに倚よりぬ。

五十に間はなかるべし。額のあたり少し禿げ、両鬢霜ようやく繁しげからんとす。体量は二十二貫、アラビア種だねの逸物いちもつも將軍の座下に汗すという。両の肩怒りて頸くびを没し、二重ふたえの顚あぎと直ちに胸につづき、安祿山風あんろくざんの腹便々として、牛にも似たる太腿ふとももは行くに相擦あひすれつべし。顔色いろは思い切つて赭あかぐろ黒く、鼻太く、唇厚く、鬚ひげ薄く、眉まゆも薄し。ただこのからだに似げなき両眼細うして光り和らかに、さながら象の目に似たると、今にも笑えまんずる気けはいの断えず口もとにさまよえるとは、いふべからざる愛嬌あいぎようと滑こ稽つけいの嗜味しみをば著しく描いき出しぬ。

ある年の秋の事とか、中将微服して山里に獵かり暮らし、姥ばばひとり住む山小屋に渋茶一碗わん所望しけるに、姥ばばつくづくと中将の様子

を見て、

「でけえからだ体格だのう。うさぎ兎のひとつもとれたんべいか？」

中将かんじ莞爾として「ちつともとれない」

「それエなせつしよう殺生したあて、あにが商売になるもんかよ。そのからだ体格で日傭取りでもして見ろよ、五十両は大丈夫だあよ」

「月にかい？」

「あに！ 年によ。悪いわりこたあいわねえだから、日傭取るだあよ。いつだあておらが世話あしてやる」

「おう、それはありがたい。また頼みに来るかもしれん」

「そうしろよ、そうしろよ。そのでけえからだ体格で殺生は惜しいこんだ」

こは中将の知己の間に一つ話として時々出づる佳話なりとか。知らぬ目よりはさこそ見ゆらめ。知れる目よりはこの大山巖々として物に動ぜぬ大器量の將軍をば、まさかの時の鉄壁とたのみて、その二十二貫小山のごとき体格と常に怡然たる神色とはいぜんきようきよう

洵々たる三軍の心をも安からしむべし。

肱近ひじちか

のテーブルには青地交趾の鉢はちに植えたる武者立の細

竹くを置きり。頭上には高く両陛下の御影ぎよえいを掲げつ。下りてか

なたの一面には「成仁じんをなす」の額あり。落款は南洲なんしゅうなり。架

上に書あり。暖炉縁マンテルピースの上、すみなる三角棚だなの上には、内外人

の写真七八枚、軍服あり、平装のもあり。

草色のカーテンを絞りて、東南二方の窓は六つとも朗らかに明

け放ちたり。東の方は眼下かたに人うごめき家かさなれる谷町を見越して、青々としたる靈南台の上より、愛宕塔あたごとうの尖さき、尺ばかりあらわれたるを望む。鳶とびありてその上をめぐりつ。南は栗くりの花咲きこぼれたる庭なり。その絶え間より氷川社ひかわやしろの銀杏いちしようの梢青銚こざしあおほこをたてしように見ゆ。

窓より見晴らす初夏の空あおおと浅黄縹あさぎじゆす子なんどのように光りつ。見る目清すがすが々しき緑葉あおばのそこここに、卵白色たまごいろの栗の花ふさふさと満樹いっぱいに咲きて、画えがけるごとく空の碧みどりに映りたり。窓近くさし出いでたる一枝は、枝の武骨なるに似ず、日光ひのさすままに緑玉へきぎよく、碧玉こはく、琥珀こはくさまざまの色に透きつ幽かすめるその葉の間あいあ々に、肩エポレット 総そう そのままの花ゆらゆらと枝もたわわに咲けるが、

吹くとはなくて大氣のふるうごとに香は忍びやかに書齋に音ずれ、薄紫の影は窓の闖しきみより主人が左手ゆんでに持てる「西比利亞サイベリア鐵道の現況」のページのの上にちらちらおどりぬ。

主人はしばしその細き目を閉じて、太息といきつきしが、またおもむろに開きたる目を冊子の上に注ぎつ。

いづくにか、車井くるまいの響おとからからと珠たまをまるばすように聞こえしが、またやみぬ。

午後の静寂しずけさは一邸に満ちたり。

たちまち虚すきをねらう二人ふたりの曲者くせものあり。尺ばかり透ときし扉びらよりそつと頭かしらをさし入れて、また引き込めつ。忍び笑いの声は戸の外ひざに渦まきぬ。一人ひとりの曲者は八つばかりの男児おのこなり。膝ひざぎりの水兵

の服を着て、編み上げ靴をはきたり。一人の曲者は五つか、六つなるべし、紫矢やがすり絣ひとえくれないの単衣に紅の帯して、髪ははらりと目の上まで散らせり。

二人の曲者はしばし戸の外にたゆたいしが、今はこらえ兼ねたるように四つの手ひとしく扉をおしひらきて、一斉に突貫し、室のなかほどに横たわりし新聞綴とじこみ込の堡ほうるい壘を難なく乗り越え、真一文字に中将の椅子いすに攻め寄せて、水兵は右、振り分け髪は左、小山のごとき中将の膝を生けどり、

「おとうさま！」

五の二

「おう、帰ったか」

いかにもゆつたりとその便々たる腹の底より押しあげたような
る乙音^{ベース}を発しつつ、中將はにつこりと笑^えみて、その重やかなる手
して右に水兵の肩をたたき、左に振り分け髪のその前髪をかいな
でつ。

「どうだ、小試験は？ でけたか？」

「僕アね、僕アね、おとうさま、僕ア算術は甲」

「あたしね、おとうさま、今日^{きょう}は縫い取りがよくできたツて先生
おほめなすツてよ」

と振り分け髪はふところより幼稚園の製こしらえもの作物を取り出いだして中

将の膝の上に置く。

「おう、こら立派にできたぞ」

「それからね、習字に読書が乙で、あとはみんな丙なの、とうとみなかみ水上に負けちゃった。僕アくやくしくツて仕方がないの」

「勉強するさ——今日は修身の話は何じやったか？」

水兵は快然と笑みつつ、「今日はね、おとうさま、楠くすのきま正ま

行らの話よ。僕正行ア大好き。正行とナポレオンはどつちがエライの？」

「どつちもエライさ」

「僕アね、おとうさま、正行ア好きだけど、海軍がなお好きよ。おとうさまが陸軍だから、僕ア海軍になるんだ」

「はははは。川島の兄にいさん君の弟子になるのか？」

「だって、川島の兄にいさん君なんか少尉だもの。僕ア中将になるんだ」

「なぜ大将にやならんか？」

「だって、おとうさまも中将だからさ。中将は少尉よかエライんだね、おとうさま」

「少尉でも、中将でも、勉強する者がエライじゃ」

「あたしね、おとうさま、おとうさままでばヨウおとうさま」と振り分け髪はつかまりたる中将の膝を頤はねだい顔台にしてからだを上下うえしたに揺すりながら、「今日はね、おもしろいお話を聞いてよ、あの兎うさぎと亀かめのお話を聞いてよ、言つて見ましようか、——ある所に一ぴきの兎と亀がおりました——あらおかあさまいらッしてよ」

柱時計の午後二点をうつ拍子に、入り来たりしは三十八九の丈たけ高き婦人なり。束髪の前髪をきりて、ちぢらしたるを、隆たかき額の上にて二つに分けたり。やや大きな目少しく釣りて、どこやらちと険なる所あり。地色の黒きにうつすり刷はき、唇くちびるをまれに漏るる齒はまばゆきまで皓しろくみがきぬ。パツとしたお召の単衣ひとえに黒く繻子ろじゆすの丸帯、左右の指に宝たま石入りの金環あたえ価高かるべきをさしたり。

「またおとうさまに甘えているね」

「なにさ、今学校の成績を聞いてた所じゃ。——さあ、これからおとうさんのおけいこじゃ。みんな外で遊べ遊べ。あとで運動に行くぞ」

「まあ、うれしい」

「万歳！」

両児ふたりは嬉々ききとして、互いにもつれつ、からみつ、前になりあとになりて、室を出いで去りしが、やがて「万歳！」「兄にいさまあたしもよ」と叫ぶ声はるかに聞こえたり。

「どんなに申しても、良人あなたはやっぱり甘くなさいますよ」

中将はほほえみつ。「何、そうでもないが、子供はかあいがツた方がいいさ」

「でもあなた、嚴父慈母と俗にも申しますに、あなたがかあいがツてばかりおやんなさいますから、ほんとに逆さまになツてしまツて、わたくしは始終しかり通しで、悪にくまれ役はわたくしひとりで

すわ」

「まあそう短兵急たんべいききゆうに攻めんでもええじゃないか。どうかお手
柔らかに——先生はまずそこにおかけください。はははは」

打ち笑いつつ中将は立つてテーブルの上よりふるきローヤルの
第三読リードル本を取りて、片唾かたずをのみつつ、薩音さつおんまじりの怪しき英
語を読み始めぬ。静聴する婦人——夫人はしきりに発音の誤りを
正しおる。

こは中将の日課なり。維新の騒ぎに一介の武夫として身を起こ
したる子爵は、身生のそうぼう忙おに逐おわれて外国語を修むるのひまも
なかりしが、昨年来予備となりて少し閑暇を得てければ、このお
りにとまず英語に攻めかかれるなり。教師には手近の夫人しげこ繁子。

長州の名ある士^{さむらい}人の娘にて、久しく英国ロンドンに留学しつれば、英語は大抵の男子も及ばぬまで達人なりとか。げにもロンドンの煙^{けむ}にまかれし夫人は、何事によらず洋風を重んじて、家政の整理、子供の教育、皆わが洋のほかにて見もし聞きもせし通りに行わんとあせれど、事おおかたは志^{たが}と違^{ちが}いて、僕^{おとこ}婢^{おんな}は陰にわが世なれぬをあざけり、子供はおのずから寛大なる父にのみならず、かつ良人^{おつと}の何事も鷹揚^{おうよう}に東洋風なるが、まず夫人不平の種^た子^ねなりけるなり。

中將が千辛万苦して一ページを読み終わり、まさに訳読にかか
らんとする所に、扉^と翻^{くれない}りて紅のリボンかけたる垂髪^{さげがみ}の——十五ば
かりの少女^{おとめ}入り来たり、中將が大の手に小^ちさき読本をささげ読め

るさまのおかしきを、ほほと笑いつ。

「おかあさま、飯田町いいたまちの伯母様おばがいらツしやいましてよ」

「そう」と見るべく見るべからざるほどのしわを眉まゆの間に寄せながら、ちよつと中将の顔をうかがう。

中将はおもむろにたち上がりて、椅子を片寄せ「こちへ御案内申しな」

五の三

「御免ください」

とはいって来しは四十五六とも見ゆる品よき婦人、目病やましき

にや、水色の眼鏡めがねをかけたなり。顔のどことなく伊香保の三階に見し人に似たりと思うもそのはずなるべし。こは片岡中將の先妻の姉清子せいことて、貴族院議員子爵加藤俊明かとうとしあき氏の夫人、媒妁なかだちとして浪子を川島家に嫁とつがしつるもこの夫婦なりけるなり。

中將はにこやかにたちて椅子をすすめ、椅子に向かえる窓の帷とばりを少し引き立てながら、

「さあ、どうか。非常にごぶさたをしました。御主人おうちじゃ相変わらずお忙せわしいでしょうな。はははははは」

「まるで橐駝師うえきやでね、木鋏はさみは放しませんよ。ほほほほ。まだ菖蒲しょうぶには早いのですが、自慢の朝鮮柘榴ざくろが花盛りで、薔薇ばらもまだ残つてますからどうかおほめに来てくださいますて、ね、くれぐ

れ申しましたよ。ほほほほ。——どうか、毅き一いさんや道みちちゃんをお連れなすつて」と水色の眼鏡は片岡夫人の方かたに向かいぬ。

打ち明けていえば、子爵夫人はあまり水色の眼鏡をば好まぬなり。教育の差ちがい、氣質の異なり、そはもちろんの事として、先妻の姉——これが始終心にわだかまりて、不快の種たね子となれるなり。

われひとり主人中將の心を占領して、われひとり家に女主人あるじの威光を振るわんずる鼻さきへ、先妻の姉なる人のしばしば出入して、亡なき妻の面影おもかげを主人の眼前めざきに浮かぶるのみか、口にこそ出いさね、わがこれをも昔の名残なごりとし疎うとめる浪子うらご、姥うばの幾らに同情を寄せ、死せる孔こう明めいのそれならねども、何かにつけてみまかりし人の影をよび起こしてわれと争わすが、はなはだ快からざりしなり。今

やその浪子と姥の幾はようやくに去りて、治外の法権撤れしはやや心安きに似たれど、今もかの水色眼鏡の顔見るごとに、髻髻墓中の人の出で来たりてわれと良人を争い、主婦の権力を争い、せつかく立てし教育の方法家政の経綸をも争わんずる心地しておのずから安からず覚ゆるなりけり。

水色の眼鏡は蝦夷錦の信玄袋より瓶詰の菓子を取り出し

「もらい物ですが、毅一さんと道ちゃんに。まだ学校ですか、見えませんねエ。ああ、そうですね。——それからこれは駒さんと紅のりボンの少女に紫陽花の花簪を与えつ。

「いつもいつもお気の毒さまですねエ、どんなに喜びましょう」と言いつつ子爵夫人は件の瓶くだんをテーブルの上に置きぬ。

おりから婢おんなの来たりて、赤十字社のお方の奥様に御面会なされたしというに、子爵夫人は会釈して場をはずしぬ。室を出でける時、あとよりつきて出いでし少女おとめを小手招きして、何事をかささやきつ。小戻りして、窓のカーテンの陰うちに内の話を立ち聞おとめく少女をあとに残して、夫人は廊下伝いに応接間かたの方へ行きたり。紅のりボンのお駒というは、今年十五にて、これも先妻の腹なりしが、夫人は姉の浪子を疎うとめるに引きかえてお駒を愛しぬ。寡ことばすくな言ことにして何事も内気なる浪子を、意地わるき拗すね者とのみ思い誤りし夫人は、姉に比してやや狭きやんなる妹いもとのおのが氣質きしに似たるを喜び、

一は姉へのあてつけに、一はまた継子まごとして愛せぬものかと世間に
見せたき心も——ありて、父の愛の姉に注げるに對しておのずか
ら味方を妹に求めぬ。

わたくしづよ

私 強たぢき人の性質として、ある方かたには人の思わくも思わずわ

が思うままにやり通すこともあれど、また思いのほかにもろくて
人の評判に氣をかねるものなり。 畢ひつきよう 竟名と利とあわせ収めて、

好きなき事する上に人によく思われんとするは、わがまま者の常な
り。かかる人に限りて、おのずからへつらいを喜ぶ。子爵夫人は
男まさりの、しかも洋風仕込みの、議論にかけては威命天下に響
ける夫中將にすら負ひけを取らねど、中將のいたるところ友を作り逢あ
う人ごとに慕わるるに引きかえて、愛なき身には味方なく、心さ

びしきままにおのずからへつらい寄る人をば喜びつ。召使いの僕おとこおんなことおそ婢も言に訥きはいつか退けられて、世辞よきが用いられるようになれば、幼き駒子も必ずしも姉を忌むにはあらざれど、姉をそし譏るが継母の気に入るを覚えてより、ついには告げ口の癖をなして、姥うばの幾に顔しかめさせしも一度二度にはあらず。されば姉は嫁とつぎての今までも、継母のためには細作をも務むるなりけり。

東側の縁の、二つ目の窓の陰に身を側そばめて、聞きおれば、時々腹より押し出したような父の笑い声、凜りんとした伯母の笑い声、かわるがわる聞こえしが、後には話し声のようやく低こえひく音になりて、「姑しゅうとめ」「浪さん」などのとぎれとぎれに聞こゆるに、紅あかリボンの少女おとめはいよよ耳傾けて聞き居たり。

五の四

「四し百しやアく余州を挙こうぞる、十う万ん余騎の敵い、なんぞおそれ
 ンわアれに、鎌かまくら倉らア男いありイ」

と足拍子踏みながらやつて来しきつきの水兵、目早く縁側にた
 たずめる紅あかリボンを見つけて、紅リボンがしきりに手もて口をお
 おいて見せ、頭かしらを掉ふり手を振りて見せるも委細かまわず「姉ねえさま
 姉さま」と走り寄り「何してるの？」と問いすがり、姉がしきり
 に頭かしらをふるを「何？ 何？」と問うに、紅リボンは顔をしかめて
 「いやな人だよ」と思わず声高こゝろに言いつて、しまつたりと言い顔に

肩をそびやかし、そうそう々に去り行きたり。

「ヤアイ、逃げた、ヤアイ」

と叫びながら、水兵は父の書齋に入りつ。来客の顔を見るよりにつこと笑いて、ちよつと頭かしらを下げながらつと父の膝ひざにすがりぬ。「おや毅き一さん、すこし見ないうちに、また大きくなつたようですね。毎日学校ですか。そう、算術が甲？よく勉強しましたねエ。近いうちにおとうさまやおかあさまと伯母さんところにおいてなさいな」

「道みちはどうした？おう、そうか。そうら、伯母様がこんなものをくださつたぞ。うれしいか、あはははは」と菓子びんの瓶を見せながら「かあさんはどうした？まだ客か？伯母様がもうお帰り

なさる、とそう言つて来い」

出いで行く子供のあと見送りながら、主人中將はじつと水色眼鏡の顔を見つめて、

「じゃ幾の事はそうきめてどうか角立かどたたぬように——はあそう願
いましょう。いや実はわたしもそんな事がなけりやいいがと思つ
たくらいで、まあやらない方じやつたが、浪がしきりに言うし、
自身も懇望こんもうしちよつたものじゃから——はあ、そう、はあ、は
あ、何分願います」

語半ばに入はいり来し子爵夫人しげこ繁子、水色眼鏡の方かたをちらと見て

「もうお帰りでございますの？ あいにくの来客で——いえ、今
帰りました。なに、また慈善会の相談ですよ。どうせ物にもなり

ますまいが。本当に今日きょうはお愛想あいそもございませんで、どうぞ千鶴ちず子さんによろしく——浪さんがいなくなりましたらちよつとも遊びこにいらつしやいませんねエ」

「こないだから少し加減が悪かつたものですから、どこにもござさたばかりいたします——では」と信玄袋をとりておもむろに立てば、

中將もやおら体たいを起こして「どれそこまで運動かたがた、なにそこまでじゃ、そら毅き一いも道みちも運動に行くぞ」

出いづるを送りし夫人繁子はやがて居間の安樂椅子に腰かけて、慈善会の趣意書がきを見ながら、駒子を手招きて、

「駒さん、何の話だったかい？」

「あのね、おかあさま、よくはわからなかつたけども、何だか幾の事ですわ」

「そう？ 幾」

「あのね、川島の老^{おばあさん}母^{はは}がね、リュウマチで肩が痛んでね、それでこのごろは大層気むずかしいのですと。それにね、幾が姉^{ねえ}さん^{ねえ}にね、姉さんのお部屋^{へや}でね、あの、奥様、こちらの御隠居様はどうしてあんなに御癩癩^{ごかんしやく}が出るのでございましょう、本当に奥様^{つろ}お辛^{つろ}うございますねエ、でもお年寄りの事ですから、どうせ永^{なが}い事じゃございませぬ、てね、そんなに言いましたとき。本当にばかですよ、幾はねエ、おかあさま」

「どこに行ってもいい事はしないよ。困^{ばあ}った姥^{ばあ}じやないかねエ」

「それからねエ、おかあさま、ちようどその時縁側をおばあさん老母が通つてね、すっかり聞いてしまつて、それはそれはひどく怒つてね」

「罰ばちだよ！」

「怒つてね、それで姉さんが心配して、飯田町いいだまちの伯母様に相談してね」

「伯母様に!？」

「だつて姉さんは、いつでも伯母様にばかり何でも相談するのですもの」

夫人はにがわら苦笑いしつ。

「それから？」

「それからね、おとうさまが幾は別荘番にやるからッてね」

「そう」と額をいとど曇らしながら「それツきりかい？」

「それから、まだ聞くのでしたけども、ちようど毅き一さんが来て

——

六の一

武男が母は、名をお慶けいと言いて今年五十三、時々リユウマチスの起これど、そのほかは無病息災、麴こうじ町上二番町の邸やしきより亡夫の眠る品川しながわ東海寺とうかいじまで徒歩かちの往来容易なりという。体重は十九貫、公侯伯子男爵の女にょしやう性せうを通じて、体格がらにかけては

関脇せきわきは確かとの評あり。しかしその肥大も実は五六年前ぜん前夫み通

ちたけ

武たけの病没したる後の事にて、その以前はやせぎすの色蒼あおざめて、

病人のようなりしという。さればお圧しつけられしゴム球まりの手を離

されてぶくぶくと膨ふくれ上がる類たぐいにやという者もありき。

亡夫はげいはん覺藩の軽き城下士さむらいにて、お慶の縁づきて来し時は、太

いこう

閣いこう様に少しましなる婚礼をなしたりしが、維新の風雲に際会し

て身を起こし、おおくぼこうとう大久保甲東に見込まれて久しく各地れいじんに令尹れいじんを

務め、一時探題の名は世に聞こえぬ。しかも特もちまえ質もちまえのわがまま剛

情が累をなして、明治政府に友少なく、浪子なかだちを媒なせる加藤子爵なな

どはその少なき友の一人にんなりき。甲東没後とはかく志を得ずして

世をおえつ。男爵を得しも、実は生まれ所のよかりしおかげ、と

いう者もありし。されば剛情者、わがまま者、かんしゃく癩癩持ちの通

武はいつもおうおう怏々として不平を酒杯さけに漏らしつ。三合入りの大杯

たてつけに五つも重ねて、赤鬼のごとくなりつつ、肩を掉ふつて県

会に臨めば、議員がんしよくに顔色ある者少なかりしとか。さもありつらん。

されば川島家はつねに戒嚴令もとの下にありて、家族は避雷針なき

大木の下に夏住むごとく、戦々きようきよう兢兢々として明かし暮らしぬ。

父の膝ひざをばわが舞踏場ばとして、父にまさる遊び相手は世になきよ

うに幼き時より思い込みし武男のほかは、夫人の慶子はもとより

奴婢ぬひ出入りの者果ては居間の柱まで主人が鉄拳てっけんの味を知らぬ者

なく、今は紳商とて世に知られたるかの山木たまものごときもこの賜物

を頂ちようだい戴だいして痛み入りしこともたびたびなりけるが、何これし

きの下され物、もうけさして賜わると思えば、なあに廉やすい所得税だ、としばしは伺候しては戴いたきける。右の通りの次第なれば、それ御前の御機嫌ごきげんがわるいといえ、台所の鼠ねずみまでひつそりとして、じんらい迅雷一声奥より響いて耳の太き下女手に持つほうちよう庖丁取り落とし、用ありて私宅へ来る属官などはまず裏口に回って今日きようの天気予報を聞くくらいなりし。

三十年から連れ添う夫人お慶の身になつては、なかなかひと通りのつらさにあらず。嫁に來ての当座はさすがに舅しゅうしゅうとめや姑もありて夫の氣質そうも覚えず過ごせしが、ほどなく姑舅と相ついで果てられし後は、夫の本性ありありと拝まれて、夫人も胸をつきぬ。初め五六度たびは夫人もちよいと盾たてついて見しが、とてもむだと悟つ

ては、もはや争わず、韓信流に負けて匍伏し、さもなければ三十六計のその随一をとりて逃げつ。そうするうちにはちつとは呼吸ものみ込みて三度の事は二度で済むようになりしが、さりとして夫の気質は年とともに改まらず。末の三四年は別してはげしくなりて、不平が煽る無理酒の焰に、燃ゆるがごとき癩癩を、二十年の上もそれで鍛われし夫人もさすがにあしらいかねて、武男という子もあり、鬢びんに白髪しらがもまじれるさえ打ち忘れて、知事様の奥方男爵夫人と人にいわるる榮耀えいようも物かは、いつそのつらさにかえて墓守爺はかもりの嬪かかともなりて世を樂に過ごして見たしという考えのむらむらとわきたることもありしが、そうこうする間まについて三十年うっかりと過ごして、そのつれなき夫通武が目を瞑ねぶつて棺のな

かに仰向けに臥し姿を見し時は、ほっと息はつきながら、さて偽りならぬ涙もほろほろとこぼれぬ。

涙はこぼれしが、息をつきぬ。息とともに勢いもつきぬ。夫通武存命の間は、その大きな体と大きな声にかき消されてどこにいるとも知れざりし夫人、奥の間よりのこのこ出で来たり、見る見る家いっばいにふくれ出しぬ。いつも主人のそばに肩をすばめて細くなりて居し夫人を見し輩は、いずれもあきれ果てつ。もつとも西洋の学者の説にては、夫婦は永くなるほど容貌氣質まで似て来るものといえるが、なるほど近ごろの夫人が物ごし格好、その濃き眉毛をひくひく動かして、煙管片手に相手の顔をじつと見る様子より、起居の荒さ、それよりも第一癩癩が似た

とは愚か亡くなられし男爵そのままという者もありき。

江戸の敵かたきを長崎で討つうつといふことあり。「世の中の事は概して

江戸の敵を長崎で討つものなり。在野党の代議士今日議院に慄こうが慨い激烈の演説をなして、盛んに政府を攻撃したもう。至極結構

なれども、実はその気焰きえんの一半は、昨夜宅うちにてさんざんに高利

貸りーむを喫くいたまいし鬱憤うつぶんと聞いて知れば、ありがた味も半ば減

ずるわけなり。されば南シナ海の低気圧は岐阜愛知ぎふあいちに洪水を起こ

し、タスカローラの陥落は三陸に海嘯かいしやうを見舞い、師直もろなおはか

なわぬ恋のやけ腹を「物の用にたたぬ能書てかき」に立つるなり。宇宙

はただ平均、物は皆その平を求むるなり。しこうしてその平均を

求むるに、吝嗇者りんしやくものの日済ひなしを督促はたするように、われよりあせりて

今戻せ明日返せとせがむが小^{しょうじん}人にて、いわゆる大人^{たいじん}とは一切の勘定を天道様の銀行に任して、われは真一文字にわが分をかせぐ者ぞ」とある人情博士^{はかせ}はのたまひける。

しかし凡夫^{ぼんぷ}は平均を目の前に求め、その求むるや物体運動の法則にしたがいて、水の低きにつくがごとく、障害の少なき方に向かう。されば川島未亡人も三十年の辛抱、こらえこらえし堪忍^{かんにん}の水門、夫の棺の蓋閉^{ふた}ずるより早く、さつと押し開いて一度に切つて流しぬ。世に恐ろしと思ふ一人^{ひとり}は、もはやいかに拳^{こぶし}を伸ばすもわが頭^{こうべ}には届かぬ遠方へ逝^ゆきぬ。今まで黙りて居しは意気^{いき}地なきのにはあらず、夫死してもわれは生きたりと言ひ顔に、知らず知らず積みし貸し金、利に利をつけてむやみに手近の者に督促^{はた}り

始めぬ。その癩癩も、亡くなられし男爵は英雄肌はだの人物だけ、迷惑にもまたどこやらに小気味よきところもありたるが、それほどちからの力量はなしにわけわからず、狭くひがみてわがまま強き奥様より出いでては、ただただむやみにつらくて、奉公人は故男爵の時よりも泣きける。

浪子の姑はこの通りの人なりき。

六の二

まるまげあげまき丸鬚を揚卷あげまきにかえしそのおりなどは、まだ「お嬢様、おやすともくお伴ともいたしまししょう」と見当違いの車くるま夫まやに言われて、召使い

の者に奥様と呼びかけられて返事にたゆとう事はなきようになれば、花嫁の心もまず少しは落ちつきで、初々ういらいしさ恥ずかしさの狭霧さぎりに朦朧ぼいやりとせしあたりのようすもようよう目に分わかたるようになりぬ。

家ごとに変わるは家風、御身おんみには言つて聞かすまでもなければ、構えて実家さとを背負うて先方さきへ行ききたもうな、片岡浪は今日限り亡くなつて今よりは川島浪よりほかになきを忘るるな。とはや晴れの衣装着て馬車に乗らんとする前に父の書齋に呼ばれてねんごろに言い聞かされしを忘れしにはあらねど、さて来て見れば、家風の相違も大抵の事にはあらざりけり。

資産しんだいはむしろ実家さとにも優まさりたらんか。新華族のなかにはまず

屈指ゆびおりといわるるだけ、武男の父が久しく県令知事務めたる間に
 積みし財たからは鉅万きよまんに上りぬ。さりながら実家さとにては、父中將の名
 声海内かいだいに噪さわぎ、今は予備におれど交際さわ広く、昇日のぼるひの勢いさか
 んなるに引きかえて、こなたは武男の父通武が没後は、存生ぞんじよう
 のみぎり何かとたよりて来し大抵やからの輩はおのずから足を遠くし、
 その上親しんせき戚せきも少なく、知己とても多からず、未亡人おふくろは人好きの
 せぬ方なる上に、これより家声を興すべき当主はまだ年若とよどにて官
 等ひくも卑ひくき家にあることもまれなれば、家運はおのずから止とどめる水
 のごとき模様あり。実家さとにては、継母が派手な西洋好み、もちろ
 ん経済の講義は得意にて妙な所に節儉を行ない「奥様は土産みやげのや
 りかたもご存じない」と婢おんなどもの陰口にかかることはあれど、そ

こは軍人交際づきあいの概して何事も派手に押し出してする方なるが、
こなたはどこまでも昔風むしろ田舎風いなかふうの、よくいえば昔忘れぬ
たしなみなれど、実は趣味も理屈もやはり米から自分に呑ついたる
時にかわらぬ未亡人、何でもかでも自分でせねば頭が痛く、亡夫
の時僕ぼくかなんそのように使われし田崎某たざきなにかしといえる正直一匁の
男を執事として、これを相手に月に薪まきが何把炭ばが何俵の勘定まで
せられ、「母さんおつか、そんな事しなくたって、菓子なら風月ふうげつから
でもお取とりなさい」と時たま帰つて来て武男が言えど、やはり手
製の田舎羊羹いなかようかんむしやりむしやりと頬ほばらるるといふうなれば、
姥うばの幾が浪子うらなについて来しすら「大家たいけはどうしても違ちがうもんじや、
武男が五器わん椀下わんげるようにならにやよいが」など常に当てこすり

ていられたれば、幾の排斥もあながち障子の外の立ち聞きゆえばかりではあらざりしなるべし。

伶俐りこうなようでも十八の花嫁、まるきり違いし家風のなかに突然入り込みては、さすが事ごとに惑えるも無理にはあらじ。されども浪子は父の訓いましめ戒めいここぞと、われを抑おさえて何も家風に従わんと決心の臍ほぞを固めつ。その決心を試むる機会は須臾すゆに來たりぬ。

伊香保より歸りてほどなく、武男は遠洋航海におもむきつ。軍人の妻となる身は、留守がちは覚悟の上なれど、新婚間もなき別離はらわたはいとど腸はらわたを断ちて、その当座は手のうちの玉をとられしうにほとほと何も手につかざりし。

おとうさまが縁談の初めに逢あいたもうて至極氣に入ったとのた

まいしも、添って見てげにと思ひ当たりぬ。鷹揚おうようにして男らしく、さつぱりとして情け深く寸分鄙吝いやしい所なき、本当に若いおとうさまのそばにいるような、そういえば肩を揺すつてドシドシお歩きなさる様子、子供のよ様な笑い声までおとうさまにそっくり、ああうれしいと浪子は一心にかしずけば、武男も初めて持ちし妻というものの限りなくかわゆく、独ひとりご子の身は妹まで添えて得たらん心地こころちして「浪さん、浪さん」といたわりつ。まだ三月に足らぬ契りも、過ぐる世より相知れるように親しめば、しばしの別離わかれもかれこれともに限りなき傷心の種子たねとはなりけるなり。さりながら浪子は永ながく別離わかれを傷いたむ暇なかりき。武男が出発せし後ほどもなく姑が持病のリユウマチスはげしく起こりて例の癩かんしやく癩

のはなはだしく、幾を实家へ戻せし後は、別して辛抱の力をためず機会も多かりし。

新入の学生、その当座は故参のためにさんざんにいじめられるれど、のちにはおのれ故参になりて、あとの新入生をいじめるが、何よりの楽しみなりと書きし人もありき。綿帽子脱つての心細さ、たよりなさを覚えているほどの姑、義理にも嫁をいじめられるものでなければ、そこは凡夫ほんぶのあさましく、花嫁の花落ちて、姑と名がつけば、さて手ごろの嫁は来るなり、わがままも出て、いつのまにかわがつい先年まで大の大の大きらいなりし姑そのままとなるものなり。「それぞれその衿おくみは四寸にしてこう返して、イイエそうじやありません、こつちよこしなさい、二十歳はたちにもなツて、

お嫁さまもよくできた、へへへへ」とあざ笑う声から目つき、われも二十はたちの花嫁の時ちようどそうしてしかられしが、ああわれながら恐ろしいとはツと思つて改むるほどの姑はまだ上の上、目にて目を償い、齒にて齒を償い、いわゆる江戸の姑のその敵かたきを長崎の嫁で討うつて、知らず知らず平均をわが一代のうちひとりに求むるもの少なからぬが世の中。浪子の姑もまたその一人なりき。

西洋流の継母に鍛ねわれて、今また昔風の姑に練ねらるる浪子。病める老としより人の用しげく婢おんなを呼ばるるゆえ、しいて「わたくしがいたしましよ」と引き取つてなれぬこととて意に満たぬことあれば、こなたには礼を言いてわざと召使いの者を例の大だい音おん声しょうにうしかり飛ばさるるその声は、十年がほども継母の雄弁冷語を聞き

尽くしたる耳にも今さらのよう^にに聞こえぬ。それも初めしばしが
 ほどにて、後には癩^{かんしゃく}癩^{ほこさき}の鋒直接^にに吾身^{われ}に向かうようになりつ。
 幾が去りし後は、たれ慰むる者もなく、時々はどうやらまた昔の
 日陰に立ち戻りし心地^{こころ}もせしが、部屋^{へや}に帰つて机の上の銀の写真
 掛けにかかつたたくましましき海軍士官の面影^{おもかげ}を見ては、うれしさ
 恋しさなつかしさのむらむらと込み上げて、そつと手にとり、食
 い入るようにながめつめ、キツスし、頬^{ほお}ずりして、今そこにその
 人のいるように「早く帰つてちょうだい」とささやきつ。良人^{おとと}の
 ためにはいかなる辛抱も楽しと思ひて、われを捨てて姑^{つか}に事えぬ。

七の一

流汗を揮ふるいつつ華氏九十九度の香港ほんこんより申し上げ候そろ。佐世させ
 保拔ほばつびよう 錨よう までは先便すでに申し上げ置きたる通りに有これあり之候。
 さて佐世保出帆後は連日の快晴にて暑氣や燂くがごとく、さすが
 神州海国男子も少々辟易へきえき、もつとも同僚士官及び兵のうち八
 九名日射病に襲われたる者有これあり之候えども、小生は至極健全、
 毫ごうも病室の厄介に相成り申さず。ただしご存じ通りの黒くろんぼう人
 が赤道近き烈日に焦がされたため、いよいよもつて大々の黒
 面漢と相成り、今日こんにちちよつと同僚と上陸し、市中の理髪店にい
 たり候ところ、ふと鏡を見てわれながらびつくりいたし候。意い
 地じわるき同僚が、君、どう、着色写真でも撮とつて、君のブライ

ドに送らんかと戯れ候も一興に候。途中は右の通り快晴（もつとも一回モンソーンの来襲ありたれども）一同万歳を唱えて昨早朝いかり錨を当湾内に投じ申し候。

先日のお手紙は佐世保にて落手、一読再読いたし候。母上リヨウマチス、年来の御持病、誠に困りたる事に候。しかし今年浪さんが控えられ候事ゆえ、小生も大きに安心に候。何とぞ小生に代わりてよくよく心を御おんもち用いくださるべく候。御病気の節は別して御気分よろしからざる方なれば、浪さんも定めていろいろと骨折らるべく遙ようさつ察いたし候。赤坂の方も定めておかわりもなかるべくと存じ申し候。加藤の伯父さんは相変わきばさみらず木鉢が手を放れ申すまじきか。

幾いくばあ姥あばは帰り候由。何ゆえに候や存ぜず候えども、実に残念の事どもに候。浪さんより便たよりあらばよろしくよろしく伝えらるべく、帰りには姥ばあへ沢山土産みやげを持つて来ると御おんつた伝たえくだされたく候。実に愉快な女にて小生も大好きに候ところ、赤坂の方に帰りしは残念に候。浪さんも何かと不自由にさびしかるべくと存じ候。加藤の伯母様や千鶴ちずこ子こさんは時々まいられ候や。

千々岩ちぢわはおりおりまいり候由。小生らは誠に親類にん少なく、千々岩はその少なき親類にんの一人なれば、母上も自然頼おぼみに思おもはす事に候。同人をよく待たいするも母上に孝行の一これあるに有あるべく候。同人も才気あり胆力ある男なれば、まさかの時の頼みにも相成るべく候。(下略)

香港にて

七月 日

武男

お浪どの

母上に別紙（略之）読んでお聞かせ申し上げられたく候。

当池には四五日碇泊^{ていはく}、食糧など買い入れ、それよりマニラを経て豪州シドニーへ、それよりニューカレドニア、フィジー諸島を経て、サンフランシスコへ、それよりハワイを経て帰国のはずに候。帰国は多分秋に相成り申すべく候。

手紙はサンフランシスコ日本領事館留め置きにして出したま
え。

~~~~~

(前文略) 去る五月は浪さんと伊香保にあり、蕨採りて慰みし  
に今は南半球なる豪州シドニーにあり、サウゾルンクロツスの  
星を仰いでその時を想おもう。奇妙なる世の中に候。先年練習艦に  
て遠洋航海の節は、どうしても時々船ふな暈よを感じしが、今度は  
無病息災われながら達者なるにあきれ候。しかし今回は先年に  
覚えなき感情身につきまとい候。航海中当直の夜よなど、まつ黒

き空に金剛石をまき散らしたるような南天を仰ぎて、ひとり艦  
 橋の上に立つ時は、何とも言い難き感が起こりて、浪さんの姿  
 が目さきにちらちらいたし（女々しと笑いたもうな）候。同僚  
 の前ではさもあらばあれかきようえんせいをおもう家郷思遠征と吟じて平気に澄ま  
 しておれど、（笑いたもうな）浪さんの写真は始終ある人の内  
 ポケツトに潜みおり候。今この手紙を書く時も、宅うちのあの六畳  
 の部屋へやの芭蕉ばしやうの陰の机ほおづえに頬杖ほおづえつきてこの手紙を読む人の面  
 影がすぐそこに見え候（中略）

シドニー港内には夫婦、家族、他人交えずヨットに乗りて遊  
 ぶ者多し。他日功成り名遂げて小生も浪さんも白髪しらがの爺姥じじばばに  
 なる時は、あにただヨットのみならんや、五千トンぐらいの汽

船を一艘いっそうこしらえ、小生が船長となつて、子供や孫を乗組員として世界週航を企て申すべく候。その節はこのシドニーにも来て、何十年前ぜん血氣盛りの海軍少尉の夢を白髪ぜんの浪さんに話し申すべく候（下略）

シドニーにて

八月 日

武男生

浪子さま

七の二

去る七月十五日香港よりお仕出しのおなつかしき玉章たまずさぎとる

手おそしとくりかえしくりかえしくりかえし拜し上げ参らせ候

さ候えははげしき暑さの御おんさわりもあらせられず何より何よ

り御おんうれ嬉しゆう存じ上げ参らせ候 この許もと御母上様御病気もこ

の節は大きいにお快く何とぞ何とぞ御安心遊ばし候ようお願い上げ

参らせ候 わたくし事も毎日とやかくとさびしき日を送りおり

参らせ候 お留守の事にも候えは何とぞ母上様の御ごきげん機嫌に入り

候ようにと心がけおり参らせ候えども不ふつつか束の身は何も至り兼

ね候事のみなれぬこととて何かと失しくじり策のみいたし誠に困り入

り参らせ候 ただただ一日も早く御おん帰り遊ばし健やかなるお顔

を拝し候時を楽しみに毎日暮らしおり参らせ候

赤坂の方も何ぞかわり候事もこれなく無之先日より逗子の別荘の方ずし

へみなみな一 同まいり加藤家も皆々興津の方へまいり東京はさびしき

ことに相成り参らせ候いく幾も一緒に逗子に罷り越し無事相つと

めおり参らせ候 御伝言おんことづけの趣申しつかわし候ところ当人も涙

を流して喜び申し候由くれぐれもよろしく御礼おん申し上げ候よう

申し越し参らせ候

わたくし事も今になりていろいろ勉強の足らざりしをうら憾み参

らせ候 家政の事は女の本分なればよくよく心を用い候よう平か

生父ねがねより戒められ候事とて宅におり候ころよりなるたけその

つもりにて居い参らせ候えども何を申しても女のあさはかにその

ような事はいつでもできるように思いたずらに過ごし参らせ  
 候より今となりてあの事も習つて置けばよかりしこの事も忘れ  
 しと思ひあたる事のみ多く困り入り参らせ候 英語の勉強も御  
 仰せんおおの言も有こと之候これありえばぜひにと心がけ参らせ候えども机の  
 前にばかりすわり候ては母上様の御思召おほしめしもいかがと存ぜられ  
 今しばらくは何よりもまず家政のけいこに打ちかかり申したく  
 何とぞ何とぞ悪あしからず 思おほしめし 召おほしめしのほど願ひ上げ参らせ候

誠におはずかしき事に候えどもどうやらいたし候節はさびし  
 さ悲しさのやる瀬なく早く早く早く御目おんにかかりたく翼あらば  
 おそばに飛んでも行きたく存じ参らせ候事も有これあり之夜ごと日ご  
 とにお写真とお艦ふねの写真を取り出いでてはながめ入り参らせ候

万国地理など学校にては何げなく看過みすごしにいたし候もの近  
 ごろは忘れし地図など今さらにとりいでて今日はお艦ふねのこのあ  
 たりをや過ぎさせたまわん明日あすは明後日あさってはと鉛筆にて地図の上  
 をたどり居参らせ候 ああ男に生まれしならば水兵ともなりて  
 始終おそば離れずおつき申さんをなどあらぬ事まで心に浮かび  
 われとわが身をしかり候ても日々物思いに沈み参らせ候 これ  
 まで何心なく目もとめ申さざりし新聞の天気予報など今在いますあ  
 たりはこのほかと知りながら風など警戒のいで候節は実に実に  
 気にかかり参らせ候 何とぞ何とぞお尊からだ体おんを御大切に……（下  
 文略）

浪より

恋しき

武男様

〃  
〃  
〃  
〃  
〃  
〃  
〃  
〃  
〃  
〃

(上略) 近ごろは夜々よるよるおん御姿の夢に入り実に実に一日千秋の思  
いをなしおり参らせ候 昨夜もごいっしよに艦ふねにて伊香保わらびに蕨  
とりにまいり候ところふとたれかわたくしが私どもの間に立ち入りてお  
姿は遠くなりわたくしは艦ふねより落ちると見て魘おそわれ候ところを  
母上様に起こされようよう胸なでおろし参らせ候 愚痴と存じ

ながらも何とやら氣に相成りそれにつけても御<sup>おん</sup>歸りが待ち遠く  
存じ上げ参らせ候 何も何もお歸りの上にと日<sup>にちにち</sup>々東の空をな  
がめ参らせ候 あるいは行き違いになるや存ぜず候えどもこの  
状はハワイホノルル留め置きにて差し上げ参らせ候（下略）

十月 日

浪より

恋しき恋しき恋しき

武男様

御もとへ

## 中編

## 一の一

今しも午後八時を拍<sup>う</sup>ちたる床の間の置き時計を炬燵<sup>こたつ</sup>の中より顧みて、川島未亡人は

「八時——もう帰りそうなもんじやが」

とつぶやきながら、やおらその肥え太りたる手をさしのべて煙<sup>た</sup>草盆<sup>ぼこ</sup>を引き寄せ、つづけざまに二三服吸いて、耳傾<sup>かたぶ</sup>けつ。山の手

ながら松の内の夜は車東西に行き違いて、隣家には福引きの興やあるらん、若き男女の声しきりにささめきて、おりおりどつと笑う声も手にとるように聞こえぬ。未亡人は舌打ち鳴らしつ。

「何をしとつか。つつ。赤坂へ行くといつもああじゃつで……武

も武、浪も浪、実家も実家じゃ。今時の者はこれじやつでならん」

膝立て直さんとして、持病のリユウマチスの痛所に触れけん、

「あいたあいた」顔をしかめて 癩 癩 まぎれに煙草盆の縁手荒

に打ちたたき「松、松松」とけたたましく小間使いを呼び立つる。

その時おそく「お帰りい」の呼び声勇ましく二挺の車がらがらと

門に入りぬ。

三が日の晴着の裾踏み開きて走せ来たりし小間使いが、「御用

「？」と手をつかえて、「何をうろろうしとつか、早玄関に行きなさい」としかられてあわてて引き下がると、引きちがえに

「母さん、ただいま帰りました」

と凜々しき声に前を払わして手套を脱ぎつつ入り来る武男のあとより、外套と吾妻コートとを婢に渡しつつ、浪子は夫に引き沿うてしとやかに座につき、手をつかえつ。

「おかあさま、大層おそなはりました」

「おおお帰りがい。大分ゆっくりじやったのう。」

「はあ、今日は、なんです、加藤へ寄りますとね、赤坂へ行くならちようどいいからいつしよに行こうツて言いましたな、加藤さんも伯母さんもそれから千鶴子さんも、総勢五人で出かけたので

す。赤坂でも非常の喜びで、幸い客はなし、話がはずんで、ついおそくなつてしまつたのです——ああ酔つた」と熟せる桃のごとくなれる頬ほおをおさえつ、小間使いが持て来し茶をただ一息に飲みほす。

「そうかな。そいはにぎやかでよかつたの。赤坂でもお変わりもないじやろの、浪どん？」

「はい、よろしく申し上げます、まだ伺いもいたしませんで、…いろいろお土産みやげをいただきまして、くれぐれお礼申し上げます「てございます」

「土産みやげといえは、浪さん、あれは…：…うんこれだ、これだ」と浪子がさし出す盆を取り次ぎて、母の前に差し置く。盆には雉子きじひ

とつがい、鳴鶉しぎずらなどうずたかく積み上げたり。

「御獵の品かい、これは沢山に——ごちそうがでくるの」

「なんですよ、母おつかさん、今度は非常の大獵だったそうで、つい大おおみそか

晦日の晩に帰りなすったそうです。ちようど今日は持たしてやろうとしておいでのごでした。まだ明日あすは猪ししが来るそうで——」

「猪しし? ——猪が捕とれ申したか。たしかわたしの方が三歳みつ上じやったの、浪どん。昔から元氣のよか方かたじやったがの」

「それは何ですよ、母おつかさん、非常の元氣で、今度も二日も三日も山に焚火たきびをして露宿のじくしなすったそうですがね。まだなかなか若い者に負けんつもりじやて、そう威張おごっていないさいます」

「そうじやろの、母おつかさんのごとリュウマチスが起こつちやもう仕

方があいませぬ。人間は病氣が一番いけんもんじや。——おおも  
うやがて九時じや。着物どんかえて、やすみなさい。——おお、  
そいから今日はの、武どん。安彦やすひこが来て——」

立ちかかりたる武男はいささか安からぬ色を動かし、浪子もふ  
と耳を傾けつ。

「千々岩が？」

「何か卿おまえに要ようがありそうじやつたが——」

武男は少し考え、「そうですか、私わたくしもぜひ——あわなけりやな  
らん——要ようがありますが。——何ですか、母おつかさん、私の留守に金  
でも借りに来はしませんでしたか」

「なぜ？ ——そんな事はあいませぬ——なぜかい？」

「いや——少し聞き込んだ事もあるのでから——いずれそのうちあいますから——」

「おおそうじゃ、そいからあの山木が来ての」

「は、あの山木のほかですか」

「あれが来てこの——そうじやった、十日にごちそうをすつから、是非卿ぜつせいまえに来てくださいというから」

「うるさいやつですな」

「行ってやんなさい。おとつ父さんの恩を覚えておつがかあいカジやなつか」

「でも——」

「まあ、そういわずと行ってやんなさい——どれ、わたしも寝ま

「しょうか」

「じゃ、母さんおつか、おやすみなさい」

「ではお母様かあ、ちよつと着がえいたしてまいりますから」

若夫婦は打ち連れて、居間へ通りつ。小間使いを相手に、浪子は良人おつとの洋服を脱がせ、琉球りゅうきゅうの綿入れ二枚重ねしをふわ

りと打ちきすれば、武男は無造作に白縮緬しろちりめんの兵児帯へこおび尻高しりだかに引

き結び、やおら安楽椅子いすに倚りぬ。洋服の塵ちりを払いて次の間の衣え

桁こうにかけ、「紅茶を入れるようにしてお置き」と小間使いにいい

つけて、浪子は良人の居間に入りつ。

「あなた、お疲れ遊ばしたでしょう」

葉巻の青き煙けぶりを吹きつつ、今日到来せし年賀状名刺など見てあ

りし武男はふり仰ぎて、

「浪さんこそくたびれたろう、——おおきれい」

「？」

「美しい花嫁様という事さ」

「まあ、いや——あんな言を」

さと顔打ちあかめて、ランプの光まぶしげに、目をそらしたる、

常には蒼き<sup>あお</sup>まで白き顔色の、今ぼうつと桜色<sup>いろ</sup>ににおいて、艶々<sup>つやつや</sup>

とした丸鬚<sup>まるまげ</sup>さながら鏡と照りつ。浪に千鳥の裾模様、黒<sup>くろ</sup>襲<sup>がさね</sup>に

白茶<sup>しらちや</sup>七糸<sup>しゆちん</sup>の丸帯、碧<sup>へきぎ</sup>玉<sup>よく</sup>を刻みし 勿<sup>フオル</sup> 忘<sup>ゲツト</sup> 草<sup>ミノ</sup>の襟<sup>えり</sup>ど

め、（このたび武男が米国より持<sup>も</sup>て来たりしなり）四分<sup>ぶ</sup>の差<sup>はし</sup>六分<sup>ぶ</sup>

の笑<sup>えみ</sup>を含みて、媽然<sup>えんぜん</sup>として燈光<sup>あかり</sup>のうちに立つ姿を、わが妻なが

らいみじと武男は思えるなり。

「本当に浪さんがこう着物をかえていると、まだ昨日きのう来た花嫁の  
ように思うよ」

「あんな言ことを——そんなことをおっしやると往いつてしまいますか  
ら」

「ははははもう言わない言わない。そう逃げんでもいいじゃない  
か」

「ほほほ、ちよつと着がえをいたしてまいりますよ」

## 一の二

武男は昨年の夏初め、新婚間もなく遠洋航海に出で、秋は帰るべかりしに、桑港そうこうに着きける時、器械きやくに修覆しゆふくを要すべき事の起りて、それがために帰期を誤り、旧臘きゆうろう押しつまりて帰朝きやうしやうしつ。今日正月三日というに、年賀をかねて浪子を伴ない加藤家より浪子の実家さとを訪といたるなり。

武男が母は昔気質かたぎの、どちらかといえは西洋せいやうぎらいの方なれば、寝台ねだいに寝いねて匙さじもて食くらうこと思おもいも寄よらねど、さすがに若主人のみは幾分か治外の法権ほうけんを享うけて、十畳のその居間は和洋折衷とも言いいつべく、畳の上に緑色の絨じゆうたん氈たんを敷敷き、テーブルに椅子いす二三脚、床には唐画とうがの山水をかけたれど、楣間びかんには亡父通武みちたけの肖像をかかけ、開かれざる書しよき篋きやうと洋籍の棚たなは片すみに排斥せ

られて、正面の床の間には父が遺愛の備前兼光のびぜんかねみつ一刀を飾り、士官帽と両眼鏡と違い棚に、短剣は床柱にかかりぬ。写真額数多あまた掛けつらねたるうちには、その乗り組める軍艦のえたじまもあり、制服したる青年のおおぜいうつりたるは、江田島えたじまにありけるころのなるべし。テールの上にも二三の写真を飾りたり。両親並びて、五六歳の男児おのこの父の膝よに倚りたるは、武男が幼きころの記念なり。カビネの一人撮ひとりつつしの軍服しゅうとなるは乃舅片岡中将なり。主人が年若く粗豪なるに似もやらず、几案きあん整然として、すみずみにいたるまで一点の塵ちりを留とどめず、あまつさえ古銅瓶くどうびんに早咲きの梅一両枝趣深く活いけたるは、温あたたかき心と細かなる注意と熟練なる手と常にこの室へやに往来するを示しぬ。げにその主ぬしは銅瓶どうびんの下もとに梅花かおりの香を浴びて、

心臓形の銀の写真掛けのうちにほほえめるなり。ランプの光はくまなく室のすみずみまでも照らして、火桶ひおけの炭火は緑の絨氈じゅうたんの上に紫がかりし紅くれないほのおの焰を吐きぬ。

愉快という愉快は世に数あれど、つつがなく長の旅より帰りて、旅衣ふだんぎを平生服きんこちの着心地よきにかえ、窓外にほゆる夜あらしの音を聞きつつ居間の暖炉に足さしのべて、聞きなれし時計きつきつの軋々あぼを聞くは、まったく愉快の一なるべし。いわんやまた阿母老健あぼにして、新妻のさらに愛いとしきあるをや。葉巻かんぼの香しきを吸い、陶然として身を安楽椅子の安きに託したる武男は、今まさにこの楽しみを享うけけるなり。

ただ一つの翳かげは、さきに母の口より聞き、今来訪名刺のうちに

見たる、千々岩安彦の名なり。今日武男は千々岩につきて忌まわしき事を聞きぬ。旧臘某日の事とか、千々岩が勤むる参謀本部に千々岩にあてて一通のはがきを寄せたる者あり、折おり節ふし千々岩は不在なりしを同僚なにがしの某何心なく見るに、高利貸の名高き何なにがし某の貸し金督促状にして、しかのみならずその金額要件は特に朱書してありしという。ただそれのみならず、参謀本部の機密おりおり思いがけなき方角に漏れて、投機商人の利を博することあり。なおその上に、千々岩の姿をあるまじき相場の市いちに見たる者あり。とにかく種々嫌疑けんぎの雲は千々岩の上におおいかかりてあれば、この上とても千々岩には心して、かつ自ら戒かい飭ちよくするよう忠告せよと、参謀本部に長たる某將軍とは爾汝じじよの間なる舅中將しゅうとの話なり

き。

「困った男だ」

かくひとりごちて、武男はまた千々岩の名刺を打ちながめぬ。しかも今の武男は長く不快に縛らるるあたわざるなり。何も直接にあいて問いただしたる上と、思い定めて、心はまた翻然として今の楽しきに返れる時、服きものをあらためし浪子は手ずから紅茶を入れてにこやかに入り来たりぬ。

「おお紅茶、これはありがたい」椅子を離れて火鉢ひばちのそばにあぐらかきつつ、

「母おっかさんは？」

「今おやすみ遊ばしました」紅茶の熱きをすすめつつ、なお紅くれないな

る良人の面をながめ「あなた、お頭痛が遊ばすの？ お酒なんぞ、

召し上がれないのに、あんなに母がおいしいするものですかから」

「なあに——今日は実に愉快だったね、浪さん。阿舅のお話

がおもしろいものだから、きらいな酒までつい過ぎしてしまった。

はははは、本当に浪さんはいいおとっさんをもっているね、浪さん」

浪子はにつこり、ちらと武男の顔をながめて

「その上に——」

「エ？ 何です？」驚き顔に武男はわざと目をみはりつ。

「存じません、ほほほほほ」さと顔あからめ、うつぶきて指環を

ひねる。

「いやこれは大変、浪さんはいつそんなにお世辞が上手じょうずになつたのかい。これでは襟えりどめぐらいは廉やすいもんだ。はははは」

火鉢の上にさしかざしたる掌てのひらにぼうつと薔薇色ばらいろになりし頬を押えつ。少し吐息つきて、

「本当に——永ながい間母様おつかも——どんなにおさびしくツていらつしやいましてしよう。またすぐ勤務おつとめにいらつしやると思うと、日が早くたつてしようがありませんわ」

「始終内うちにいようもんなら、それこそ三日目には、あなた、ちつと運動にでも出ていらつしやいませんか、だろう」

「まあ、あんな言ことを——も一杯ひとつあげましょうか」

くみて差し出す紅茶を一口飲んで、葉巻の灰をほとほと火鉢の

縁にはたきつ、快くあたりを見回して、

「半年の余もハンモックに揺られて、家に帰ると、十畳敷きがつたいないほど広くて何から何まで結構づくめ、まるで極楽だね、浪さん。——ああ、何だか二度蜜月遊ホニムーンをするようだ」

げに新婚間もなく相別れて半年ぶりに再び相あえる今日このごろは、ふたたび新婚の当時は繰り返し、正月の一時に来つらん心地こちせらるるなりけり。

語ことばはしばし絶えぬ。兩人はうつとりしてただ相笑あいえめるのみ。梅の香かは細さいさい々として兩人が火桶ひおけを擁あして相対あひむかえるあたりをめぐる。

浪子はふと思いでたるように顔を上げつ。

「あなたいらつしやいますの、山木に？」

「山木かい、母おつかさんがああおつしやるからね——行かずばなるま

い」

「ほほ、わたくしも行きたいわ」

「行きなさいとも、行こういつしよに」

「ほほほ、よしましょう」

「なぜ？」

「こわいのですもの」

「こわい？ 何が？」

「うらまれてますから、ほほほ」

「うらまれる？ うらむ？ 浪さんを？」

「ほほほ、ありますわ、わたくしをうらんでいなさる方が。おのお豊とよさん……」

「ははは、何を——ばかな。あのばか娘もしようがないね、浪さん。あんな娘でももらい人てがあるかしらん。ははは」

「母おつかさまは、千々岩はあの山木と親しくするから、お豊を妻さいにもらったらよかろうツて、そうおつしやつておいでなさいましたよ」

「千々岩？——千々岩？——あいつ実に困ったやつだ。ずるいやつた知ってたが、まさかあんな嫌疑けんぎを受けようとは思わなかった。いや近ごろの軍人は——僕も軍人だが——実にひどい。ちつとも昔の武士らしい風ふうはありやせん、みんな金のためにかかつてる。何、僕だって軍人は必ず貧乏しなけりやならんというのじやない。

冗費を節して、恒<sup>つね</sup>の産を積んで、まさかの時節<sup>とき</sup>に内顧<sup>うちり</sup>の患<sup>うれい</sup>のないようにするのは、そらあ当然さ。ねエ浪さん。しかし身をもつて国家の干城ともなろうという者がさ、内職に高利を貸したり、あわれむべき兵の衣食をかじったり、御用商人と結託して不義の財をむさぼったりするのは実に用捨がならんじやないか。それに実に不快なは、あの賭博<sup>とばく</sup>だね。僕<sup>ぼく</sup>の同僚などもこそそそやってるやつがあるが、実に不愉快でたまらん。今のやつらは上にへつらつて下からむさぼることばかり知つとる」

今そこに当の敵のあるらんように息巻き荒く攻め立つるまだ無経験の海軍少尉を、身にしみて聞き惚<sup>ほ</sup>るる浪子は勇々<sup>ゆうゆう</sup>しと誇りて、早く海軍大臣かないし軍令部長にして海軍部内の風<sup>ふう</sup>を一新したし

と思えるなり。

「本当にそうでございましょうねエ。あの、何だかよくは存じませんが、阿爺ちちがね、大臣をしていましたころも、いろいろな頼み事ことをしているいろいろ物を持って来ますの。阿爺ちちはそんな事はだいきん大禁物もつですから、できる事は頼まれなくてもできる、できない事は頼んでもできないと申して、はねつけてもはねつけてもやはりいろいろ名をつけて持ち込んで来ましたわ。で、阿爺ちちがじょうだん戯談じょうだんに、これではたれでも役人になりたがるはずだって笑っていましたよ」

「そうだろう、陸軍も海軍も同じ事だ。金の世の中だね、浪さん——やあもう十時か」おりからりんりんとうつ柱時計を見かえりつ。

「本当に時間ときが早くたつこと！」

## 二の一

芝桜川町なる山木兵造やしきが邸は、すぐれて広しというにあらねど、町はずれより西久保にしのかほの丘の一部を取り込めて、庭には水をたたえ、石を据え、高きに道し、低きに橋して、楓かえで桜松竹などおもしろく植え散らし、ここに石燈籠いしどうろうあれば、かしこに稲荷いなりの祠あり、またその奥に思いがけなき四阿あずまやあるなど、この門内にこの庭はと驚かるるも、山木が不義に得て不義に築きし万金の蜃気楼しんきろうなりけり。

時はすでに午後四時過ぎ、夕ゆうがらす鳥とりの声遠おちこち近ちかに聞こゆるころ、  
 座敷の騒うしろぎを背うしろにして日影薄つぎやまみちき築山道にわげたを庭下駄にわげたを踏みにじりつ  
 つ上り行く羽織袴はおりはかまの男あり。こは武男なり。母の言黙止ことばもたし難く  
 て、今日山木の宴に臨みつれど、見も知らぬ相客と並びて、好ま  
 ぬ扨さかす挙あぐることのおもしろからず。さまざまの余興の果ては、い  
 かがわしき白拍子しらびようしの手踊りとなり、一座の無礼講となりて、い  
 まいましきこと限りもなければ、疾とくにも辞し去らんと思いたれ  
 ど、山木がしきりに引き留むるが上に、必ず逢あわんと思える千々  
 岩の宴たけなわなるまで足を運ばざりければ、やむなく留とどまりつ、  
 ひそかに座を立ちて、熱せる耳を冷ややかなる夕風ゆふかぜに吹かせつつ、  
 人なき方かたをたどりしなり。

武男しゆうとが舅中將より千々岩に関する注意を受けて帰りし兩三日後のち、  
鱈わにかわ皮の手かばんさげし見も知らぬ男突然川島家に尋ね来たり、  
一通の証書を示して、思いがけなき三千円の返金を促しつ。証書  
面の借り主は名前も筆跡もまさしく千々岩安彦、保証人の名前は  
顯然川島武男と署しありて、そのうえ歴々と実印まで押してあら  
んとは。先方の口上によれば、契約期限すでに過ぎつるを、本人  
はさらに義務を果たさず、しかも突然いずれへか寓ぐうを移して、役  
所に行けばこの兩三日職務上他行したりとかにて、さらに面会を  
得ざれば、ぜひなくこなたへ推参したる次第なりという。証書は  
まさしき手続きを踏みたるもの、さらに取り出いだしたる往復の書面  
を見るに、違まちう方かたなき千々岩が筆跡なり。事の意外に驚きたる武

男は、子細をただすに、母はもとより執事の田崎も、さる相談にあずかりし覚えなく、印いんぎよう形を貸したる覚えさらになしといふ。かのうわさにこの事実思ひあわして、武男は七分事の様子を推しつ。あたかもその日千々岩は手紙を寄せて、明日山木の宴会に会いたしといひ越したり。

その顔だに見ば、問うべき事を問い、言うべき事を言いて早歸らんと思ひし千々岩は来たらず、しきりに波立つ胸の不平を葉巻けぶりの煙に吐きもて、武男は崖道がけみちを上り、明竹みんちくの小藪こやぶを回り、常ゆつた春藤の陰に立つ四阿あずまやを見て、しばし腰をおろせる時、横手のわき道こまげたに駒下駄こまげたの音して、はたと豊子とよこと顔見合わせつ。見れば高島田、松竹梅の裾模様すそある藤色ふじいろ縮緬ちりめんの三枚襲まがさね、きらびやかなる

服装せるほどますます隙のあらわれ、笑止とも自らは思わぬなるべし。その細き目をばいとど細うして、

「ここにいらつしたわ」

三十サンチ巨砲の的には立つとも、思いがけなき敵の襲来に冷やりとせし武男は、渋面作りてそこそこに兵を収めて逃げんとするを、あわてて追っかけ

「あなた」

「何です？」

「おとつさんが御案内して庭をお見せ申せてそう言いますから」

「案内？ 案内はいらんです」

「だって」

「僕は一人ひとりで歩く方が勝手だ」

これほど手強く打ち払えばいかなる強敵ごうてきも退散すべしと思いきや、なお懲りずまに追いすがりて

「そうお逃げなさらんでもいいわ」

武男はひたと当惑の眉まゆをひそめぬ。そも武男とお豊の間は、その昔父が某県を知れりし時、お豊の父山木もその管下において常に出入したれば、子供もおりおり互いに顔合わせしが、まだ十一の武男は常にお豊を打ちたたき泣かしては笑いしを、お豊は泣きつつなお武男にまつわりつ。年移り所た変わり人長けて、武男がすでに新夫人を迎えける今日までも、お豊はなお当年の乱暴なる坊ちやま、今は川島男爵と名乗る若者に対してはかなき恋を思え

るなり。粗暴なる海軍士官も、それとうすうす知らざるにあらねば、まれに山木に往来する時もなるべく危うきに近よらざる方針を執りけるに、今日はおぞくも伏兵の計はかりごとに陥れるを、またいかんともするあたわざりき。

「逃げる？ 僕は何も逃げる必要はない。行きたい方に行くのだ」  
「あなた、それはあんまりだわ」

おかしくもあり、ばからしくもあり、迷惑にもあり、腹も立ちし武男行かんとしては引きとめられ、逃のがれんとしてはまつわられ、あわれ見る人もなき庭のすみに新日高川しんひたかがわの一幕を出いだせしが、ふと思いつく由ありて、

「千々岩はまだ来ないか、お豊さんちよつと見て来てくれたまえ」

「千々岩さんは日暮れでなけりや来ないわ」

「千々岩は時々来るのかね」

「千々岩さんは昨日きのうも来たわ、おそくまで奥の小座敷でおとつきんと何か話していたわ」

「うん、そうか——しかしもう来たかもしれん、ちよつと見て来てくれないかね」

「わたしいやよ」

「なぜ！」

「だって、あなた逃げて行くでしょう、なんぼわたしがいやだつて、浪子さんが美しいって、そんなに人を追いやるものじゃなくつてよ」

「油断せば雨にもならんずる空模様だいつうほに、百計つきたる武男はただ大踏歩だいつうほして逃げんとする時、

「お嬢様、お嬢様」

と婢おんなの呼び来たりて、お豊を抑留しつ。このひまにと武男はつ

と敷やぶを回やぶりて、二三十歩足早に落ち延び、ほつと息つき

「困やっった女だ」

とつぶやきながら、再度の来襲の恐れなき屈強の要害——座敷かたの方かたへ行きぬ。

## 二の二

日は入り、客は去りて、昼の騒ぎはただ台所かたの方に残れる時、羽織袴はかまは脱ぎすてて、煙草盆たばこをさげながら、おぼつかなき足踏みしめて、廊下伝いに奥まりたる小座敷に入り来し主人の山木、赤禿はげの前額ひたえの湯げも立ち上らんとするを、いとどランプの光に輝かしつつ、崩くずるるようにすわり、

「若旦那だんなも、千々岩ちぢわさん君も、お待ちせ申して失敬でがした。はははは、今日はおかげで非常の盛会……いや若旦那はお弱い、失敬ながらお弱い、軍人に似合いませんよ。御大人ごたいじんなんざそれは大したものでしたよ。年は寄つても、山木兵造——なあに、一升やそこらはははははは大丈夫ですて」

千々岩は黒水晶の目を山木に注ぎつ。

「大分だいぶんご元気ですな。山木君、もうかるでしよう？」

「もうかるですとも、はははは——いやもうかるといえは」と山木は灰だらけにせし煙管きせるをようやく吸いつけ、一服吸いて「何です、その、今度あの〇〇〇〇が売り物に出るそうで、実は内々様子を探つて見たが、先方もいろいろ困っている際だから、案外安く話が付きそうです。事業の方は、大有望さ。追ひ追ひ内地雑居と来ると、いよいよ妙だが、いかがです若旦那、田崎君の名義でもよろしいから、二三万御奮発なすつちや。きつともうけさして上げますぜ」

と本ほん性しょう違たがわぬ生なま酔えいの口は、酒よりもなめらかなり。千々岩は黙然と坐ざしている武男を流なが眸しめに見て、「〇〇〇〇、確あか青おも」

物のちよう町の。あれは一時もうかつたそうじゃないか」

「さあ、もうかるのを下手へたにやり崩くずしたんだが、うまく行つたらすばらしい金鉢かみですぜ」

「それは惜しいもんだね。素寒貧すかんぴんの僕じゃ仕方ないが、武男君、どうだ、一肩ぬいで見ちやア」

座に着きし初めより始終黙然もくねんとして不快の色はおおう所なきまで眉宇びうにあらわれし武男、いよいよ懾よろこばざる色を動かして、千々岩と山木を等分に憤りを含みたる目じりにかけつつ

「御厚意かたじけないが、わが輩のように、いつ魚の餌食えじきになるか、裂弾、榴弾りゆうだんの的になるかわからない者は、別に金もうけの必要もない。失敬だがその某会社とかに三万円を投ずるよりも、

わが輩はむしろ海員養成費に献納する」

にべなく言い放つ武男の顔、千々岩はちらとながめて、山木にめくばせし、

「山木君、利己主義のようだが、その話はあと回しにして僕の件から願いたいだね。川島君も承諾してくれたから、願つて置いた通り——御印がありますか」

証書らしき一葉の書付を取り出して山木の前に置きぬ。

千々岩の身边に嫌疑けんぎの雲のかかれるも宜うべなり。彼は昨年来その位置の便宜を利用して、山木がために参謀ちようしやとなり牒だ者しやとなりて、その利益の分配にあずかれるのみならず、大胆にも官金を融通して蠟かき殻がら町ちやうに万金をつかまんとせしに、たちまち五千円余

の損亡そんもうを来たしつ。山木をゆすり、その貯えたくわの底をはたきて二千円を得たれども、なお三千の不足あり。そのただ一親しんせき戚なる川島家は富みてかつ未亡人の覚えめでたからざるにもあらざれど、出すといえばおくびも惜しむ叔母おばの性質を知れる千々岩は、打ち明けて頼めば到底らちの明かざるを看破みやぶり、一時を弥縫びほうせんと、ここに私印偽造の罪を犯して武男の連印かたを贖り、高利の三千円を借り得て、ひとまず官金消費の跡を濁しつ。さるほどに期限迫りて、果てはわが勤むる官署にすら督促のはがきを送らるる始末となりたれば、今はやむなくあたかも帰朝せる武男を説き動かし、この三千円を借り得てかの三千円を償い、武男の金をもつて武男の名を贖あがなわんと欲せしなり。さきに武男を訪といたれどおりあしく

得逢えあわず、その後二三日職務上の要を帯びて他行しつれば、いまだ高利貸のすでに武男が家に向かいしを知らざるなりき。

山木はうなずき、ベルを鳴らして朱肉の盒いれものを取り寄せ、ひとつ通り証書に目を通して、ふところより実印取り出いでつつ保証人なるわが名の下に捺おしぬ。そを取り上げて、千々岩は武男の前に差し置き、

「じゃ、君、証書はここにあるから——で、金はいつ受け取れるかね」

「金はここに持っている」

「ここに？——戯談じょうだんはよしたまえ」

「持っている。——では、参千円、確かに渡した」

懐中より一通の紙に包みたるもの取り出でて、千々岩が前に投げつけつ。

打ち驚きつつ拾い上げ、おしひらきたる千々岩の顔はたちまちくれない紅になり、また蒼あおくなりつ。きびしく齒を食いしぼりぬ。彼はいまだ高利貸の手にあらんと信じ切つたる証書を現に目の前に見たるなり。武男は田崎に事の由を探らせし後、ついに怪けしかる名前の上の三千円を払いしなりき。

「いや、これは——」

「覚えがないというのか。男らしく罪に伏ふくしたまえ」

子供、子供と今が今まで高をくくりし武男に十二分に裏をかかれて、一腔こうの憤ふん怨えん焰ほのおのごとく燃え起こりたる千々岩は、切れよ

くちびると唇をかみぬ。山木は打ちおどろきて、煙管きせるをやに下がりを持ちたるまま二人ふたりの顔をながむるのみ。

「千々岩、もうわが輩は何もいわん。親戚しんせきのよしみに、決して私印偽造の訴訟は起こさぬ。三千円は払ったから、高利貸のはがきが参謀本部にも行くまい、安心したまえ」

あくまではずかしめられたる千々岩は、煮え返る胸をさすりつ。気は武男に飛びもかからんとすれども、心はもはや陳弁の時機にあらざるを認むるほどの働きを存せるなり。彼はとつさに態度を変えつ。

「いや、君、そういわれると、実に面目ないがね、実はのつぴきならぬ——」

「何がのつぴきならぬのだ？ 徳義ばかりか法律の罪人になってまで高利を借る必要がどこにあるのか」

「まあ、聞いてくれたまえ。実は切迫せつぱつまつた事で、金は要いる、借りるところはなし。君がいると、一も二もなく相談するのだが、叔母様さんには言いにくいだろうじゃないか。それだといって、急場の事だし、済まぬ——済まぬと思いなから——、実は先月はちつと当てもあつたので、皆済してから潔く告白しよう——」

「ばかを言いたまえ。潔く告白しようと思つた者が、なぜ黙つて別に三千円を借りようとするのだ」

ひき膝を乗り出す武男が見幕の鋭きに、山木はあわてて、

「これさ、若旦那、まあ、お静かに、——何か詳しい事情わけはわか

りませんが、高が二千や三千の金、それに御親戚であつて見ると、これは御勘弁——ねエ若旦那。千々岩君さんも悪い、悪いがそこをねエ若旦那。こんな事が表おもてぎたになつて見ると、千々岩君さんの立身もこれぎりになりますから。ねエ若旦那」

「それだから三千円は払つた、また訴訟なぞしないといつてい  
じやないか。——山木、君の事じやない、控えて居たまえ、——  
それはしない、しかしもう今日限り絶交だ」

もはや事ここにいたりては恐るる所なしと度胸を据えし千々岩  
は、再び態度を嘲罵ちやうばにかえつ。

「絶交？——別に悲しくもないが——」

武男の目は焰ほのおのごとくひらめきつ。

「絶交はされてもかまわんが、金は出してもらおうというのか。腰  
抜け漢め！」

「何？」

気色けしき立つ双方の勢いに酔えいもいくらかさめし山木はたまり兼ね  
て二人ふたりが間に分け入り「若旦那も、千々岩君さんも、ま、ま、ま、静  
かに、静かに、それじゃ話も何もわからん、——これさ、お待ち  
なさい、ま、ま、ま、お待ちなさい」としきりにあなたを縫ぬいこ  
なたを繕つくろう。

押しとめられて、しばし黙然もくねんとしたる武男は、じつと千々岩  
が面おもてを見つめ、

「千々岩、もういうまい。わが輩も子供の時から君と兄きょうだい弟いの

ように育つて、實際才力の上からも年齢としからも君を兄と思つていた。今後とも互いに力になろう、わが輩も及ぶだけ君のために尽くそうと思つていた。実はこのごろまでもまさかと信じ切つていた。しかし全く君のために売られたのだ、わが輩を売るのは一個人の事だが、君はまだその上に——いやいうまい、三千円の費途は聞くまい。しかし今までのよしみに一言ごんいつて置くが、人の耳目は早いものだ、君は目をつけられているぞ、軍人の体面に関するよな事をしたもうな。君たちは金よりたつと貴いものはないのだから、言つたつてしかたはあるまいが、ちつとあ恥を知りたまえ。じゃもう会うまい。三千円はあらためて君にくれる」

厳然として言い放ちつつ武男は膝の前なる証書をとつてずたず

たに引き裂き棄てつ。つと立ち上がって次の間に出でし勢いに、さつきよりここに隠れて聞きおりしと覚しき女お豊を煽り倒しつ。「あれえ」という声をあとに足音荒く玄関の方にいで去りたり。あつけにとられし山木と千々岩と顔見あわしつ。「相変わらさ坊っちやまだね。しかし千々岩さん、絶交料三千円は随分いいもうけをしたぜ」

落ち散りたる証書の片々を見つめ、千々岩は默然として唇をかみぬ。

### 三の一

きざらぎはじめ  
 二月初旬ふと引きこみし風邪かぜの、ひとたびはおこたりしを、ある  
 夜姑しゅうとめの胴着を仕上ぐるとして急ぐままに夜よふかししより再びひき返  
 して、今日二月の十五日というに浪子はいまだ床あぐるまで快き  
 を覚えざるなり。

今年の寒さは、今年の寒さは、と年々に言いなれし寒さも今年  
 こそはまさしくこれまで覚えなきまで、日々吹き募る北風は雪を  
 誘い雨を帯びざる日にもさながら髓を刺し骨をえぐりて、健やか  
 なるも病み、病みたるは死し、新聞の広告は黒くろ 罫づちのみぞ多くな  
 り行く。この寒さはさらぬだに強からぬ浪子のかりそめの病を募  
 らして、取り立ててはこれという異なれる病態もなければ、ただ  
 頭かしら重しよくく食しよくうまからずして日また日を渡れるなり。

今二点を拍ちし時計の蝸ひぐらしなど鳴きたらんように凜々りんりんと響きしあ  
 とは、しばし物音絶えて、秒を刻み行く時計のかえつて静けさを  
 加うるのみ。珍しくうららかにあさみどり浅碧をのべし初春の空は、四  
 枚の障子に立て隔てられたれど、悠々ゆうゆうたる日の光くまなく紙障  
 子はに榮えて、余りの光は紙を透かして浪子が仰ぎ臥ふしつつ黒スコツ  
 子の鞆くつしたを編める手先と、雪より白き枕まくらに漂う寝乱れ髪の上にちら  
 ちらおどりぬ。ひだり左手の障子には、ひよろひよるとした南天の影手ち  
ようずばち水鉢をおおうてうつむきざまに映り、右手には槎さがたる老梅の  
 縦横に枝をさしかわしたるがあざやかに映りて、まだつぼみがち  
 なるその影の、花は数うべくまばらなるにも春の浅きは知られつ  
 べし。なんえんけん南縁暄を迎うるにやあらん、腰板の上に猫ねこの頭かしらの映りた

るが、今日の暖気に浮かれ出でし羽虫目<sup>はむし</sup>がけて飛び上がりしに、捕<sup>と</sup>りはずしてどうと落ちたるをまた心に閑せざるもののごとく、悠々としてわが足をなむるにか、影なる頭<sup>かしら</sup>のしきりにうなずきつ。微笑を含みてこの光景<sup>ありさま</sup>を見し浪子は、日のまぶしきに眉<sup>まゆ</sup>を攢<sup>あつ</sup>め、目を閉じて、うっとりとしていたりしが、やおらあなたに転<sup>ねがえり</sup>臥して、編みかけの鞆<sup>くつした</sup>をなで試みつつ、また縦横に編み棒を動かし始めぬ。

ドシドシと縁に重<sup>おも</sup>やかなる足音して、矮<sup>たけひくにおう</sup>き仁王の影障子を伝い来つ。

「気分はどうごあんすな？」

と枕<sup>しゆうと</sup>べにすわるは姑なり。

「今日は大層ようございます。起きられるのですけども——」と編み物をさしおき、襟えりの乱れを繕いつつ、起き上がらんとするを、姑は押しとめ、

「そ、そいがいかん、そいがいかん。他人じやなし、遠慮がいつもんか。そ、そ、そ、また編み物しなはるな。いけませんど。病人な養ようじよう生が仕事、なあ浪どん。和女おまえは武男が事ちゆうと、何もかも忘れツちまいなはる。いけません。早う養生してな——」

「本当に済みません、やすんでばかり……」

「そ、そいが他人行儀、なあ。わたしはそいが大きらいじや」

うそをつきたもうな、卿おんみは常に当今の嫁なるものの舅しゅうと姑に礼足らずとつぶやき、ひそかにわが媳よめのこれに異なるをもつけの幸さち

と思うならずや。浪子は実家さとにありけるころより、口にいわねどひそかにその継母のよろず洋風にさばさばとせるをあきたらず思いて、一家の作法の上にはおのずから一種古風の嗜味しみを有せるなりき。

姑はふと思ひ出いでたるように、

「お、武男から手紙が来たようじゃったが、どう書けえて来申きもした？」

浪子は枕べに置きし一通の手紙のなかぬき出いだして姑に渡しつつ、「この日曜にはきつといらツしやいますそうでございますよ」

「そうかな」ずうと目を通してくるくとまき収め、「転地養生もねもんじや。この寒にエツトからだ動いごかして見なさい、それこ

そ無<sup>な</sup>か病氣も出て来ます。風邪<sup>かぜ</sup>はじいと寝ておると、なおるもんじや。武は年が若かでな。医師<sup>いしや</sup>をかえるの、やれ転地をすツのと騒<sup>も</sup>ぎ申す。わたしたちが若か時分な、腹が痛かてて寝る事<sup>こと</sup>なし、産あがりだて十日と寝た事アあいません。世間が開けて来<sup>く</sup>つと皆<sup>よお</sup>が弱<sup>よお</sup>うなり申すでな。はははは。武にそう書<sup>け</sup>えてやったもんな、母<sup>おつか</sup>さんがおるで心配しなはんな、ての、ははははは、どれ」

口には笑えど、目はいささか慄<sup>よろこ</sup>ばざる色を帯びて、出<sup>い</sup>で行く姑の後ろ影、

「御免遊ばせ」

と起き直りつつ見送りて、浪子はかすかに吐息を漏らしぬ。

親が子をねたむということ、あるべしとは思われねど、浪子は

良人の帰りし以来、一種異なる関係の姑との間にわき出でたるを  
覚えつ。遠洋航海より帰り来て、浪子のやせしを見たる武男が、  
粗豪なる男心にも留守の心づかいをくみて、いよいよいたわるを  
ば、いささか苦々しく姑の思える様子は、伶俐浪子の目をの  
がれず。時にはかの孝——姑のいわゆる——とこの愛の道と、一  
時に踏み難く岐ることあるを、浪子はひそかに思い悩めるなり。

「奥様、加藤様のお嬢様がおいで遊ばしましてございます」

と呼ぶ婢の声に、浪子はぱっちり目を開きつ。入り来る客を見  
るより喜色はたちまち眉間に上りぬ。

「あ、お千鶴さん、よく来たのね」

## 三の二

「今日はどんな？」

藤色ふじいろ縮緬ちりめんのおこそ頭巾づきんとともに信玄袋をわきへ押しやり、

浪子の枕べ近く立ち寄るは島田の十七八、紺地斜綾はすあやの吾妻あずまコ

トにすらりとした姿を包んで、三日月眉みかづきまゆにおやかに、凜々りりしき黒

目がちの、見るからさえざえとした娘。浪子が伯母加藤子爵夫人

の長女、千鶴子ちずくというはこの娘なり。浪子と千鶴子は一歳違ひとついの

従姉妹いとこ同士。幼稚園に通うころより実の同胞きょうだいも及ばぬほど睦むつ

み合いて、浪子が妹の駒子こまこをして「姉さんねえはお千鶴さんとばかり

仲よくするからわたしいやだわ！」といわしめしこともありき。

されば浪子が川島家に嫁とつぎて来し後も、他の学友らはおのずから足を遠くせしに引きかえ、千鶴子はかえつてその家の近くなれるを喜びつつ、しばしば足を運べるなり。武男が遠洋航海の留守の間心さびしく憂うき事多かる浪子を慰めしは、燃ゆるがごとき武男の書状を除きては、千鶴子の訪問ぞその重おもなるものなりける。

浪子はほほえみて、

「今日によつぽどよい方だけでも、まだ頭かみが重くて、時々せきが  
出て困るの」

「そう？——寒いのね」うやうやしく座ぶとんをすすむる婢おんなをちよつと顧みて、浪子のそば近くすわりつ。桐きりどう 桐ひばちの火鉢ゆびわに指環ほおの  
宝おさ石おさきらきらと輝く手をかざしつつ、桜色ほおにおえる頬おさを押う。

「伯母様も、伯父様も、おかわりないの？」

「あ、よろしくツてね。あまり寒いからどうかしらツてひどく心配していなさるの、時候が時候だから、少しい方だツたら逗ず子にでも転地療養しなすつたらツてね、昨ゆうべ夕も母おっかさんとそう話したのですよ」

「そう？ 横須賀よこすかからもちようどそう言つて来てね……」

「兄さんから？ そう？ それじゃ早く転地するがいいわ」

「でももうそのうちよくなるでしょうから」

「だって、このごろの感冒かぜは本当に用心しないとイケないわ」

「おりから小間使いの紅茶を持ち来たりて千鶴子にすすめつ。」

「兼かねや？ 母おっかさんは？ お客？ そう、どなた？ 国かたの方なの？」

——お千鶴さん、今日はゆつくりしていいのでしよう。兼や、お千鶴さんに何かごちそうしておあげな」

「ほほほほ、お百度参りするのだもの、ごちそうばかりしちやたまらないわ。お待ちなさいよ」言いつつ服紗ふくさ包みの小重を取り出し、「こちらの伯母さんはお萩はぎがおすきだツたのね、少しだけでも——お客様ならあとにしましょう」

「まあ、ありがとう。本当に……ありがとうよ」

千鶴子はさらに紅蜜柑べにみかんを取り出しつつ「きれいでしよう。これはわたしのお土産みやげよ。でもすっぱくていけないわ」

「まあきれいな、一ツむいてちようだいな」

千鶴子がむいて渡すを、さもうまげに吸ひたえいて、額ひたえにこぼるる髪

をかき上げ、かき上げつ。

「うるさいでしょう。ざつと結いつてた方がよかないの？ ね、ちよつと結いましょう。——そのままでもいいわ」

勝手知つたる次の間の鏡台の櫛くし取り出いだして、千鶴子は手柔らかにすき始めぬ。

「そうそう、昨日の同窓会——案内状しらせが来たでしょう——はおもしろかつてよ。みんながよろしくツて、ね。ほほほほ、学校を下がってからまだやつと一年しかならないのに、もう三一はお嫁だわ。それはおかしいの、大久保おおくほさんも本多ほんださんも北小路きたこうじさんもみんな丸鬚まるまげに結いつてね、変に奥様じみているからおかしいわ。——痛かないの？——ほほほほ、どんな話かと思つたら、みんな自分

の吹ふいちよう聴ちようですわ。そうそう、それから親子別居論が始まってね、

北小路さんは自分がちつとも家政ができないに姑おっかさんがたいへんやさ

しくするものだから同居に限るっていうし、大久保さんはまた姑おっかさん

がやかましやだから別居論の勇将だし、それはおかしいの。それ

からね、わたしがまぜツかえしてやったら、お千鶴さんはまだ門

外漢——漢がおかしいわ——だから話せないというのですよ。——

——すこしつまり過ぎはしないの？」

「イイエ。——それはおもしろかつたでしょう。ほほほほ、みんな

自己じぶんから割り出すのね。どうせ局ところ々ところで違ちがうのだから、一概

には言えないのでしようよ。ねエ、お千鶴さん。伯母様もいつか

そうおっしやつたでしょう。若い者ばかりじゃわがままになるツ

て、本当にそうですよ、年寄りを疎略に思つちや濟まないのね」

父中將の教えを受くるが上に、おのずから家政に興味をもてる

浪子は、実家さとにありけるころより継母まつりごとの政を傍観しつつ、ひそか

に自家の見けんをいだきて、自ら一家の女主あるじになりたらん日には、み

ごと家を齊ととのえんものと思えるは、一日にあらざりき。されど川島

家に來たり嫁ぎて、万機一に摂政太后の手にありて、身はその位くらゐ

ありてその權なき太子妃の位置にあるを見るに及びて、しばしお

のれを取めて姑の支配もとの下に立ちつ。親子の間に立ち迷いて、思

うさま良人おつとにかしづくことのままならぬをひそかにかこてるおり

おりは、かつてわが国風こくふうに適あわずと思ひし継母が得意の親子別しんし

居論のあるいは真理にあらざるやを疑うこともありしが、これが

ためにかえつて浪子は初心を破らじとひそかに心に帯おびせるなり。

継母もとの下とせに十年を送り、今は姑のそばにやがて一年の経験いとしこを積める従姉いとこの底意を、ことごとくはくみかねし千鶴子、三つに組みたる髪いとしこの端を白きリボンもて結わえつつ、浪子の顔さしのぞきて、声を低め、「このごろでも御機嫌ごきげんがわるくツて？」

「でも、病氣うぢしてからよくしてくださいるのですよ。でもね、……武男うぢにいろいろするのが、おかあさまのお気に入らないには困るわ！ それで、いつでも此家ここではおかあさまが女皇陛下クイーンだからおれよりもたれよりもおかあさまを一番大事にするんだツて、しよつちゆう言つて聞かされるのですわ……あ、もうこんな話はよしませうね。おいしい気持ち、ありがとう。頭が軽くなつたわ」

言いつつ三つ組みにせし髪をなで試みつ。さすがに疲れを覚えつらん、浪子は目を閉じぬ。

櫛くしをしまいで、紙に手をふきふき、鏡台の前に立ちし千鶴子は、小さき箱の蓋ふたを開きて、掌たなそこに載せつつ、

「何度見てもこの襟止びんはきれいだわ。本当に兄にいさんはよくなさるのねエ。内うちの——兄さん（これは千鶴子の婿養子と定まれる俊次じといいて、目下外務省に奉職せる男）なんか、外交官の妻に

なるには語学が達者でなくちやいけないツて、仏語フレンチを勉強するがいいの、ドイツ語がぜひ必要のツて、責めてばかりいるから困るわ」

「ほほほほ、お千鶴さんが丸髻まるまげに結いつたのを早く見たいわ——島

田も惜しいけれど」

「まあいや！」美しき眉まゆはひそめど、裏切る微笑えみは薔薇ばらの荅つばめる  
ごとき唇くちびるに流れぬ。

「あ、ほんに、萩原はぎわらさんね、そらわたしたちより一年前さきに卒業  
した——」

「あの松まつ平ひらさんまつだいらに嫁いらつした方まっでしよう」

「は、あの方がね、昨日きのう離縁きになつたんですツて」

「離縁りえんに？ どうしたの？」

「それがね、舅姑おとぢなあんの気きには入いつてたけども、松平まつひらさんがきらつて  
ね」

「子供こどもがありはしなかつたの」

「ひとり  
一人あつたわ。でもね、松平さんがきらつて、このごろは妾を  
置いたり、困い者をしたり、乱暴ばかりするからね、萩原さん  
おとうさんがひどく怒つてね、そんな薄情な者には、娘はやつて  
置かれぬてね、とうとう引き取つてしまつたんですツて」

「まあ、かあいそうね。——どうしてきらうのでしよう、本当に  
ひどいわ」

「腹が立つのねエ。——逆さまだとまだいいのだけど、舅姑の  
気に入つても良人にきらわれてあんな事になつては本当につらい  
でしょうねエ」

浪子は吐息しつ。

「同じ学校に出て同じ教場で同じ本を読んでも、みんなちりぢり

になつて、どうなるかわからないものねエ。——お千鶴さん、いつまでも仲よく、さきざき力になりましようねエ」

「うれしいわ！」

ふたり

二人の手はおのずから相結びつ。ややありて浪子はほほえみ、  
「こんなに寝ていると、ね、いろいろな事を考えるの。ほほほほ、笑つちやいやよ。これから何年かたツてね、どこか外国と戦争が起こるでしょう、日本が勝つでしょう、そうするとね、お千鶴さん宅とこの兄さんが外務大臣で、先方へ乗り込んで講和の談判をなさるでしょう、それから武男うちが艦隊の司令長官で、何十艘そうという軍艦を向こうの港にならべてね……」

「それから赤坂の叔父さんが軍司令官で、宅うちのおとうさんが貴族

院で何億万円の軍事費を議決さして……」

「そうするとわたしはお千鶴さんと赤十字の旗でもたてて出かけるわ」

「でもからだは弱くちやできないわ。ほほほほ」

「おほほほほ」

笑う下より浪子はたちまちせきを発して、右の胸をおさえつ。

「あまり話したからいけないのでしょうか。胸が痛むの？」

「時々せきするとね、ここに響いてしようがないの」

言いつつ浪子の目はたちまちすうと薄れ行く障子の日影を打ちながめつ。

## 四の一

山木が奥の小座敷に、あくまで武男にはずかしめられて、燃ゆるがごとき憤<sup>ふんしつ</sup>嫉<sup>あつ</sup>を胸<sup>たた</sup>に畳みつつわが寓<sup>ぐう</sup>に帰りしその夜<sup>よ</sup>より僅<sup>きんき</sup>々<sup>ん</sup>五日を経て、千々岩<sup>ちぢわ</sup>は突然参謀本部よりして第一師団の某連隊付きに移されつ。

人の一生には、なす事なす事皆凶星をはずれて、さながら皇天ことにわれ一人<sup>にん</sup>をえらんで折檻<sup>せつかん</sup>また折檻の笞<sup>むち</sup>を続けざまに打ちおろすかのごとくに感ぜらるる、いわゆる「泣き面<sup>つら</sup>に蜂<sup>はち</sup>」の時期少なくとも一度はあるものなり。去年以来千々岩はこの瀬戸に舟やり入れて、今もって容易にその瀬戸を過ぎおわるべき見当のつ

かざるなりき。浪子はすでに武男に奪われつ。相場に手を出せば失敗を重ね、高利を借りれば恥をかき、小児こどもと見くびりし武男には下司げす同然にはずかしめられ、ただ一親しんせき戚たる川島家との通路は絶えつ。果てはただ一立身の捷しやうけい逕として、死すとも去らじと思える参謀本部の位置まで、一言半句の挨拶あいさつもなくはぎとられて、このごろまで牛馬うしうま同様に思いし師団の一士官とならんとは。疵持きずつ足の千々岩は、今さら抗議するわけにも行かず、倒れてもつかむ馬糞ばふんの臭しゆうをいとわで、おめおめと練兵行軍の事に従いしが、この打撃はいたく千々岩を刺激して、従来事に臨んでさらにあわてず、冷静に「われ」を持したる彼をして、思うてここにいたるごとに、一肚皮とひの憤恨猛火よりもはげしく騰上し来たるを

覚えざらしめたり。

頭上に輝く名利の冠かんむりを、上らば必ず得うべき立身の梯子はしごに足踏みかけて、すでに一段二段を上り行きけるその時、突然蹴落けとされしは千々岩が今の身の上なり。誰たが蹴落とせし。千々岩は武男が言葉の端より、参謀本部に長たる將軍が片岡中將と無二の昵懇じつこんなる事実よりして、少なくとも中將が幾分の手を仮したるを疑いつ。彼はまた従来金には淡泊なる武男が、三千金のために、——たとい偽印の事はありとも——法外に怒れるを怪しみて、浪子が旧ふるき事まで取り出いでてわれを武男に讒ざんしたるにあらざやと疑いつ。思えば思うほど疑いは事実と募り、事実は怒火に油さし、失恋のうらみ、功名の道における蹉跌さてつの恨み、失望、不平、嫉妬さまさま

の悪感は中将と浪子と武男をめぐりて焰ほのおのごとく立ち上りつ。かの常になが冷頭を誇り、情に熱して数字を忘るるの愚を笑える千々岩も、連敗の余のさすがに気は乱れ心狂いて、一腔こうの怨毒えんどくいずれに向かつてか吐き尽くすべき路みちを得ずば、自己——千々岩彦が五尺の軀みまず破れおわらんずる心地こころせるなり。

復讐ふくしゅう、

復讐、世に心よきはにくしと思う人の血をすすつて、

その頬ほおの一鬢れんに舌鼓うつ時の感なるべし。復讐、復讐、ああいか

にして復讐すべき、いかにしてうらみ重なる片岡川島両家を見じんに吹き飛ばすべき地雷火坑を発見し、なるべくおのれは危険なき距離より糸をひきて、憎しと思ふ輩やからの心傷やぶれ腸裂け骨摧くじけ脳塗まみれ生きながら死ぬ光景をながめつつ、快く一杯を過ぎさんか。こ

は一月以来夜となく日となく千々岩の頭を往来せる問題なりき。

梅花雪とこぼるる三月中旬、ある日千々岩は親しく往来せる旧同窓生の何某が第三師団より東京に転じ来たるを迎うるとて、新橋におもむきつ。待合室を出づるとて、あたかも十五六の少女を連れし丈高き婦人——貴婦人の婦人待合室より出で来たるにはたと行きあいたり。

「お珍しいじやございませんか」

駒子を連れて、片岡子爵夫人繁子はたたずめるなり。一瞬時、変わる千々岩の顔色は、先方の顔色をのぞいて、たちまち一変しつ。中將にこそ浪子にこそ恨みはあれ、少なくともこの人をば敵視する要なしと早くも心を決せるなり。千々岩はうやうやしく一

礼して、微笑を帯び、

「ついごぶさたいたしました」

「ひどいお見限りようですね」

「いや、ちよつとお伺い申すのでした、いろいろ職務上の要で、つい多忙だものですから——今日きょうはどちらへか？」

「は、ちよつとずし逗子まで——あなたは？」

「何、ちよつとともだち朋友を迎えにまいったのですが——逗子は御保養でございますか」

「おや、まだご存じないのでしたね、——病人ができましたね」

「御病人？ どなたで？」

「浪子です」

おりからベルの鳴りて人は潮うしおのごとく改札口へ流れ行くに、少おとめ女は母の袖そで引き動かして

「おかあさま、おそくなるわ」

千々岩はいち早く子爵夫人が手にしたる四季袋を引つとり、打ち連れて歩みつつ

「それは——何ですか、よほどお悪いので？」

「はあ、とうとう肺になりましたね」

「肺？——結核？」

「は、ひどく喀かっけつ血をしましてね、それでつい先日逗子へまいりました。今日はちよつと見舞に」言いつつ千々岩が手より四季袋を受け取り「ではさようなら、すぐ帰ります、ちとお遊びにいら

「ツしやいよ」

華美なるカシミールのシヨールと紅くれないのリボンかけし垂髪おさげとはるかに上等室に消ゆるを目送して、歩を返す時、千々岩の唇には恐ろしき微笑を浮かべたり。

## 四の二

医師が見舞うたびに、あえて口にはいわねど、その症候の次第に著しくなり来るを認めつつ、術てだてを尽くして防ぎ止めんとせしかいもなく、目には見えねど浪子の病は日ひびに募りて、三月の初旬はじめには、疑うべくもあらぬ肺結核の初期に入りぬ。

わが老健すこやかを鼻にかけて今世いまどきの若者の羸弱よわきをあざけり、転地の事耳に入れざりし姑しゅうとも、現在目の前に浪子の一度ならずにに咯血するを見ては、さすがに驚き——伝染の恐ろしきを聞きおれば——

—恐れ、医師が勧むるまましかるべき看護婦を添えて浪子を相州逗子なる実家——片岡家の別墅べつしょに送りやりぬ。肺結核！ 茫ぼうぼ

々うたる野原にただひとり立つ旅客たびびとの、頭上に迫り来る夕立雲のまつ黒きを望める心こそ、もしや、もしやとその病を待ちし浪子の心なりけれ。今は恐ろしき沈黙はすでにとく破れて、雷鳴り電でんひらめき黒風こくふう吹き白雨はくうほとばしる真中まなかに立てる浪子は、ただ身を賭として早く風雨の重圍ちよういを通り過ぎなんと思うのみ。それにして第一撃のいかにすさまじかりしぞ。思い出いづる三月の二日、

今日は常にまさりて快く覚ゆるままに、久しく打ちすてし生け花の慰み、しゅうとへや姑の部屋の花瓶かへいにささん料に、おりから帰りて居たまいいし良人おっとに願いて、においも深き紅梅の枝を折るとて、庭さき近くはしい端居して、あれこれとえらみ居しに、にわかむなさきに胸先むなさき苦しく頭かしらふらふらとして、紅くれないもやめさきの靄眼前くれないもやめさきに渦まき、われ知らずあと叫びて、肺を絞りし鮮血の紅なるを吐けるその時！ その時こそ「ああとうとう！」と思う同時に、いづくともなくはるかにわが墓の影をかいま見しが。

ああ死！ むかし以前世をつらしと見しころは、生何の楽しみぞ死何かなしみの哀惜ぞと思ひしおりもありけるが、今は人の生命いのちの愛おしければいとどわが命の惜しまれて千代までも生きたしと思ふ浪子。情

けなしと思うほど、病に勝たんの心も切に、おりおり沈むわが氣をふり起こしては、われより医師を促すまでに怠らず病を養えるなりき。

目と鼻の横須賀よこすかにあたかも在勤せる武男が、ひまをぬすみてしばしば往来するさえあるに、父の書、伯母、千鶴子の見舞たえ間なく、別荘には、去年の夏川島家を追われし以来絶えて久しきかの姥うばのいくが、その再会の縁由よしとなれるがために病そのものの悲しむべきをも喜ばんずるまで浪子をなつかしめるありて、能あとうべくは以前むかしに倍する熱心もて伏侍ふくじするあり。まめまめしき老僕が心を用いて事つこうるあり。春寒きびしき都門を去りて、身を暖かき湘し南ようなんの空気に投じたる浪子は、日ひびに自然の人をいつくしめる温

光を吸い、身をめぐる暖かき人の情けを吸いて、気も心もおのずからのびやかになりつ。地を転じてすでに二旬を経たれば、咯血やみ咳がいそう嗽やや減り、一週二回東京より来たり診する医師も、快しというまでにはいたらねど病の進まざるをかいありと喜びて、この上はげしき心神の刺激を避け、安静にして療養の功を続けなば、快復の望みありと許すにいたりぬ。

### 四の三

都の花はまだ少し早けれど、逗子あたりは若葉の山に山桜さくら咲き初めて、山また山にさりもあえぬ白雲をかけし四月初めの土曜。

今日は朝よりそぼ降る春雨に、海も山もひといろ一色に打ち煙りけぶ、ただ  
 さえ永ながき日の果てもなきまで永こころき心地せしが、日暮れ方より大降  
 りになつて、風さえ強く吹きいで、戸障子の鳴る響おとすさまじく、  
 怒りたける相模灘さがみなだの濤声とうせい、万馬ばんばの跳おどるがごとく、海村戸を鎖とぎ  
 して燈火ともしび一つ漏る家もあらず。

片岡家の別墅べつしょにては、今日は夙とく来くべかりしに勤務上やみ難  
 き要ありておくれし武男が、夜よに入りて、風雨の暗を衝つきつつ来  
 たりしが、今はすでに衣いをあらため、晚餐ばんさんを終え、卓しよくによりか  
 かりて、手紙を読みており。相対あひむかいて、浪子は美しき巾着きんちやく  
 を縫いつつ、時々針をとどめて良人おととの方打かたちながめては笑えみ、風  
 雨の音に耳傾けては静かに思いに沈みており。揚卷あげまきに結いし緑

の髪には、一朵だの山桜を葉ながらにさしはさみたり。二人ふたりの間に  
は、一脚の卓ありて、桃色のかさかけしランプはじじと燃えつつ、  
薄うすくれない紅の光を落とし、そのかたわらには白磁瓶はくじへいにさしはさみ  
たる一枝の山桜、雪のごとく黙して語らず。今朝けさ別れ来し故山の  
春を夢むるなるべし。

風雨の声屋おくをめぐりて騒がし。

武男は手紙を巻きおさめつ。「阿舅おとうさんもよほど心配しておいでな  
さる。どうせ明日あすはちよつと帰京かえるから、赤坂へ回つて来よう」

「明日いらつしやるの？ このお天気かあに！——でもお母様かあもお待  
ちなすつていらつしやいましょうね工。わたくしも行きたいわ！」  
「浪さんが※ とんでもない！ それこそまっぴら御免こうむる。」

もうしばらくは流刑しまながしにあつたつもりでいなさい。はははは

「ほほほ、こんな流刑しまながしなら生涯でもようござんすわ——あなた、巻たばこ蓑召し上がれな」

「ほしそうに見えるかい。まあよそう。そのかわり来る前の日と、帰った日は、二日分ふりのむのだからね。ははははは」

「ほほほ、それじゃごほうびに、今いいお菓子がまいりますよ」

「それはごちそうさま。大方お千鶴さんの土産みやげだろう。——それは何かい、立派な物ができるじゃないか」

「この間から日がなが長くツてしようがないのですから、おかあさまへ上げようと思つてしているのですけど——イイエ大丈夫ですわ、遊び遊びしてますから。ああ何だか気分が清せい々せいしたこと。も少し

起きさしてちようだいな、こうしてますとちつとも病氣のようじやないでしょう」

「ドクトル川島がついているのだもの、はははは。でも、近ごろは本当に浪さんの顔色がよくなつた。もうこつちのものだて」

この時次の間よりかの老女のいくが、菓子鉢ばちと茶盆を両手にささげ来つ。

「ひどい暴風雨ししけでございますこと。旦那様だんながいらつしやいませんと、ねエ奥様、今夜こんばんなんざとても目が合いませんよ。飯田町いいたまちのお嬢様はお帰京遊かえりばす、看護婦さんまで、ちよつと帰京かえりますし、今日はどんなにさびしゆうございましてしよう、ねエ奥様。茂平もへい

(老僕) どんはいますすけれども」

「こんな晩に船に乗ってる人の心地こころもちはどんなでしようねエ。でも乗ってる人を思いやる人はなお悲しいわ！」

「なあに」と武男は茶をすすり果てて風月の唐饅頭とうまんじゅう二つ三つ

一息に平らげながら「なあに、これくらいの風雨しけはまだいいが、

南シナ海あたりで二日も三日も大暴風雨おおしけに出あうと、随分こたえ

るよ。四千何百トンの艦ふねが三四十度ぐらいに傾いてき、山のように

なやつがドンドン甲板かんばんを打ち越してき、艦ふねがぎいぎい響なるとあ

まりいい心地こころもちはしないね」

風いよいよ吹き募りて、暴雨一陣礫つぶてのごとく雨戸にほとばしる。

浪子は目を閉じつ。いくは身を震わしぬ。三人みたりが語ことばしばし途絶え

て、風雨の音のみぞすさまじき。

「さあ、陰気な話はもう中止だ。こんな夜は、ランプでも明るくして愉快に話すのだ。ここは横須賀よりまた暖かいね、もうこんなに山桜が咲いたな」

浪子は磁瓶じへいにさしし桜の花びらを軽かろくなでつつ「今朝老翁けさじいやが山から折つて来ましたの。きれいでしよう。——でもこの雨風で山のはよつぽど散りましようよ。本当にどうしてこんなに潔いものでしよう！ そうそう、さつき蓮れんげつ月の歌にこんなのがありましたよ『うらやまし心のままにとく咲きて、すがすがしくも散るさくらかな』よく詠よんでありますのねエ」

「なに？　すがすがしくも散る？　僕——わしはそう思うがね、花でも何でも日本人はあまり散るのを賞しょう翫がんするが、それも潔

白でいいが、過ぎるとよくないね。戦争いくさでも早く討死うちじにする方が負けだよ。もう少し剛情しつこくにき、執拗しつこくさ、気ながな方を奨励しょうれいしたいと思うね。それでわが輩——わしはこんな歌を詠んだ。いいかね、皮切りだからどうせおかしいよ、しつこしと、笑つちやいかん、しつこしと人はいえども八重桜盛りがきはうれしかりけり、はははは梨なし本なしもとはだし跣足はだしだろう」

「まあおもしろいお歌でございますこと、ねエ奥様」

「はははは、ばあやの折り紙つきじや、こらいよいよ秀逸しゆいつにきまつたぞ」

話の途切れ目をまたひとしきり激しくなりまさる風雨の音、濤なみの音の立ち添そいて、家はさながら大海に浮かべる舟にも似たり。

いくは鉄瓶てつびんの湯をかうるとて次に立ちぬ。浪子はさしはさみ居し体温器をちよつと燈火あかりに透かし見て、今宵こよいは常よりも上らぬ熱を手柄顔おつとに良人に示しつつ、筒に収め、しばらくテーブルの桜花さくらを見るともなくながめていたりしが、たちまちほほえみて

「もう一年たちますのねエ、ようくおぼえていますよ、あの時馬車に乗つて出ると家内みんなの者が送つて出てますから何とか言いたかつたのですけどどうしても口に出ませんの。おほほほ。それから溜池橋ためいけぼしを渡るともう日が暮れて、十五夜でしょう、まん丸な月が出て、それから山王さんおうのあの坂を上がるとちようど桜花さくらの盛りで、馬車の窓からはらはらはらまるで吹雪ふぶきのように降り込んで来ましてね、ほほほ、鬚まげに花びらがとまってましたのを、もう

おりるといふ時、気がついて伯母がとつてくれましたッけ」

武男はテーブルに頬杖ほおづえつき「一年ぐらいたつな早いもんだ。

かれこれするとすぐ銀婚式になっちまうよ。はははは、あの時浪さんの澄まし方といったらはッはははは思い出してもおかしい、おかしい。どうしてああ澄まされるかな」

「でも、ほほほほ——あなたも若殿様できちんと澄ましていらっしたわ。ほほほほ手が震えて、杯がどうしても持てなかつたんですもの」

「大分だいぶんおにぎやかでございますねエ」といくはにこにこ笑みえつつ鉄瓶てつびんを持ちて再び入り来つ。「ばあやもこんなに気分せいせいが清々せいせいいたしたことはありませんでございませよ。ごいっしょにこうして

おりますと、昨年伊香保にいた時のような心地こころもちがいたしますでございますよ」

「伊香保はうれしかったわ！」

「わらび蕨狩りはどうだい、たれかさんの御足おみあしが大分重かつたつけ」

「でもあなたがあまりお急ぎなさるんですもの」と浪子はほほえむ。

「もうすぐ蕨の時候になるね。浪さん、早くよくなつて、また蕨狩りとの競争しようじゃないか」

「ほほほ、それまでにはきつとなおりますよ」

## 四の四

明くる日は、昨夜ゆうべの暴風雨あらしに引きかえて、不思議なほどの上天あま気。

帰京は午後と定めて、午前の暖かく風なき間まを運動にと、武男は浪子と打ち連れて、別荘の裏口よりはらはら松の砂丘すなやまを過ぎ、浜いに出でたり。

「いいお天気、こんなになろうとは思いませんでしたねエ」

「実にいい天気だ。伊豆いずが近く見えるじゃないか、話でもできそうだ」

二人ふたりはすでに乾かわける砂を踏みて、今日の風なぎを地曳じびきすと立ち騒さわぐ漁師りょうし、貝拾かたう子らをあとにし、新月形なりの浜を次第に人少なき方

に歩みつ。

浪子はふと思い出でたるように「ねエあなた。あの——千々岩さんはどうしてらツしやるでしょう？」

「千々岩？ 実に不埒ふらちきわまるやつだ。あれから一度も会わんが。——なぜ聞くのかい？」

浪子は少し考え「イイエ、ね、おかしい事をいうようですが、昨夜ゆうべ千々岩さんの夢を見ましたの」

「千々岩の夢？」

「はあ。千々岩さんがお母さまと何か話をしていなさる夢を見ましたの」

「はははは、きだくさん氣沢山だねエ、どんな話をしていたのかい」

「何かわからないのですけど、お母さまが何度もうなずいていらつしやいましたわ。——お千鶴さんが、あの方と山木さんといつしよに連れ立っていなさるのを見かけたって話したから、こんな夢を見たのでしようね。ねエ、あなた、千々岩さんが我等宅うちに入りするようなことはありませんすまいね」

「そんな事はない、ないはずだ。おっか母さんも千々岩の事じや怒おこつていなさるからね」

浪子は思わず吐息をつきつ。

「本当に、こんな病氣になつてしまつて、おかあさまもさぞいやに思つていらつしやいましょうねエ」

武男ははたと胸を衝つきぬ。病める妻には、それといわねど、浪

子が病みて地を転かえしより、武男は帰京するごとに母の機嫌きげんの次第あに悪しく、伝染の恐れあればなるべく逗子には遠ざかれとまで戒められ、さまさまの壁訴訟の果ては昂こうじて実家さとの悪口わるくちとなり、いささかなだめんとすれば妻をかばいて親に抗するたわけ者とののしらるることも、すでに一再とどに止まらざりけるなり。

「はははは、浪さんもいろいろな心配をするね。そんな事があるものかい。精出して養生して、来春らいはるはどうか暇を都合して、母さんと三人吉野よしのの花見にでも行くさ——やアもうここまで来てしまつた。疲れたろう。そろそろ帰らなくもいいかい」

二人は浜尽きて山起こる所に立てるなり。

「不動まで行きましょう、ね——イイエちつとも疲れはしません

の。西洋までも行けるわ」

「いいかい、それじゃそのシヨールをおやりな。岩がすべるよ、さ、しつかりつかまって」

武男は浪子をたすけ引きて、山の根の岩を伝える一条の細逕を、しばしば立ちどまりては憩いつつ、一丁あまり行きて、しやらしやら滝の下にいたりつ。滝の横手に小さき不動堂あり。松五六本、ひよろひよると崖より秀でて、斜めに海をのぞけり。

武男は岩をはらい、シヨールを敷きて浪子を憩わし、われも腰かけて、わが膝を抱きつ。「いい凧だね！」

海は実に凧げなるなり。近午の空は天心にいたるまで蒼々と晴れて雲なく、一碧の海は所々練れるように白く光りて、見渡

す限り目に立つ襷ひだだにもなし。海も山も春日を浴びて悠々ゆうゆうとして眠れるなり。

「あなた！」

「何？」

「なおりましたようか」

「エ？」

「わたくしの病氣」

「何をいうのかい。なおらずにどうする。なおるよ、きつとなおるよ」

浪子は良人おつとの肩に倚よりつ、「でもひよつとしたらなおらずにしまいはせんかと、そう時々思いますの。実母ははもこの病氣で亡なくな

りましたし——」

「浪さん、なぜ今日に限ってそんな事をいうのかい。だいじょうぶなおる。なおると医師いしやもいうじやアないか。ねエ浪さん、そうじやないか。そらア母おつかさんはその病気で——か知らんが、浪さんはまだ二十にもならんじやないか。それに初期だから、どんな事はたちがあつたつてなおるよ。ごらんな、それ内うちの親類おおかわらの大河原、ね、あれは右の肺がなくなつて、医者さじが匙さじをなげてから、まだ十五年も生きてるじやないか。ぜひなおるといふ精神せいしんがありさえすりアきつとなおる。なおらんといふのは浪さんが僕を愛せんからだ。愛するならきつとなおるはずだ。なおらずにこれをどうするかい」

武男は浪子の左手ゆんでをとりて、わが唇くちびるに当てつ。手には結婚の前、

武男が贈りしダイヤモンド入りの指環ゆびわさんぜん然として輝けり。

二人ふたりはしばし黙して語らず。江の島の方かたより出で来たりし白帆しらほ

一つ、海面うなづらをすべり行く。

浪子は涙に曇る目に微笑を帯びて「なおりますわ、きつとなお  
りますわ、——あああ、人間はなぜ死ぬのでしょう！ 生きたい  
わ！ 千年も万年も生きたいわ！ 死ぬなら二人で！ ねエ、二  
人で！」

「浪さんが亡くなれば、僕も生きちやおらん！」

「本当？ うれしい！ ねエ、二人で！——でもおつ母かあさまがい  
らッしやるし、お職分つとめがあるし、そう思っておいでなすツても自  
由にならないでしょう。その時はわたくしだけ先に行つて待たな

けりやならないのですねエ——わたくしが死んだら時々は思い出してくださるの？ エ？ エ？ あなた？」

武男は涙をふりはらいつつ、浪子の黒髪かみをかいなで「ああもうこんな話はよそうじやないか。早く養生して、よくなつて、ねエ浪さん、二人で長生きして、金婚式をしようじやないか」

浪子は良人おっとの手をひしと両手に握りしめ、身を投げかけて、熱き涙をはらはらと武男が膝ひざに落として「死んでも、わたしはあなたの妻ですわ！ だれがどうしたツて、病氣したツて、死んだツて、未来の未来さいきの後までわたしはあなたの妻ですわ！」

## 五の一

新橋停車場に浪子の病を聞きける時、千々岩の唇くちびるに上りし微笑は、解かんと欲して解き得ざりし難問の忽然こつぜんとしてその端緒を示せるに對して、まず揚がれる心の凱歌がいかなりき。にくしと思ふ川島片岡兩家の関鍵かんけんは実に浪子にありて、浪子のこの肺患は取りも直さず天特にわれ千々岩安彦のために復讐ふくしゅうの機会を与うるもの、病は伝染致命の大患、武男は多く家にあらず、姑媳こそくの間に軽々けいけい一片の言ことばを放ち、一指を動かさずして破裂せしむるに何の子細かあるべき。事成らば、われは直ちに飛びのきて、あとは彼らが互いに手を負い負わし生き死に苦しむ活劇を見るべきのみ。千々岩は実にかく思いて、いささか不快の眉まゆを開けるなり。

叔母の氣質はよく知りつ。武男がわれに怒りしほど、叔母はわれに怒らざるもよく知りつ。叔母が常に武男を子供視して、むしろわれ——千々岩の年よりも世故に長けたる頭に依頼するの多きも、よく知りつ。そもそもまた親戚知己も多からず、人をしかり飛ばして内心には心細く覚ゆる叔母が、若夫婦にあきたらで味方ほしく思うをもよく知りつ。さればいまだ一兵を進めずしてその作戦計画の必ず成効すべきを測りしなり。

胸中すでに成竹ある千々岩は、さらに山木を語らいて、時々川島家に行きては、その模様を探らせ、かつは自己——千々岩はいたく悔悛覚悟せる由をほのめかしつ。浪子の病すでに二月に及びてはかばかしく治せず、叔母の機嫌のいよいよ悪しきを聞き

し四月の末、武男はあらず、執事の田崎も家用を帯びて旅行せしすきをうかがい、一夜千々岩は不意に絶えて久しき川島家の門を入りぬ。あたかも叔母がひとり武男の書状を前に置き、深く深く沈吟せるところに行きあわせつ。

## 五の二

「いや、一向扱はかがいきませんじゃ。金は使う、二月も三月もたつたてようなるじゃなし、困つたものじゃて、のう安さん。——こういう時分にや頼もしか親類でもあつて相談すつとこじゃが、武はあの通り子供——」

「そこでございます、伯母様、実に小甥もこうしてのこのこ  
上がられるわけじゃないのですが、——御恩になった故叔父様や  
叔母様に対しても、また武男君に対しても、このまま黙って見て  
いられないのです。実にいわば川島家の一大事ですからね、顔を  
ぬぐってまいったわけで——いや、叔母様、この肺病という病ば  
かりは恐ろしいもんですね、叔母様もいくらもご存じでしょう、  
妻の病気が夫に伝染して一家総だおれになるはよくある例です、  
わたくしも武男君の上が心配でなりません、叔母様から少し御  
注意なさらんと大事になりますよ」

「そうじやて。わたしもそいが恐ろしかで、逗子に行くな行くな  
て、武にいうんじやがの、やっぱい聞かんで、見なさい——」

手紙をとりて示しつつ「医者がどうの、やれ看護婦がどうしたの、——ばかが、妻さいの事ばかい」

千々岩はにやり笑いつ。「でも叔母様さん、それは無理ですよ、夫婦に仲のよすぎるといふことはないものです。病氣であつて見ると、武男君もいよいよころそうあるべきじやありませんか」

「それじやてて、妻さいが病氣すツから親に不孝をすツ法はなかもんじや」

千々岩は慨然として嘆息し「いや実に困つた事ですな。せつかく武男君もいい細君ができて、叔母様さんもやつと御安心なさると、すぐこんな事になつて——しかし川島家の存亡は実に今ですな——とところでお浪さんの実家さとからは何か挨拶あいさつがありましたでしょ

うな」

「挨拶、ふん、挨拶、あの横柄おうへいな継母かかが、ふんちつとばかい土産やげを持つての、言い訳ばかいの挨拶じゃ。加藤の内うちから二三度、来は来たがの——」

千々岩は再び大息たいそくしつ。「こんな時にや実家さとからちと気をきかすものですが、病人の娘を押し付けて、よくいられるですね。

しかし利己主義が本尊の世の中ですからね、叔母様さん」

「そうとも」

「それはいいですが、心配なのは武男君の健康です。もしもの事があつたらそれこそ川島家は破滅です、——そういううちにもいつ伝染しないとも限りませんよ。それだって、夫婦というと、ま

さか叔母様さんかきが籬かきをお結いなさるわけにも行きませんし——」

「そうじゃ」

「でも、このままになすつちや川島家の大事になりますし」

「そうとも」

「子供の言うようにするばかりが親の職分じやなし、時々は子を泣かすが慈悲になることもありますし、それに若い者はいったん、思い込んだようでも少したつと案外気の変わるものですからね」

「そうじゃ」

「少しぐらいのかあいそうや気の毒は家の大事には換えられませんからね」

「おおそうじゃ」

「それに万一、子供でもできなされると、それこそ到底——」

「いや、そこじゃ」

膝乗り出して、がつくりと一つうなずける叔母のようすを見るより、千々岩は心の膝をうちて、翻然として話を転じつ。彼はその注ぎ込みし薬の見る見る回るを認めしのみならず、叔母の心しんで田んもとすでに一種子の落ちたるありて、いまだ左右とこうの顧慮におおわれいるも、その土を破りて芽ぐみ長じ花さき実るにいたるはただ時日の問題にして、その時日も勢いはなはだ長からざるべきを悟りしなりき。

その真質において悪人ならぬ武男が母は、浪子を愛せぬまでもにくめるにはあらざりき。浪子が家風、教育の異なるにかかわら

ず、なるべくおのれを棄<sup>す</sup>てて姑<sup>しゆうと</sup>に調和せんとするをば、さすがに母も知り、あまつさえそのある点において趣味をわれと同じゆうせるを感じて、口にしかれど心にはわが花嫁のころはとてもあれほどに届かざりしとひそかに思えることもありき。さりながら浪子がほとんど一月にわたるぶらぶら病のあと、いよいよ肺結核の忌まわしき名をつけられて、眼前に喀<sup>かっけつ</sup>血の恐ろしきを見るに及び、なおその病の少なからぬ費用をかけ時日を費やしてはかばかしき快復を見ざるを見るに及び、失望といわんか嫌<sup>けんえん</sup>厭と名づけんか自ら分<sup>わか</sup>つあたわざるある一念の心底に生<sup>は</sup>え出<sup>い</sup>でたるを覚えつ。彼を思い出<sup>い</sup>で、これを思いやりつつ、一種不快なる感情の胸中に醞<sup>うんじよう</sup>釀<sup>じよう</sup>するに従つて、武男が母は上<sup>うわ</sup>うちおおいたる顧慮の一塊

一塊融け去りてかの一念の驚くべき勢いもて日々長じ来たるを覚えしなり。

千々岩は分ぶんみょう明めいに叔母が心の逕路けいろをたどりて、これよりおりおり足を運びては、たださりげなく微雨軽風の両三点を放つて、その顧慮をゆるめ、その萌芽ほうがをつちかいつつ、局面の近くに発展せん時を待ちぬ。そのおりおり武男の留守をうかがいて川島家に往来することのおぼろにはかに漏れしころは、千々岩はすでにその所作の大要をおえて、早くも舞台より足を抜きつつ、かの山木に向かい近きに起こるべき活劇の予告まえばれをなして、あらかじめ祝杯をあげけるなり。

## 六の一

五月初旬はじめ、武男はその乗り組める艦ふねのまさに呉くれより佐世保させほにおもむき、それより函館はこだて付近に行なわるべき連合艦隊の演習に列せんため引きかえして北航するはずなれば、かれこれ四五十日がほどは帰省の機会おきを得ざるべく、しばしの告別いとまかたがた、一夜あるよ帰京して母の機嫌きげんを伺いたり。

近ごろはとかく奥歯こゝいに物のはさまりしように、いつ歸りても機嫌きげんよからぬ母の、今夜こよいは珍めづしくにこにこ顔を見せて、風呂ふろを焚たかせ、武男が好物の薩摩汁さつまじるなど自ら手をおろさぬばかり肝かんいりてすすめつ。元来あまり細かき事には気をとめぬ武男も、ようすの

いつになくあらたまれるを不思議——とは思ひしが、何歳いくつになつてもかあいがられてうれしからぬ子はなきに、父に別れてよりひとしお母なつかしき武男、母の機嫌の直れるに心うれしく、快く夜食の箸はしをとりしあとは、湯に入りてはらはら降り出せし雨の音を聞きつつ、この上の欲には浪子が早く全快してここにわが帰りを待つていようにならばなど今日立ち寄りて来し逗子の様子思いい浮かべながら、陶然とよき心地こころになりて浴を出いで、使女おんなが被はるおふだんぎ平生服を無造作に引きかけて、葉巻握りし右手めての甲に額をこすりながら、母が八畳の居間に入り来たりぬ。

小間使いに肩揉ひねらして、羅宇らうの長き煙管きせるにて国分こくぶをくゆらしたる母は目をあげ「おお早上がって来たな。ほほほほ、おとつ

さまがちようどそうじやったが——そ、その座ぶとんにすわツがいい。——松、和女郎おまえはもうよかで、茶を入れて来なさい」と自ら立って茶棚ちやだなより菓子鉢を取り出いでつ。

「まるでお客様ですな」

武男は葉巻を一吸い吸あいて碧あおき煙けぶりを吹きつつ、うちほほえむ。

「武どん、よう帰かえつたもつた。——実はその、ちつと相談もあるし、是非ぜっひ帰かえつてもらおうと思つてた所じやった。まあ帰かえつてくれたで、いい都合ごあした。逗子——寄きつて来きつろの？」

逗子はしげく往来するを母のきらうはよく知れど、まさかに見え透とおいたるうそも言いかねて、

「はあ、ちよつと寄きつて来きました。——大分だいぶん血色も直りかけたよ

うです。<sup>おつか</sup>母さんに済まないツて、ひどく心配していましたツけ」

「そうかい」

母はしげしげ武男の顔をみつめつ。

おりから小間使いの茶道具を持<sup>も</sup>て来しを母は引き取り、

「松、<sup>おまえ</sup>御身はあっち行つていなさい。そ、その襖<sup>ふすま</sup>をちやんとしめ

て——」

## 六の二

手ずから茶をくみて武男にすすめ、われも飲んで、やおら煙管<sup>きせる</sup>をとりあげつ。母はおもむろに口を開きぬ。

「なあ武どん、わたしももう大分弱だいぶんいましたよ。去年のリユウマチでがつつり弱い申した。昨日お墓きのうまいりしたばかりで、まだ肩腰が痛んでな。年が寄ると何かと心細うなツて困いますよ——武どん、卿おまえからだを大事にしての、病気をせん様ごとしてくれんとないませんぞ」

葉卷の灰をほとほと火鉢の縁にはたきつつ、武男はでつぷりと肥えたれどさすがに争われぬ年波の寄る母の額を仰ぎ「私わたくしは始終外ほかにいますし、何もかも母おつかさんが総理大臣ですからな——浪でも達者ですといいですが。あれも早くよくなって母おつかさんのお肩を休めたいツてそういつも言ってます」

「さあ、そう思つとるじやろうが、病気が病気でな」

「でも、大分快<sup>いいほう</sup>方になりましたよ。だんだん暖かくはなるし、とにかく若い者ですからな」

「さあ、病気が病氣じやから、よく行けばええがの、武どん——  
おいしゃ  
医師の話じやったが、浪どんの母御<sup>かさま</sup>も、やつぱい肺病で亡<sup>な</sup>くな  
ツてじやないかの？」

「はあ、そんなことをいつてましたがね、しかし——」

「この病氣は親から子に伝わってじやないかい？」

「はあ、そんな事を言いますが、しかし浪のは全く感冒<sup>かぜ</sup>から引き  
起こしたんですからね。なあに、母<sup>おつか</sup>さん用心次第です、伝染の、  
遺伝のいのですが、実際そういうほどでもないですよ。現に浪の  
おとっさんもあんな健<sup>じょうぶ</sup>康<sup>かた</sup>な方ですし、浪の妹——はああのお駒<sup>こま</sup>

さんです——あれも肺のはの字もないくらいです。人間は医師いしやの  
いうほど弱いものじゃありません、はははははは

「いいえ、笑い事じゃありません」と母はほとほと煙管きせるをはたき  
ながら

「病気のなかでもこの病気ばかりは恐ろしいモンでな、武どん。

卿おまえも知つとるはずじゃが、あの知事の東郷とうごう、な、卿おまえがよくけん

かをしたあの児この母御かさまな、どうかい、あの母ひとが肺病で死んでの、

一昨年おとしの四月じゃったが、その年の暮れに、どうかい、東郷さん

もやつぱい肺病で死んで、ええかい、それからあの息子むすこさん——

どこかの技師をしとつたそうじゃがの——もやつぱい肺病でこの

あいだ亡くなつた、な。みいな母御かさまのがうつつたのじゃ。まだこ

んな話が幾つもあります。そいでわたしはの、武どん、この病氣ばかいは油断がならん、油断をすれば大事じやと思うツがの」

母は煙管をさしおきて、少し膝ひざをすすめ、黙して聞きおれる武男の横顔をのぞきつつ

「実はの、わたしもこの間から相談したいと思っ居おい申したが——」

少し言いよどんで、武男の顔しげしげとみつめ、

「浪じゃがの——」

「はあ？」

武男は顔をあげたり。

「浪を——引き取つてもろちやどうじやろの？」

「引き取る？ どう引き取るのですか」

母は武男の顔より目をはなさず、「実家によ」

「実家に？ 実家で養生さすのですか」

「養生もしようがの、とにかく引き取って——」

「養生には逗子がいいですよ。実家では子供もいますし、実家で養生さすくらいなら此家の方がよつぽどましですからね」

冷たくなりし茶をすすりつつ、母は少し震い声に「武どん、卿酔っちゃいまいの、わかんふりするのかい？」じつとわが子の顔みつめ「わたしがいうのはな、浪を——実家に戻すのじゃ」

「戻す？……戻す？——離縁ですな!!」

「こーれ、声が高かじやなツか、武どん」うちふるう武男をじつ

と見て

「離縁じえん、そうじゃ、まあ離縁じえんよ」

「離縁りえん！ 離縁！！——なぜですか」

「なぜ？ さつきからいう通り、病気が病氣じゃからの」

「肺病だから……離縁するとおっしゃるのですな？ 浪を離縁する？」

「そうよ、かあいそうじゃがの——」

「離縁※」

武男の手よりすべり落ちたる葉巻は火鉢に落ちておびただしくうち煙けむりぬ。一燈じじと燃えて、夜の雨ははらと窓をうつ。

## 六の三

母はしきりに烟けふる葉巻を灰に葬りつつ、少し乗り出して

「なあ、武どん、あんまいふいじやから卿おまえもびつくいするなもつともつごあすがの、わたしはもうこれまで幾いくばん夜も幾晩も考えた上の話じや、そんなもいで聞いてたもらんといけませんぞ。

そらアもう浪にはわたしも別にこいという不足はなし、卿おまえも気に入つとつこつじやから、何もこちの好きで離縁じえんのし申もすじやごあはんがの、何を言うても病気が病気——」

「病気は快い方ほうに向いてるです」武男は口早に言いて、きつと母親の顔を仰ぎたり。

「まあわたしの言うことを聞きなさい。——それは目下の所じや  
 わるくないかもしらんがの、わたしはよく医師おいしやから聞いたが、  
 この病氣とときばかいは一時よかつてもまたわるくなる、暑さ寒さです  
 ぐまた起こるもんじや、肺結核ひとりでようなた人はまあ一人もない、  
 お医者ひとりがそう言い申すじやての。よし浪が今死なんにしたところが、  
 そのうちまたきつとわるくなッはうけあいじや。そのうちにはき  
 つと卿おまえに伝染おまえすツなこらうけあいじや、なあ武おまえどん。卿おまえにうつる、  
 子供おまえが出来でくる、子供おまえにうつる、浪おまえばかいじやない、大事な主人おまえの  
 卿おまえも、の、大事な家あとり嫡あとりの子供も、肺病おまえ持ちなッて、死んでしも  
 うて見おまえなさい、川島家おまえはつぶれじやなッかい。ええかい、卿おまえがお  
 とつさまの丹精たんせいで、せつかくこれまおまえになッて、天子様おまえからお

直々じきじきに取り立ててくださったこの川島家も卿おまえの代でつぶれツしまいますぞ。——それは、も、浪もかあいそう、卿おまえもなかなかきつか、わたしも親でおつてこういう事言い出すなおもしろくない、つらいがの、何をいうても病気が病氣じゃ、浪がかあいそうじゃて主人の卿おまえにや代えられん、川島家にも代えられん。ようく分別のして、ここは一つ思い切つてたもらんとないませんぞ」

黙然もくねんと聞きいる武男が心には、今日見舞い来し病妻の顔ありありと浮かみつ。

「母さんおつか、私はそんな事はできないです」

「なつぜ？」母はやや声高こわだかになりぬ。

「母さんおつか、今そんな事をしたら、浪は死にます！」

「そいは死ぬかもしれん、じやが、武どん、わたしは卿の命おまえが惜しい、川島家が惜しいのじや！」

「母おっかさん、そうわたしを大事になさるなら、どうかわたしの心をくんでください。こんな事を言うのは異なようですが、実際わたしにはそんな事はどうしてもできないです。まだ慣れないものですから、それはいろいろ届かぬ所はあるですが、しかし母おっかさんを大事にして、私わたくしにもよくしてくれる、実に罪も何もないあれを病氣したからって離別するなんぞ、どうしても私わたくしはできないです。肺病だつてなおらん事はありますまい、現になおかけとるです。もしまたなおらずに、どうしても死ぬなら、母おっかさん、どうか私わたくしの妻さいで死なしてください。病氣が危険なら往来も絶つです、用心も

するです。それは母さんおつかの御安心なさるようになります。でも離別だけはどうかわたくしも私はできないです！」

「へへへへ、武男、卿おまえは浪の事ばツかいいうがの、自分は死んでもかまわんか、川島家はつぶしてもええかい？」

「母さんおつかはわたしのからだばツかりおっしやるが、そんな不人情な不義理な事して長生きしたツてどうしますか。人情にそむいて、義理を欠いて、決して家のためにいい事はありません。決して川島家の名誉でも光栄でもないです。どうでも離別はできません、断じてできないです」

難関あるべしとは期ごしながら思いしよりもはげしき抵抗に出会いし母は、例の癩癬かんぺきのむらむらと胸むな先にこみあげて、額のあ

たり筋立ち、こめかみ顫うごき、煙管持つ手のわなわなと震わるるを、  
ようよう押ししずめて、わずかに笑えみを装まいつ。

「そ、そうせき込まんでも、まあ静かに考おまえて見なさい。卿おまはま  
だ年が若かよで、世間よのなかを知しんなさらんがの、よくいうわ、それ、

小の虫を殺しても大の虫は助けろじや。なあ。浪は小の虫、卿おま—

—川島家は大の虫じや、の。それは先方むこうも氣の毒、浪もかあいそ  
うなよなものじやが、病氣すつがわるかじやなツか。何と思われ  
たて、川島家が断絶するよかまだええじやなツか、なあ。それに  
不義理の不人情の言いなはるが、こんな例ことは世間に幾らもありま  
す。家風に合あわんと離縁じえんする、子供がなかと離縁じえんする、悪い病氣  
があつと離縁じえんする。これが世間の法、なあ武どん。何の不義理な

事も不人情な事もないもんじや。全体いったいこんな病気のした時やの、

嫁の実家さとから引き取つてええはずじや。先方むこうからいわんからこつ

ちで言い出すが、何のわるか事恥ずかしか事があツモンか」

おっか

「母おっかさんは世間世間とおつしやるが、何も世間が悪い事をするから自分も悪い事をしていいという法はありません。病気すると離別するなんか昔の事です。もしまたそれが今の世間の法なら、今の世間は打ちぶこわしていい、打ちぶこわさなけりやならんです。母おっかさんはこつちの事ばかりおつしやるが、片岡の家うちだツてせつかく嫁にやった者が病気になつたからツて戻されていい気持ちがありませんか。浪だつてどの顔さげて帰られますか。ひよつとこれがさかさまで、わたしが肺病で、浪の実家さとから肺病は險けん呑のんだからツ

て浪を取り戻したら、母さんおつかいい心地こころもちがしますか。同じ事おんなです」

「いいえ、そいは違う。男と女とはまた違うじやなツか」

「同じ事です。情理からいって、同じ事です。わたしからそんな事をいっちやおかしいようですが、浪もやつと喀かっけつ血けつがとまって少し快いいほう方ほうに向いたかという時じやありませんか、今そんな事をするのは実に血を吐かすようなものです。浪は死んでしまいきますと死ぬです。他人だツてそんな事はできません、母さんおつかはわたしに浪を殺せ……とおっしやるのですか」

武男は思わず熱き涙をはらはらと畳に落としつ。

## 六の四

母はつと立ち上がつて、仏壇より一つの位牌いはいを取りおろし、座に歸つて、武男の眼前めさきに押しすえつ。

「武男、おまえ卿はな、女親じゃからツてわたしを何とも思わんな。さ、おとつさまの前まで今一度言つて見なさい、さ言つて見なさい。御先祖代々のお位牌も見ておいでじゃ。さ、今一度言つて見なさい、不孝者めが!!」

きつと武男をにらみて、続けざまに煙管もて火鉢の縁打ちたたきぬ。

さすがに武男も少し気色けしきばみて「なぜ不孝です?」

「なぜ? なぜもあツモンか。妻さいの肩かたばツかい持つて親のいう事

は聞かんやつ、不孝者じやなツか。親が育てたからだを粗略そまつにして、御先祖代々の家をつぶすやつは不孝者じやなツか。不孝者、

武男、卿おまえは不孝者、大不孝者じやと」

「しかし人情——」

「まだ義理人情をいうツか。卿おまえは親よか妻さいが大事なツか。たわけめが。何いうと、妻、妻、妻ばかいいう、親をどうすツか。何をしても浪ばツかいいう。不孝者めが。勘当すツど」

武男は唇くちびるをかみて熱涙を絞りつつ「母おつかさん、それはあんまりです」

「何があんまいだ」

「私わたくしは決してそんな粗略な心は決して持つちやいないです。母おつかさ

んにその心が届きませんか」

「そいならわたしがいう事をなせきかぬ？ エ？ なぜ浪を離縁じえん

センツか」

「しかしそれは」

「しかしもねもンじや。さ、武男、妻さいが大事か、親が大事か。エ

？ 家が大事？ 浪が——？ ——エエばかめ」

「はつしと火鉢をうちたる勢いに、煙管の羅字らうはぼつきと折れ、

雁首がんくびは空を飛んではたと襖ふすまを破りぬ。途端に「はツ」と襖のあ

なたに片唾かたずをのむ人の気けはいせしが、やがて震い声に「御免——

遊ばせ」

「だれ？——何じや？」

「あの！ 電報が……」

襖開き、武男が電報をとりて見、小間使いが女主人あるじの一睨げいに会いて半ば消え入りつつそこそこに去りしまで、わずか二分ばかりの間——ながら、この瞬間に二人ふたりが間の熱やくだや下りて、しばらくは母子おやこともに黙然もくねんと相對しつ。雨はまたひとしきり滝のように降りそそぐ。

母はようやく口を開きぬ。目にはまだ怒りのひらめけども、語はどこやらに湿りを帯びたり。

「なあ、武どん。わたしがこういうも、何も卿おまえのためわるかごとすっじやなかからの。わたしにやたツた一人ひとりの卿おまえじや。卿おまえに出世おまへをさせて、丈夫な孫抱でえて見たかばかいがわたしの楽しみじやか

らの」

黙然と考え入りし武男はわずかに頭を上げつ。

「おつか  
母さん、とにかく私も」電報を示しつつ「この通り出発が急に

なツて、明日はあすもおそくも帰艦せにやならんです。一月ぐらいすると帰つて来ます。それまではどうかだれにも今夜の話は黙つていてください。どんな事があつても、私が帰つて来るまでは、待つていてください」

\*

あくる日武男はさらに母の保証をとり、さらに主治医を訪いて、ねんごろに浪子の上を託し、午後の汽車にて逗子におりつ。

汽車を下れば、日落ちて五日の月薄紫の空にかかりぬ。野川の

橋を渡りて、一路の沙すなはほのぐらき松の林に入りつ。林をうがち  
て、桔はねつるべ 檣まおとの黒く夕空にそびゆるを望める時、思いがけなき爪  
音聞まおとこゆ。「ああ琴をひいている……」と思えば心しんの臟をむし  
らるる心地こころちして、武男はしばし門外なんだに涙をぬぐいぬ。今日は常よ  
りも快かりしとて、浪子は良人おつとを待ちがてに絶えて久しき琴取り  
出いでて奏かなでしなりき。

顔色の常ならぬをいぶかられて、武男はただ夜ふかししゆえと  
のみ言い紛らしつ。約あれば待ちて居し晩餐ばんさんの卓つくえに、浪子は良  
人おつとと対つといしが、二人ふたりともに食すすまず。浪子は心細さをさびしき  
笑えみに紛らして、手ずから良人おつとのコートおつとのボタンゆるめるをつけ直  
し、ブラシもて丁寧にはらいなどするうちに、終列車の時刻迫れ

ば、今はやむなく立ち上がる武男の手にすがりて

「あなた、もういらッしやるの？」

「すぐ帰ってくる。浪さんも注意して、よくなッていなさい」

互いにしつかと手を握りつ。玄関に出いづれば、姥うばのいくは靴くつを

直ほくし、僕もへいの茂平ステーションは停車場まで送るとて手かばんを左ゆんで手に、月は

あれど提ちようちん燈ちんともして待ちたり。

「それじゃばあや、奥様を頼んだぞ。——浪さん、行つて来るよ」

「早く帰つてちようだいな」

うなずきて、武男は僕が照らせる提燈の光を踏みつつ門を出いでて十数歩、ふりかえり見れば、浪子は白き肩掛けを打ちきて、いと門にたたずみ、ハンケチを打ちふりつつ「あなた、早く帰つ

てちようだいな」

「すぐ帰つて来る。——浪さん、夜気やきにうたれるといかん、早くはいんなさい！」

されど、二度三度ふりかえりし時は、白き姿の朦朧もうろうとして見えたりしが、やがて路みちはめぐりてその姿も見えずなりぬ。ただ三たび

「早く帰つてちようだいな」

という声のあとを慕うてむせび来るのみ。顧みれば片破かたわれづき月の影冷ややかに松にかかれり。

## 七の一

「お帰り」の前触れ勇ましく、先刻玄関先に二人びきをおりし山木は、早湯に入りて、早咲きの花菖蒲はなしょうぶの活いけられし床を後ろに、ふうわりとした座ぶとんにあぐらをかきて、さあこれからがようようこつちのからだになりしという風情ふぜい。欲には酌しやく人がちと無意気ぶいきと思おもい貌がお、しかし愉快らしく、妻さいのお隅すみの顔じろりと見て、まず三四杯かたぶ傾かたくるところに、婢おんなが持もて来し新聞の号外ランプの光にてらし見つ。

「うう朝鮮か……東学党とうがくとうますます猖獗しょうけつ……なに清国しんこくが出兵したと……。さあ大分だいぶんおもしろくなッて来たぞ。これで我邦こっちも出兵する——戦争いくさになる——さあもうかるぜ。お隅、前祝いだ、

卿おまえも一つ飲め」

「あんた、ほんまに戦争いくさになりますやろか」

「なるとも。愉快、愉快、実に愉快。——愉快といや、なあお隅、今日きょうちよつと千々岩ちぢわに会つたがの、例の一条も大分はか捗はかが行きそうだて」

「まあ、そうかいな。若旦那だんなが納得しやはつたのかいな」

「なあに、武男さんはまだ帰つて来ないから、相談も納得もありやしないが、お浪さんがまた血を咯はいたんだ。ところで御隠居ももうだめだ、武男が帰らんうちに断行するといっているそうだ。

も一度千々岩につつついてもらえば、大丈夫できる。武男さんが帰りやなかなか断行もむずかしいからね、そこで帰らんうちにす

つかり処置かたをつけてしまおうと御隠居も思つとるのだて。もうそうなりやアこつちのものだ。——さ、御台所みだいどころ、お酌しやくだ」

「お浪はんもかあいそうやな」

「お前もよつぽど変ちきな女だ。お豊とよがかあいそうだからお浪さんを退のいてもらおうというかと思えば、もうできそうになると今度アお浪さんがかあいそう！ そんなばかな事は中止よしとして、今度はお豊とよを後あと釜がまに据える計略ふんべつが肝心だ」

「でもあんた、留守にお浪はんを離縁して、武男はん——若旦那が承知しなはるまいがな、なああんた——」

「さあ、武男さんが帰ったら怒おこるだろうが、離縁してしまつて置けば、帰って来てどう怒つてもしょうがない。それに武男さんは

親孝行おやおもいだから、御隠居が泣いて見せなさりア、まあ泣き寝入りだかなめな。そつちはそれでよいとして、さて肝心要のお豊姫の一条だが、とにかく武男さんの火の手が少ししずつまっから、食糧つきの行儀見習いともいう口おしだし実で、無理に押しかけるだな。なあに、むずかしいようでもやすいものさ。御隠居の機嫌きげんさえとりアできるこつた。お豊がいよいよ川島男爵夫人になりア、彼女あれは恋がかなうというものだし、おれはさしより舅しゅうとやく役で、武男さんはあんな坊ちゃんだから、川島家の財産はまずおれが扱ってやらなけりやならん。すこぶる妙——いや妙な役を受け持つて、迷惑じゃが、それはまあ仕方がないとして、さてお豊だがな」

「あんだ、もう御飯おまんまになはれな」

「まあいいさ。取るとやるの前祝いだ。——ところでお豊だがの、  
 おまえおまえ卿もつとしつけ躰をせんと困るぜ。あの通り毎日駄々だだをこねてばかりい  
 ちや、先方あつち行つてからが實際思われるぞ。観音様がしゅうと姑だツて、あ  
 あじやあいそ愛想をつかさぜ」

「それじゃてて、あんた、躰しつけはわたしばかいじやでけまへんがな。  
 いつでもあんたは——」

「おつとその言い訳が拙者大きらいでござるて。はははははは。  
 論より証拠、おれが躰をして見せる。さ、お豊をここに呼びなさい」

## 七の二

「お嬢様、お奥でちよいといらッしやいましたッて」

と小間使いの竹が襖を明けて呼ぶ声に、今しも夕化粧を終えてまだ鏡の前を立ち去り兼ねしお豊は、悠々<sup>ゆうゆう</sup>とふりかえり

「あいよ。今行くよ。——ねエ竹や、ここンとこが」

と鬢<sup>びん</sup>をかいなでつつ「ちつとそそけちやいないこと？」

「いいえ、ちつともそそけてはいませんよ。おほほほほ。お化粧<sup>つくり</sup>がよくできましたこと！ ほほほほッ。ほれぼれいたしますよ」

「いやだよ、お世辞なんぞいッてさ」言いながらまた鏡をのぞいてにこりと笑う。

竹は口打ちおおいし袂<sup>たもと</sup>をとりて、片唾<sup>かたず</sup>を飲みつつ、

「お嬢様、お待ち兼ねでございますよ」

「いいよ、今行くよ」

ようやく思い切りし体ていにて鏡の前を離れつつ、ちよこちよこ走りに幾間まか通りて、父の居間に入り行きたり。

「おお、お豊か。待っていた。ここへ来な来な。さ母おつかさんに代わつて酌でもしなさい。おつと乱暴な銚ちようし子の置き方をするぜ。茶の湯生け花のけいこまでした令嬢にや似合わんぞ。そうだそうだ。そう山形やまがたに置くものだ」

はや陶然と色づきし山木は、妻さいの留むるをさらに幾杯か重ねつつ「なあお隅すみ、お豊がこう化粧おつくりした所は随分別べつべん嬪びんだな。色は白し——姿なりはよし。内うちじやそうもないが、外うちに出りやちよいとお世

辞もよし。惜しい事には母さんに肖て少し反齒だが——」

「あんた！」

「目じりをもう三分上げると女っぷりが上がるがな——」

「あんた！」

「こら、お豊何をふくれるのだ？ ふくれると嬢むすめっぷりが下がるぞ。何もそう不景気な顔をせんでもいい、なあお豊。卿おまえがうれしがる話があるのだ。さあ話賃ちよこに一杯注つげ注つげ」

なみなみと注つがせし猪口ちよこを一息ちよこにあおりつつ、

「なあお豊、今も母さんおつかと話したことだが、卿おまえも知つとるが、武

男さんの事だかの——」

むなしき槽そうれき櫪きの間に不平ふてね臥したる馬の春草かんばの香しきを聞ける

ごとく、お豊はふつと頭かしらをもたげて両耳を引つ立てつ。

「卿おまえが写真を引つかいたりしたもんだからとうとう浪子さんも崇たたられて——」

「あんた！」お隅夫人は三たび眉まゆをひそめつ。

「これから本題に入るのだ。とにかく浪子さんが病あんばい気が悪い、  
というんで、まあ離縁になるのだ。いや、まだ先方に談判はせ

ん、浪子さんも知らんそうじゃが、とにかく近いうちにそうなり  
そうなのだ。ところでそつちの処置かたがついたら、そろそろ後あと釜がま

の売りつけ——いやここだて、おれも母おつかさんも卿おまえをな、まあお浪

さんのあとに入れたいと思つているのだ。いや、そうすぐ——と  
いうわけにも行くまいから、まあ卿おまえを小間使い、これさ、そうび

つくりせんでもいいわ、まあ候補生のつもりで、行儀見習いという名義で、川島家あしこに入り込ますのだ。——御隠居ごいんこに頼んで、ないかい、ここだて——」

一息つきて、山木は妻さいと娘の顔をかれよりこれと見やりつ。

「ここだて、なお豊。少し早いようだが——いって聞かして置く

事があるがの。卿おまえも知つとる通り、あの武男ぶおさんの母おつかさん——御

隠居は、評判の癩かんしゃく癩しゃく持ちちの、わがまま者の、頑固がんこの——おつ

と卿おまえおつかが母おつかさんを悪あつこ口くちしちや濟まんがの——とにかくここにすわ

つておいでのこの母おつかさんのように——やさしくない人だて。しか

し鬼でもない、蛇じゃでもない、やっぱり人間にんげんじゃ。その呼吸こそさえ飲

み込むと、鬼よめの媳めかけでも蛇じゃの女房にようばにでもなれるものじゃ。なあに、

あの隠居ぐらい、おれが女なら二日もそばへいりや豆腐のようにして見せる。——と自慢した所で、仕方ないが、實際あんな老としよ人でも扱いようじゃ何でもなくて。ところで、いいかい、お豊、卿おまえがいよいよ先方へ、まあ小間使い兼細君候補生として入り込む時になると、第一今のようになまけていちやならん、朝も早く起きて——老としより人は目が早くさめるものじゃ——ほかの事はどうでもいいとして、御隠居の用をよく達たすのだ。いいかい。第二にはだ、今のように何といえばすぐふくれるようじゃいけない、何でもかでも負けるのだ。いいかい。しかられても負ける、無理をいわれても負ける、こつちがよけりやなお負ける、な。そうすると先方むこうで折れて来る、な、ここがよくいう負けて勝つのだ。決して

腹を立つちやいかん、よしか。それから第三にはだ、——これは少し早過ぎるが、ついでだからいつとくがの、無事に婚礼が済んだッて、いいかい、決して武男さんと仲がよすぎちやいけない。何さ、内々はどうでもいいが、表おもてむき面の所をよく注意しなけりやいけんぜ。姑しゅうとこ御にはなれなれしくさ、なるたけ近くして、婿殿にや姑の前で毒にならんくらいわるくちの小悪口もつくくらいでなけりやならぬ。おかしいモンで、わが子の妻さいだから夫婦仲がいいとうれしがりそうなもんじゃが、実際あまりいと姑の方ではおもしろく思わぬ。まあ一種の嫉妬しつと——わがままだな。でなくも、あまり夫婦仲がいいと、自然姑の方が疎略になる——と、まあ姑の方では思うだな。浪子さんも一つはそこでやりそこなつたかもし

れぬ。仲がよすぎての——おツと、そう角が生えそうな顔しちや  
いけない、なあお豊、今いった負けるのはそこじゃぞ。ところで、  
いいかい、なるだけ注意して、この女は真ほんにわたしの媳よめだ、子息せがれ  
の妻さいじゃない、というように姑に感じさせなけりやならん。姑しゅう  
とよめ  
媳よめのけんかは大抵この若夫婦の仲がよすぎて、姑に孤立の感を  
起こさすから起こるのが多いて。いいかい、卿おまえは御隠居の媳よめだ、  
とそう思っていなけりやならん。なあに御隠居が追っつけめでた  
くなつたあとじゃ、武男さんの首ツ玉にかじりついて、ぶら下が  
つてあるいてもかまわんさ。しかし姑の前では、決して武男さん  
に横目でもつかつちやならんぞ。まだあるが、それはいぎ乗り込  
みの時にいって聞かす。この三か条はなかなか面倒じゃが、しか

おまえ  
し卿も恋しい武男さんの奥方になろうというんじゃないか、辛抱  
が大事じゃぞ。明日あすといわずと今夜からそのけいこを始めるのだ」  
言葉のうちに、襖ふすま開きて、小間使いの竹「御返事があるそうで  
ございます」

と一封の女筆によひつの手紙を差し出しぬ。

封をひらきてすうと目を通したる山木は、手紙を妻さいと娘の目さ  
きにひけらかしつつ

「どうだ、川島の御隠居からすぐ来てくれは！」

## 七の三

武男が艦隊演習におもむける二週の後、川島家より手紙して山木を招ける数日前、逗子に療養せる浪子はまた咯血して、急に医師を招きつ。幸いにして咯血は一回にしてやみ、医師は当分事なかるべきを保証せしが、この報は少なからぬ刺激を武男が母に与えぬ。間両三日を置きて、門を出づることまれなる川島未亡人の彪大なる体は、飯田町なる加藤家の門を入りたり。

離婚問題の母子の間に争われつるかの夜、武男が辞色の思うにましてはげしかりしを見たる母は、さすがにその請いに任せて彼が帰り来るまでは黙止すべき約をばなしつれど、よしそれまでまてばとて武男が心は容易に移すべくもあらずして、かえつて時たつほど彼の愛着のきずなはいよいよ絶ち難かるべく、かつ思いも

寄らぬ障礙しょうげの出で来たるべきを思いしなり。さればその子のいまだ帰らざるに乗じて、早く処置をつけ置くのむしろ得策なるを思いしが、さりとてさすがにかの言質ことじちもありこの顧慮もまたなきにあらずして、その心はありながら、いまだ時々来てはあおる千々岩を満足さすほどの果敢なる処置をばなさざるなり。浪子が再度咯血の報を聞くに及びて、母は決然としてかつて媒妁ばいしゃくをなし加藤家を訪といたるなり。

番町と飯田町といわば目と鼻の間に棲すみながら、いつなりしか媒妁の礼に来しよりほとんど顔を見せざりし川島未亡人が突然来訪せし事の尋常にあらざるべきを思いつつ、ねんごろに客間に請しょうぜし加藤夫人もその話の要件を聞くよりはたと胸をつきぬ。その

かつて片岡川島両家を結びたる手もて、今やそのつなげる糸を絶ちくれよとは！

いかなる顔のいかなる口あればさる事は言われるかと、加藤夫人は今さらのように客のようすを打ちながめぬ。見ればいつにかわらぬ肥満の体格、太き両手を膝ひざの上に組み、膚はだえたゆまず、目まじろがず、口を漏るる薩さつべん弁よどの淀みもやらぬは、戯れにあらず、狂気せしにもあらで、まさしく分別の上と思えば、驚きはまた胸を衝つく憤りにかわりつ。あまり勝手な言いいぶん条と、罵倒ばとうせんずる言ことのすでに咽のどもとまで出いでけるを、実の娘とも思う浪子が一生の浮沈の境と、わずかに飲み込みて、まず問いつ、また説きつ、なだめもし、請いもしつれど、わが事をのみ言い募る先方の耳にはす

こしも入らで、かえつてそれは入らぬ繰り言、こつちの話を浪の  
 実家に伝えてもらえば要は済むというふうの明らかに見ゆれば、  
 話聞く聞く病める姪の顔、亡き妹——浪子の実母——の臨終、浪  
 子が父中將の傷心、など胸のうちにあらわれ来たり乱れ去りて、  
 情けなく腹立たしき涙のわれ知らず催し来たれる夫人はきつと容  
 をあらため、当家においては御両家の結縁のためにこそ御加勢  
 もいたしつれ、さる不義非情の御加勢は決してできぬこと、良人  
 に相談するまでもなくその義は堅くお断わり、ときつぱりとはね  
 つけつ。

忿然として加藤の門を出でたる武男が母は、即夜手紙して山  
 木を招きつ。(篤実なる田崎にてはらち明かずと思えるなり)。

おりもおりとて主人の留守に、かつはまどい、かつは怒り、かつは悲しめる加藤子爵夫人と千鶴子と心を三方に砕きつつ、母はさ言えどいかにも武男の素意にあるまじと思ふより、その乗艦の所在を糺ただして至急の報を発せる間まに、いらちいらちし武男が母は早直接じき談判と心を決して、その使節を命ぜられたる山木の車はすでに片岡家の門にかかりしなり。

## 八の一

山木が車赤坂氷川町ひかわちようなる片岡中將の門を入れる時、あたかも英姿さつそう颯たる一將軍の栗毛くりげの馬にまたがりつつ出いで来たれるが、

車の駆け込みし響おとにふと驚きて、馬は竿立さおだちになるを、馬上の將軍は馬丁をわずらわすまでもなく、たづなを絞たづなりて容易に乗り静めつつ、一回圈えがを画えがきて、かつかつ憂々かつかつと歩ませ去りぬ。

みごとの武者ぶりを見送りて、声こわづくろいしていかめしき中將の玄関にかかれる山木は、幾多の権門をくぐりなれたる身の、常にはあるまじく胆落たんつるを覚えつ。昨夜川島家に呼ばれて、その使命を託されし時も、頭かしらをかきつるが、今現にこの場に臨みては彼は実に大なりと誇れる胆きものなお小にして、その面皮のいまだ十分うらに厚からざるを憾うらみしなり。

名刺一たび入り、書生二たび出いでて、山木は応接間に導かれつ。テーブルの上には清しんかん韓かんの地図一葉広げられたるが、まだ清めも

やらぬ火皿ひざらのマッチシガー巻シガー苳のからとともに、先座の話をほぼ想おもわしむ。げにも東学党の乱、清国出兵の報、わが出兵のうわさ、相ついで海内かいだいの注意一に朝鮮問題に集まれる今日きょうこのごろは、主人中將も予備にこそおれおのずから事多くして、またかの英文読本を手にするの暇いとまあるべくも思われず。

山木が椅子いすに倚よりて、ぎよろぎよろあたりをながめおる時、遠雷の鳴るがごとき足音次第に近づきて、やがて小山のごとき人はゆるやかに入りて主位につきぬ。山木は中將と見るよりあわてて起たてる拍子に、わがかけて居し椅子をば後ろうしろざまにどうと蹴け倒しつ。「あつ、これは疎そそを」と叫びつつ、あわてて引き起こし、しかる後二つ三つ四つ続けざまに主人に向かいて叮てい重ちゆうに辞儀

をなしぬ。今の疎忽そこつのわびも交れるなるべし。

「さあ、どうかおかけください。あなたが山木君さん——お名は承知しちよつたですが」

「はッ。これは初めまして……手前は山木 兵造ひょうぞうと申す不調法者で（句ごとに辞儀しつ、辞儀するごとに椅子はききときしりぬ、仰せのごとくと笑えるように）……どうか今後ともごひいきを……」

避け得られぬ閑話の両三句、朝鮮のうわさの三両句——しかる後中将は言ことばをあらためて、山木に來意を問いつ。

山木は口を開かんとしてまず片唾かたずをのみ、片唾をのみてまた片唾をのみ、三たび口を開かんとしてまた片唾をのみぬ。彼はつね

に誇るその流滑自在なる舌の今日に限りてひたと洩るを怪しめるなり。

## 八の二

山木はわずかに口を開き、

「実は今日は川島家の御名代ごみょうだいでまかりいでしたので」

思いがけずといわんがごとく、主人の中将はその体格がらに似合わぬ細き目を山木が面おもてに注ぎつ。

「はあ？」

「実は川島の御隠居がおいでになるところでございませうが——ま

わたくし  
あ私<sup>わたくし</sup>がまかりいでました次第で」

「なるほど」

山木はしきりににじみ出づる額の汗押しぬぐいて「実は加藤様からお話を願いたいと存じましたんでございますが、少し都合もございまして——私<sup>わたくし</sup>がまかりいでました次第で」

「なるほど。で御要は？」

「その要と申しますのは、——申し兼ねますが、その実は川島<sup>あちら</sup>家の奥様浪子様——」

主人中将の目はまばたきもせずしばし話者<sup>あなた</sup>の面<sup>おもて</sup>を打ちまもりぬ。

「はあ？」

「その、浪子<sup>わかおくさま</sup>様でございますが、どうもかような事は実もつて

申し上げにくいお話でございますが、御承知どおりあの御病気に  
つきましては、手前ども——川島でも、よほど心配をいたしまし  
て、近ごろでは少しはお快い方かたではございますが——まあおめで  
とうございますが——」

「なるほど」

「手前どもから、かような事は誠に申し上げられぬのでございま  
すが、はなはだ勝手がましい申し条ぶんでございますが、実は御病氣  
がらではございますし——御承知どおり川島の方でも家族と申し  
ましても別にございませんし、男子と申してはまず当主の武男—  
—様さんだけでございますんで、実は御隠居もよほど心配もいたして  
おりますて、どうも実もって申しにくい——いかにも身勝手な話

でございませうが、御病氣が御病氣で、その、万一伝染——まあそんな事もめつたにございませうまいが——しかしどちかと申しますとやはりその、その恐れもないではございませうので、その、万一武男——川島の主人に異変でもございませうと、まあ川島家も断絶と申すわけで、その断絶いたしてもよろしいようなものでございませうが、何分にもその、実もつてどうもその、誠に濟みませうがその、その所をその、御病氣が御病氣——」

言いよどみ言いそそくれて一句一句に額より汗を流せる山木が顔うちまもりて黙念と聞きいたる主人中将は、この時右手をあげ、「よろしい。わかりました。つまり浪が病氣が險けん呑のんじやから、引き取ってくれと、おっしゃるのじやな。よろしい。わかりまし

た」

うなずきて、手もと近く燃えさがれる葉巻をテーブルの上なる灰皿にさし置きつつ、腕を組みぬ。

山木は踏み込めるぬかるみより手をとりにて引き出されしように、ほつと息つきて、額上の汗をぬぐいつ。

「さようでございます。実もつて申し上げにくい事でございますが、その、どうかその所をあしからず——」

「で、武男君はもう帰られたですな？」

「いや、まだ帰りませんでございますが、もちろんこれは同人ほんにん

承知の上の事でございます、どうかあしからずその——」

「よろしい」

中将はうなずきつ。腕を組み、しばし目を閉じぬ。思いのほかにたやすくはこびけるよ、とひそかに笑坪えつぽに入りて目をあげたる山木は、目を閉じ口を結びてさながら睡ねぶれるごとき中将の相貌かおを仰ぎて、さすがに一種の畏れおそを覚えつ。

「山木君さん」

中将は目をみひらきて、山木の顔をしげしげと打ちながめたり。

「はッ」

「山木君さん、あなたは子を持つておいでかな」

その問いの見当を定めかねたる山木はしきりに頭かしらを下げつつ

「はッ。愚息せがれが一人ひとりに——娘が一人でございまして、何分お引き

立てを——」

「山木君、子というやつはかわいい者じゃ」

「はッ？」

「いや、よろしい。承知しました。川島の御隠居にそういつてください、浪は今日引き取るから、御安心なさい。——お使者御苦労じやった」

使命を全うせしをよろこぶか、さすがに気の毒とわぶるにか、五つ六つ七八つ続けざまに小腰を屈めて、どぎまぎ立ち上がる山木を、主人中将は玄関まで送り出して、帰り入る書斎の戸をばはたと閉したり。

## 九の一

逗子の別荘にては、武男が出発後は、病める身の心細さやるせなく思うほどいよいよ長き日ひまたひ一日のさすがに暮らせば暮らされて、はや一月あまりたちたれば、麦刈り済みて山百合咲くころとなりぬ。過ぐる日の喀血かっけつに、一たびは氣落ちしが、幸いにして医師の言えるがごとくそのあとに著しき衰弱もなく、先日函館はこだてよりの良人の書信おつとてがみにも帰来かえりの近かるべきを知らせ来つれば、よし良人を驚かすほどにはいたらぬとも、喀血の前ほどにはなりおらではと、自ら氣を励まし浪子は薬用に運動に細かに医師いしやの戒めを守りて撰生しつつ、指を折りて良人の帰期を待ちぬ。さるにてもこの四五日、東京だよりはたと絶え、番町の宅よりも、実家さとよりも、

飯田町の伯母よりすらも、はがき一枚来ぬことの何となく気にかかり、今しも日ながの手すさびに山百合を生くとて下葉を剪みおれる浪子は、水さし持ちて入り来たりし姥のいくに

「ねエ、ばあや、ちよつとも東京のたよりがないのね。どうしたのだろう？」

「さようでございますねエ。おかわりもないんでございましょう。もうそのうちにはまいりましょうよ。こう申しておりますうちにどなたぞいらっしやるかもわかりませんよ。——ほんとに何てきれいな花でございましょう、ねエ、奥様。これがしおれないうちに旦那様がお帰り遊ばすとようございますのに、ねエ奥様」

浪子は手に持ちし山百合の花うちまもりつつ「きれい。でも、

山に置いといた方がいいのね、剪きるのはかあいそうだわ！」

二人ふたりが問答うちの間に、一輛りようの車は別荘の門に近づきぬ。車は加藤子爵夫人を載せたり。川島未亡人の要求をはねつけしその翌日、子爵夫人は気にかかるままに、要を託して車を片岡家に走らせ、ここに初めて川島家の使者が早くも直接談判に来たりて、すでに中将の承諾を得て去りたる由を聞きつ。武男を待つめいの企ても今はむなしくなりて、かつ驚きかつ嘆きしが、せめては姪めいの迎え（手放し置きて、それと聞かさば不慮の事の起こりもやせん、とにかく膝下しつかに呼び取つて、と中将は慮おもんばかばかるなり）にと、すぐその足あしで逗子には来たりしなり。

「まあ。よく……ちようど今うわさをしてましたの」

「本当によくまあ……いかがでございます、奥様、ばあやが言は  
当たりましてございましょう」

「浪さん、あんばいはどうです？　もうあれから何も変わった事  
もないのかい？」

と伯母の目はちよつと浪子の面をかすめて、わきへそれぬ。

「は、快方いほうですの。——それよりも伯母様はどうなすツたの。  
たいへんに顔色おいろが悪いわ」

「わたしかい、何ね、少し頭痛がするものだから。——時候のせ  
いだろうよ。——武男さんから便たよりがありましたか、浪さん？」

「一昨日おととい、ね、函館から。もう近々ちかぢかに帰りますツて——いいえ、  
何日なんちという事は定まららないのですよ。お土産みやがあるなソぞ書いて

ありましたわ」

「そう？ おそい——ねエ——もう——もう何時？ 二時だ、ね！」

「伯母様おばさん、何をそんなにそわそわしておいでなさるの？ ごゆつくりなさいな。お千鶴ちずさんは？」

「あ、よろしくツて、ね」言いつついくが持もて来し茶を受け取り  
しまま、飲みもやらず沈吟うちあんじつ。

「どうぞごゆるりと遊ばせ。——奥様、ちよいとお肴さかなを見てまいりますから」

「あ、そうしておくれな」

伯母は打ち驚きたるように浪子の顔をちよつと見て、また目を

そらしつつ

「およしな。今日はゆつくりされないうよ。浪さん——迎えに来たよ」

「エ？ 迎え？」

「あ、おとうさまが、病気の事でおいしや医師と少し相談もあるからちよいと来るようにツてね、——番町の方でも——承知だから」

「相談？ 何でしょう」

「——病気の件ことですよ、それからまた——おとうさんも久しく会わんからツてね」

「そうですの？」

浪子は怪訝けげんな顔。いくも不審議ふしぎに思える様子。

「でも今夜はお泊まり遊ばすんでございませう？」

「いいえね、あちでも——医師も待つてたし、暮れないうちがいから、すぐ今度の汽車で、ね」

「へエー！」

姥は驚きたるなり。浪子も腑に落ちぬ事はあれど、言うは伯母なり、呼ぶは父なり、姑は承知の上ともいえば、ともかくもいわるるままに用意をば整えつ。

「伯母様何を考え込んでいらつしやるの？——看護婦は行ななくもいいでしょうね、すぐ帰るのでしょうから」

伯母は起ちて浪子の帯を直し襟をそろえつつ「連れておいでなさいね、不自由ですよ」

\*

四時ごろには用意成りて、三挺ちようの車門に待ちぬ。浪子は風通ふうつう  
 おめしおめしの単衣ひとえに、御納戸色おなんどいろ縹しゆちんの丸帯して、髪は揚卷あげまきに山くちな  
 梔しの花一輪、革色かわいろの洋傘かさ右手みぎてにつき、漏れ出いづるせきを白綾しろあや  
 のハンカチにおさえながら、

「ばあや、ちよつと行つて来るよ。あああ、久しぶりに帰京かえるの  
 ね。——それから、あの——お単衣ひとえね、もすこしだけでも——あ、  
 いいよ、帰つてからにしましょう」

忍びかねてほろほろ落つる涙を伯母は洋傘かさに押し隠しつ。

## 九の二

運命の坑あな黙々として人を待つ。人は知らず識しらずその運命に歩む。すなわち知らずというとも、近づくに従うて一種冷やややかなる気けはいを感じるは、たれもしかる事なり。

伯母の迎え、父に会うの喜びに、深く子細を問わずして帰京の途みちに上りし浪子は、車に上るよりしきりに胸打ち騒ぎつ。思えば思うほど腑ふに落ちぬこと多く、ただ頭痛とのみ言い紛らしし伯母がようすのただならぬも深く蔵かくせる事のありげに思われて、問わんも汽車の内人うちの手前、それもなり難く、新橋に着くころはただこの暗き疑心のみ胸に立ち迷いて、久しぶりなる帰京の喜びもほとんど忘れぬ。

皆人のおりしあとより、浪子は看護婦にたすけられ伯母に従いてそぞろにプラットフォームを歩みつつ、改札口を過ぎける時、かなたに立ちて話しおれる陸軍士官の一人、ふつとこなたを顧みてあたかも浪子と目を見合わしつ。千々岩！ 彼は浪子の頭より爪先まで一瞥に測りて、ことさらに目礼しつつ——わらいぬ。その一瞥、その笑いの怪しく胸にひびきて、頭より水そそがれし心地せし浪子は、迎への馬車に打ち乗りしあとまで、病のゆえならでさらに悪寒を覚えしなり。

伯母はもの言わず。浪子も黙しぬ。馬車の窓に輝きし夕日は落ちて、氷川町の邸に着けば、黄昏ほのかに栗の花の香を浮かべつ。門の内外には荷車釣り台など見えて、脇玄関にランプの火

光かりさし、人の声す。物など運び入れしさまなり。浪子は何事のあ  
るぞと思いつつ、伯母と看護婦にたすけられて馬車を下れば、玄  
関には婢おんなにランプとらして片岡子爵夫人たたずみたり。

「おお、これは早く。——御苦労さまでございました」と夫人の  
目は浪子の面おもてより加藤子爵夫人に走りつ。

「おかあさま、お変わりも……おとうさまは？」

「は、書齋に」

おりから「姉ねえさまが来たよ姉さまが」と子供の声にぎやかに二  
人たりの幼弟妹走り出いで来たりて、その母の「静かになさい」とたし  
なむるも顧みず、左右より浪子にすぎりつ。駒子もつづいて出いで  
来たりぬ。

「おお道みちちゃん、毅き一いさん。どうだえ？——ああ駒ちゃん」

道子はすがれる姉あねの袂たもとを引き動かしつつ「あたしうれしいわ、姉さまはもうこれからいつまでも此家うちにいるのね。お道具もすっかり来てよ」

はツと声もなし得ず、子爵夫人も、伯母も、婢おんなも、駒子も一齊に浪子の面おもてをうちまもりつ。

「エ？」

おどろきし浪子の目は継母の顔より伯母の顔をかすめて、たちまち玄関わきの室も狭しと積まれたるさまさまの道具に注ぎぬ。まさしく良人宅うちに置きたるわが箆たんす！ 長持ち！ 鏡台！

浪子はわなわなと震いつ。倒れんとして伯母の手をひしととら

えぬ。

皆泣きつ。

重やかなる足音して、父中将の姿見え来たりぬ。

「お、おとうさま!!」

「おお、浪か。待って——いた。よく、帰ってくれた」

中将はその大なる胸に、わなわなと震う浪子をばかき抱きつ。

半時の後、家の内しんとなりぬ。中将の書齋には、父子ただ二

人、再び帰らじと此家を出でし日別れの訓戒を聞きし時そのま

まに、浪子はひざまずきて父の膝にむせび、中将は咳き入る女の

背をおもむろになでおろしつ。

## 十

「号外！ 号外！ 朝鮮事件の号外！」と鈴りんの音のけたたましゅう呼びあるく新聞売り子のあとより、一挺ちようの車がらがらと番町なる川島家の門に入りたり。武男は今しも帰り来たれるなり。

武男が帰らば立腹もすべけれど、勝ちひつきは畢ひつき 竟よう先の太刀たち、思ひい切つて武男が母は山木が吉報をもたらし帰りしその日、善は急よめげと媳たんすが箆たんす諸道具一切を片岡家に送り戻し、ちと殺生ではあつたれど、どうせそのままには置かれぬ腫物はれもの、切つてしまつて安心とこの二三日近ごろになき好機こうきげん嫌けんのそれに引きかえて、若夫がた婦方めしつかいなる僕婢かたは氣の毒とも笑止ともいわん方かたなく、今にもあれ旦だ

那んながお帰りなさらば、いかに孝行かたの方とて、なかなか一通りでは済むまじとはらはら思っていたりしその武男は今帰り来たれるなり。加藤子爵夫人が急を報ぜしその書は途中に往ゆき違ちがいて、もとより母はそれと言いい送らねば、知る由もなき武男は横須賀よこすかに着きて暇いとまを得るやいな急いぎ帰かえり来こたれるなり。

今奥より出いで来たりし仲働ななきは、茶を入れおりし小間使こまいを手招まき、

「ね工松ちゃん。旦那さまはちつともご存ぞんじないようじゃないか。奥様おくさまにお土産みやげなんぞ持もつていららッしたよ」

「ほんとにしどいね。どこの世界せかいに、旦那の留守くすに奥様おくさまを離縁りえんしちまおつかう母おつかさんがあるものかね。旦那様の身みにななつちやア、腹はらも立た

つはずだわ。鬼婆ばばめ」

「あれくらいいやな婆ばばつちやありやしない。けちけちの、わからずやの、人をしかり飛ばすがおやくめだからね、なんにもご存じなしのくせにさ。そのはずだよ、ねエ、昔は薩摩さつまでお芋いもを掘つてたんだもの。わたしやもうこんな家うちにいるのが、しみじみいやになツちやつた」

「でも旦那様も旦那様じゃないか。御自分の奥様が離縁されてしまうのもちよつとも知らんてえのは、あんまり七月のお槍やりじゃないかね」

「だツて、そらア無理やないわ。遠方にいらつしたんだもの。だれだツて、下女おんなじゃあるまいし、肝心な子息むすこに相談もせずに、さ

つきと媳よめを追い出してしまおうと思わないわね。それに旦那様もお年が若いからねエ。ほんとに旦那様もおかあいそう——奥様はなおおかあいそうだわ。今ごろはどうしていらツしやるだろうねエ。ああいやだ——ほウら、婆ばばあが怒鳴りだしたよ。松ちゃんせツせとしないと、また八つ当たりでおいでるよ」

奥の一間には母子の問答次第に熱しつ。

「だツて、あの時あれほど申し上げて置いたです。それに手紙一本くくださらず、無断で——実にひどいです。実際ひどいです。今日もちよいと逗子に寄つて来ると、浪はおらんでしよう、いくに尋ねると何か要があつて東京に帰つたというです。変と思つたですが、まさか母おつかさんがそんな事を——実にひどい——」

「それはわたしがわるかった。わるかったからこの通り親がわびをしておるじやなツかい。わたしじやツて何も浪が悪かにくというじやなし、卿おまえがかあいいばツかいで——」

おつか  
「母さんはからだばツかり大事にして、名譽も体面も情もちよつとも思つてくださらんですな。あんまりです」

おまえ  
「武男、卿おまえはの、男かい。女じやあるまいの。親にわびごこと言いわせても、やっぱい浪が恋しかかい。恋しかかい。恋しかか」

「だって、あんまりです、實際あんまりです」

「あんまいじやツて、もう後あとまついの祭りやなツか。あつちも承知して、きれいに引き取ったあとの事じや。この上どうすツかい。女々めめしか事をしなはツと、親の恥ばツかいおまえか、卿の男が立つまいが」

黙然もくねんと聞く武男は断きれよとばかり下くちびるをかみつ。たちまち勃然ぼつねんと立ち上がって、病妻にもたらし帰りし貯林檎かこいりんごの籠かごをみじんに踏み砕き、

「母おつかさん、あなたは、浪を殺し、またそのうえにこの武男をお殺しなすツた。もうお目にかかりません」

\*

武男は直ちに横須賀なる軍艦に引き返しぬ。

韓山かんざんの風雲はいよいよ急に、七月の中旬げつ廟堂びやうどうの議はいよ

いよ清国しんこくと開戦に一決して、同月十八日には樺山かばやま中将新たに

海軍軍令部長に補せられ、武男が乗り組める連合艦隊旗艦松島号

は他の諸艦を率いて佐世保に集中すべき命を被こうむりつ。捨てばちの

身は砲丸の<sup>まと</sup>的にもなれよと、武男はまっしぐらに艦<sup>ふね</sup>とともに西に向かいぬ。

\*

片岡陸軍中將は浪子の歸りしその翌日より、自らさしずして、邸中の日あたりよく静かなるあたりをえらびて、ことに浪子のために八畳一間六畳二間四畳一間の離家<sup>はなれ</sup>を建て、豆子より姥<sup>うば</sup>のいくを呼び寄せて、浪子とともにここに棲<sup>す</sup>ました。九月にはいよいよ命ありて現役に復し、一夕<sup>せき</sup>夫人<sup>しげこ</sup>繁子を書斎に呼びて懇々浪子の事を託したる後、同十三日大<sup>だい</sup>轟<sup>とう</sup>に扈<sup>こし</sup>従<sup>しょう</sup>して広島大本營におもむき、翌月さらに大<sup>おお</sup>山<sup>やま</sup>大<sup>たい</sup>將<sup>しょう</sup>山路中將と前後して遼<sup>りょう</sup>東<sup>とう</sup>に向かいぬ。

われらが次を逐おうてその運命をたどり来たれる敵も、味方も、かの消魂も、この怨えん恨こんも、しばし征せい清しん戦争の大渦に巻き込まれつ。



## 下編

## 一の一

明治二十七年九月十六日午後五時、わが連合艦隊は戦闘準備を整えて大同江口だいたいこうこうを発し、西北に向かいて進みぬ。あたかも運送船を護して鴨緑江口おうりよつこうこう付近に見えしという敵の艦隊を尋ねいだして、雌雄を一戦に決せんとするなり。

吉野よしのを旗艦として、高千穂たかちほ、浪速なにわ、秋津洲あきつしまの第一遊撃隊、先せ

鋒んぼうとして前にあり。松島を旗艦として千代田ちよだ、巖いづくしま島、橋はしだ  
 立て、比叡ひえい、扶桑ふそうの本隊これに続つぎ、砲艦あかぎ赤城及び軍見物いくさと称す  
 る軍令部長を載せし西京丸さいきやうまるまたその後ろにしたがいつ。十二  
 隻の鰲もつどう一縦列をなして、午後五時大同江口を離れ、伸びつ縮  
 みつ竜のごとく黄海の潮うしおを巻いて進みぬ。やがて日は海に入りて、  
 陰曆八月十七日の月東にさし上り、船は金波銀波をさざめかして  
 月げつ色しよくのうちをはしる。

旗艦松島の士官次室ガソルムにては、晩餐ばんさんとく済みて、副直その他要  
 務を帯びたるは久しき前に出いで去りたれど、なお五六人の残れる  
 ありて、談まさに興に入れるなるべし。舷窓げんそうをば火光あかりを漏らさ  
 じと閉ざしたれば、温気内うちにこもりて、さらぬだに血氣盛りの顔

はいよいよ紅くれないに照れり。テーブルの上には珈琲碗かひわん四つ五つ、菓子

皿はおおむねたいらげられて、ただカステラの一片がいづれの

少將軍に屠ほふられんかと競きようきよう々として心細げに横たわるのみ。

「陸軍はもう平壤へいじようを陥おとしたかもしれないね」と短小精悍せいかんと

も言いつべき一少尉は頬杖ほおづえつきたるまま一座を見回したり。

「しかるにこつちはどうだ。実に不公平もまたはなはだしとい

べしじゃないか」

でつぷりと肥えし小主計いちちぐうは一隅いっくより莞爾かんじと笑いぬ。「どうせ

幕が明くとすぐ済んでしまう演劇しばいじゃないか。幕合まくあひの長いのも

また一興いっけいだよ」

「なんて悠長ゆうちような事を言うから困るよ。北洋艦隊ぺいやん相手の盲捉めくらお

戯にぎももうわが輩はあきあきだ。今度もかけちがいでお目に  
 かからんけりや、わが輩は、だ、長驅ほっかい渤海湾かいに乗り込んで、太タ  
 沽レクの砲台に砲丸の一つもお見舞い申さんと、堪かん忍にん袋ぶくろがたまら  
 ん」

「それこそ袋のなかに入るも同然、帰路を絶たれたらどうです？」  
 まじめに横よこ槍やりを入れるは候補生の某なり。

「何、帰路を絶つ？ 望む所だ。しかし悲しいかな君の北洋艦隊  
 はそれほど敏びん捷しょうにあらずだ。あえてけちをつけるわけじやな  
 いが、今度も見参はちとおぼつかないね。支那人の気の長いには  
 実に閉口する」

おりから靴音の近づきて、たけ高き一少尉入り口に立ちたり。

短小少尉はふり仰ぎ「おお航海士、どうだい、なんにも見えんか」

「月ばかりだ。点検が済んだら、すべからく寝て銳気を養うべしだ」言いつつ菓子皿に残れるカステーラの一片を頬ほばり「むむ、少し……甲板かんばんに出ておると……腹が減るには驚く。——從卒ボーイ、菓子を持つて来い」

「君も随分食うね」と赤きシャツを着たる一少尉は微笑ほほえみつ。

「借問しゃもんす君はどうだ。菓子を食つて老人組ぼろうを罵倒するは、けだ

しわが輩ガンルム士官次室の英雄の特権じゃないか。——どうだい、諸君、

兵はみんな明日あすを待ちわびて、目がさえて困るといつてるぞ。これで失敗があつたら実に兵の罪にあらず、——の罪だ」

「わが輩は勇氣については毫も疑わん。望む所は沈勇、沈勇だ。無手法は困る」というはこの仲間にての年長なる甲板士官。

「無手法といえ、○番分隊士は実に驚くよ」と他の一人はことばをさしはさみぬ。「勉強も非常だが、第一いかに軍人は生命を愛しまんからつて、命の安売りはここですと看板もかけ兼ねん勢いはあまりだと思ふね」

「ああ、川島か、いつだつたか、そうそう、威海衛砲撃の時だつてあんな険呑な事をやったよ。川島を司令長官にしたら、それこそ三番分隊士じゃないが、艦隊を渤海湾に連れ込んで、太沽どころじゃない、白河をさかのぼつて李のおやじを生けどるなんぞ言い出すかもしれん」

「それに、ようすが以前とはすっかり違つたね。非常に怒るよ。いつだつたか僕が川島男爵夫人の事についてさ、少しからかいかけたら、まっ黒に怒つて、あぶなく鉄拳を頂戴する所さ。僕は鎮遠の三十サンチより実際〇番分隊士の一拳を恐るるね。ははは何か子細があると思うが、赤襯衣君、君は川島と親しくするから恐らく秘密を知つとるだろうね」

と航海士はガリバルジーといわれし赤シャツ少尉の顔を見たり。おりから従卒のうずたかく盛れる菓子皿持ち来たりて、士官次室の話はしばし腰斬となりぬ。

夜十時点検終わり、差し当たる職務なきは臥し、余はそれぞれ方面の務めに就き、高声火光を禁じたれば、上甲板も下甲板も寂としてさながら人なきようになりぬ。舵手に令する航海長の声のほかには、ただ煙突の煙のふつふつとして白く月にみなぎり、螺旋の波をかき、大いなる心臓のうつがごとく小止みなき機関の響きの艦内に満てるのみ。

月影白き前艦橋に、二個の人影あり。その一は艦橋の左端に凝立して動かず。一は靴音静かに、墨より黒き影をひきつつ、五歩にして止まり、十歩にして返る。

こは川島武男なり。この艦の〇番分隊士として、当直の航海長

とともに、副直の四時間を艦橋に立てるなり。

彼は今艦橋の右端に達して、双眼鏡をあげつ、艦の四方を望みしが、見る所なきものごとく、右手めでをおろして、左手ゆんでに欄干を握りて立ちぬ。前部砲台かたの方より士官二人、低声こゝえに相語りつつ艦橋の下を過ぎしが、また陰の暗きに消えぬ。甲板の上寂せきとして、風冷ややかに、月はいよいよ冴さえつ。艦首にうごめく番兵の影を見越して、海を望めば、ただ左舷さげんに淡き島山と、見えみ見えずみ月光のうちを行く先艦秋津洲あきつしまをのみ隈くまにして、一艦のほか月に白しろめる黄海の水あるのみ。またひとしきり煙に和して勢いよく立ち上る火花の行くえを目送みおくれば、大たい櫓しやうの上高く星を散らせる秋の夜の空は湛たえて、月に淡き銀河一道、微茫びぼうとして白く海より

海に流れ入る。

\*

月は三たびかわりぬ。武男が席を蹴けつて母に辞したりしより、月は三たび移りぬ。

この三月の間に、彼が身生はいかに多様の境きようがいを經来たりしぞ。韓山の風雲に胸をおどらし、佐世保の灣頭には「今度この節国のため、遠く離れて出いでて行く」の離歌に腸はらわたを断ち、宣戦の大詔に腕とりしほを扼り、威海衛の砲撃に初めて火の洗礼を授けられ、心をおどろかし目を驚かすべき事は続々起こり来たりて、ほとんど彼をして考うるの暇いとまなからしめたり。多謝す、これがために武男はその心のみ尽くさんとするあるものをば思わずして、わずか

にわれを持したるなりき。この国家の大事に際しては、渺たる滄びよう海うかいの一粟ぞく、自家川島武男が一身の死活浮沈、なんぞ問うに足らんや。彼はかく自ら叱しっし、かの痛をおおうてこの職分の道に従い、絶望の勇をあげて征戦の事に従えるなり。死を彼は真ちりに塵よりも軽く思えり。

されど事もなき艦橋の上の夜よ、韓海の夏暑くしてハンモツクの夢結び難よき夜は、ともすれば痛恨潮うしおのごとくみなぎり来たりて、丈夫ますらおの胸裂けんとせしこと幾たびぞ。時はうつりぬ。今はかの当時、何を恥じ、何を憤いり、何を悲しみ、何を恨むともわかち難き感情の、腸はらわたに沸たぎりし時は過ぎて、一片の痛恨深く痼こして、人知らずわが心を蝕くうのみ。母はかの後二たび書を寄せ物を寄せてつ

つがなく帰り来たるの日を待つと言ひ送りぬ。武男もさすがに老いたる母の膝しつか下さびしかるべきを思ひては、かの時の過言を謝して、その健康を祈る由書き送りぬ。されど解きても融とけ難き一塊の恨みは深く深く胸底に残りて、彼が夜々ハンモックの上に、北洋艦隊の殲滅せんめつとわが討死うちじにの夢に伴なうものは、雪白せつぱくの肩ショウ掛ルをまといえる病めるある人の面影おもかげなりき。

消息絶えて、月は三たび移りぬ。彼女なお生きてありや、なしや。生きてあらん。わが忘るる日なきがごとく、彼も思わざるの日はなからん。共に生き共に死なんと誓いしならずや。

武男はかく思ひぬ。さらに最後に相見し時を思ひぬ。五日の月松にかかりて、朧ろうろう々としたる逗子の夕べ、われを送りて門かどに立

ち出で、「早く帰つてちようだい」と呼びし人はいずこそ。思い入りてながむれば、白き肩掛シヨールをまとえる姿の、今しも月光のうちより歩み出いで来たらん心地こころちすなり。

明日あすにもあれ、首尾よく敵の艦隊に会して、この身砲弾まの的まとにもならば、すべて世は一場じやうの夢と過ぎなん、と武男は思いぬ。さらにその母を思いぬ。亡なき父を思いぬ。幾年前江田島にありける時を思いぬ。しこうして心は再び病める人の上に返りて

\*

「川島君」

肩をたたかかれて、打ち驚きたる武男は急に月に背そむきつ。驚かせしは航海長なり。

「実にいい月じゃないか。戦争いくさに行くとは思われんね」  
打ちうなずきて、武男はひそかに涙なみだをふり落としてつつ双眼鏡をあげたり。月白うして黄海、物のさえぎるなし。

## 一の二三

月落ち、夜は紫に曙あけて、九月十七日となりぬ。午前六時を過ぐるころ、艦隊はすでに海洋島とうの近くに進みて、まず砲艦赤城あかぎを島の彖登湾に遣つかわして敵の有無を探らしめしが、湾内むなしと帰り報じつ。艦隊さらに進航を続けて、大だい、小鹿島しやうろくとうを斜めに見つつ大孤山沖にかかりぬ。

午前十一時武男は要ありて行きし士官公室フートルームを出でてまさに艙口ハッチにかからんとする時、上甲板に声ありて、

「見えたツ！」

同時に靴音の忙いそわしく走はせ違ちがうを聞きつ。心臓の鼓動とともに、  
艙梯そうていに踏ふみかけたる足ははたと止まりぬ。あたかも梯下ていかを通り  
かかりし一人の水兵も、ふツと立ち止まりて武男と顔見合あわした  
り。

「川島分隊士、敵艦が見えましたか」

「おう、そうらしい」

言いすてて武男は乱れうつ胸をいたずらにおし静めつつ足早に  
甲板に上れば、人影じんえい走はせ違ちがい、呼笛ふえ鳴り、信号手は忙いそわしく信

号旗を引き上げおり、艦首には水兵多くたたずみ、艦橋の上には司令長官、艦長、副長、参謀、諸士官、いずれも口を結び目を据えて、はるかに艦外の海を望みおるなり。その視線を趁おうて望めば、北の方黄海かたの水、天と相合うところに当たりて、黒き糸筋のごとくほのかに立ち上るもの、一、二、三、四、五、六、七、八、九条また十条。

これまさしく敵の艦隊なり。

艦橋の上に立つ一将校たもと袂時計いを出し見て「一時間半は大丈夫だ。準備ができたなら、まず腹でもこしらえて置くですな」

中央に立ちたる一人ひとりはうなずき「お待ち遠様。諸君、しつかり頼みますぞ」と言い終わりに髯ひげをひねりつ。

やがて戦鬪旗ゆらゆらと大たいしやう 檣いただきの頂高く引き揚げられ、数声のラツパは、艦橋より艦内くまなく鳴り渡りぬ。配置につかんと艦内に行きかう人の影織るがごとく、檣楼に上る者、機関室に下る者、水雷室に行く者、治療室に入る者、右舷うげんに行き、左舷さげんに行き、艦尾かんびに行き、艦橋かんきやうに上り、縦横じゆうけいに動ける局部くわくぶの作用さうようたちまち成るを告げて、戦鬪の準備は時を移さず整いぬ。あたかも午時ごじに近くして、戦わんとしてまず午餐ごさんの令いは出でたり。

分隊長を助け、部下の砲員を指揮して手早く右舷速射砲そうての装そうて填んを終わおりたる武男は、ややおくれて、士官次室ガートルームに入れば、同僚皆すでに集まりて、箸はし下り皿はいら鳴りぬ。短小少尉はまじめになり、甲板士官メーフトはしきりに額の汗をぬぐいつつつむきて食らい、年とし

少<sup>た</sup>の候補生はおりおり他の顔をのぞきつつ、劣らじと皿をかえ

ぬ。たちまち箸をからりと投げて立ちたるは赤シャツ少尉なり。

「諸君、敵を前に控えて悠々<sup>ゆうゆう</sup>と午餐をくう諸君の勇氣は——立<sup>た</sup>

ちばなむねしげ

花宗茂に劣らずというべしだ。お互いにみんなそろって今日<sup>きょう</sup>

の夕飯を食うや否やは疑問だ。諸君、別れに握手でもしようじゃないか」

いうより早く隣席にありし武男が手をば無手<sup>むず</sup>と握りて二三度打

ちふりぬ。同時に一座は総立ちになりて手を握りつ、握られつ、

皿は二個三個からからとテーブルの下に転<sup>まろ</sup>び落ちたり。左頬<sup>さきよう</sup>に

あざある一少尉は少軍医の手をとり、

「わが輩が負傷したら、どうかお手柔らかにやってくれたまえ。

その賄賂わいろだよ、これは」

と四五度も打ちふりぬ。からからと笑える一座は、またたちまちまじめになりつ。一人去り、二人去りて、果てはむなしき器皿きべいの狼藉ろうぜきたるを留とどむるのみ。

零時二十分、武男は、分隊長の命を帯び、副艦長に打ち合わずべき事ありて、前艦橋に上れば、わが艦隊はすでに単縦陣を形づくり、約四千メートルを隔てて第一遊撃隊の四艦はまつ先に進み、本隊の六艦はわが松島を先登としてこれにつづき、赤城西京丸は本隊の左舷に沿うてしたかう。

仰ぎ見る 大たいしやう 檣とうの上高く戦鬪旗は碧へきくう 空はに羽たたき、煙突の煙けぶりまつ黒にまき上り、舳へさきは海を劈さいて白波高く両舷にわきぬ。将

校あるいは双眼鏡をあげ、あるいは長劍の柄つかを握りて艦橋の風に向かいつつあり。

はるかに北方の海上を望めば、さきに水天の間に一髪ひとげの浮かめるがごとく見えし煙は、一分一分に肥え来たりて、敵の艦隊さながら海中よりわき出いづるごとく、煙まず見え、ついで針はり大の檣ぼしらほの見え、煙突見え、艦体見え、檣頭の旗影また点々として見え来たりぬ。ひときわすぐれて目立ちたる定遠ていえん鎮遠ちんえん相連あいならんで中軍を固め、經遠けいえん至遠しえん廣甲こうこう濟遠さいえんは左翼、來遠らいえん靖遠せいえん超遠ちよう勇揚ゆうよう威は右翼を固む。西に当たつてさらに煙けぶりの見ゆるは、平へいえ遠えん廣こう丙へい鎮ちん東とう鎮ちん南なん及び六隻の水雷艇なり。

敵は単横陣を張り、我艦隊は単縦陣をとつて、敵の中央まなかをさし

て丁字形に進みしが、あたかも敵陣を距る一万メートルの所に至りて、わが先鋒隊せんぽうたいはとつさに針路を左に転じて、敵の右翼をさしてまっしぐらに進みつ。先鋒の左に転ずるとともに、わが艦隊は竜の尾りゆうをふるうごとくゆらゆらと左に動いて、彼我の陣形は丁字一変して八字となり、彼は横に張り、われは斜めにその右翼に向かいて、さながら一大コンパス形けいをなし、彼進み、われ進みて、相距る六千メートルにいたりぬ。この時敵陣の中央に控えたる定遠艦首の砲台に白煙むらむらと渦まき起こり、三十センチの両弾丸空中に鳴りをうってわが先鋒隊の左舷の海に落ちたり。黄海の水驚いて倒さかしまに立ちぬ。

## 一の四

黄海！ 昨夜月を浮かべて白く、今日もさりげなく雲をひたし、島影を載せ、すいおう睡すい鴉おうの夢を浮かべて、ゆうゆう悠々として画えよりも静かなりし黄海は、今しゅうらじよう修羅場となりぬ。

艦橋をおりて武男は右舷速射砲台に行けば、分隊長はまさに双眼鏡をあげて敵の方を望み、部下の砲員は兵へい曹そう以下おおむねジヤケツトを脱ぎすて、腰より上は臂ひじぎりのシャツをまといて潮風に黒める筋太の腕をあらわし、白木綿しろもめんもてしつかと腹部を巻けるもあり。黙して号令を待ち構えつ。この時わが先鋒隊は敵の右翼を乱射しつつすでに敵前を過ぎ終わらんとし、わが本隊の第一

に進める松島は全速力をもって敵に近づきつつあり。双眼鏡をとつてかなたを望めば、敵の中央を堅めし定遠鎮遠はまっ先にぬきんでて、横陣やや鈍角をなし、距離ようやく縮まりて二艦の形状かたちは遠目にも次第にあざやかになり来たりぬ。卒然として往年かの二艦を横浜の埠頭ふとうに見しことを思い出でたる武男は、倍の好奇心もて打ち見やりつ。依然当時の二艦なり。ただ、今は黒煙をはき、はくは白波をけり、砲門を開きて、咄々とつとつ来たつてわれに迫らんとするさまの、さながら悪獣なんどの来たり向こうごとく、恐るるとにはあらで一種やみ難き嫌厭けんえんを憎悪ぞうおの胸中にみなぎり出づるを覚えしなり。

たちまち海上はるかに一声の雷らいとどろき、物ありグリーンと空中

に鳴りをうって、松島の たいしやう大 檣 をかすめつつ、海に落ちて、二丈ばかり水を上げぬ。武男は後頂より せきずい脊 髓 を通じて言うべからざる冷気の走るを覚えしが、たちまち足を踏み固めぬ。他はいかにと見れば、砲尾に群がりし砲員の列一たびは揺らぎて、また動かず。艦いよいよ進んで、三個四個五個の敵弾つづけざまに乱れ飛び、一は左舷につりし端艇を打ち碎き、他はすべて松島の四辺に水柱をけ立てつ。

「分隊長、まだですか」こらえ兼ねたる武男は叫びぬ。時まさに一時を過ぎんとす。「四千メートル」の語は、あまねく右舷及び艦の首尾に伝わりて、照尺整い、けんさく牽 索 握 られつ。待ち構えたる一声のラツパ鳴りぬ。「打てツ！」の号令とともに、わが三十二

サンチ巨砲を初め、右舷側砲一斉に第一弾を敵艦にほとばしらしつ。艦は震い、舷にそうて煙おびただしく渦まき起こりぬ。

あたかもその答礼として、定遠鎮遠のいずれか放ちたる大弾丸すさまじく空にうなりて、煙突の上二寸ばかりかすめて海に落ちたり。砲員の二三は思わず頭かしらを下げぬ。

分隊長顧みて「だれだ、だれだ、お辞儀をするのは？」

武男を初め候補生も砲員もどつと笑いつ。

「さあ、打てツ！　しつかり、しつかり——打てツ！」

右舷側砲は連つるべ放うちにしぬ。三十二サンチ巨砲も艦を震わして鳴りぬ。後続の諸艦も一斉にうち出しぬ。たちまち敵のうちたる時限弾の一個は、砲台近く破裂して、今しも弾丸を砲尾に

運びし砲員の一人武男が後ろにどうと倒れつ。起き上がらんとして、また倒れ、血はさつとほとばしりてしたたかに武男がズボンにかかりぬ。砲員の過半はそなたを顧みつ。

「だれだ？ だれだ？」

「西山じゃないか、西山だ、西山だ」

「死んだか」

「打てッ！」分隊長の声鳴りて、砲員皆砲に群がりつ。

武男は手早く運搬手に死者を運ばし、ふりかえつてその位置に立たんとすれば、分隊長は武男がズボンに目をつけ

「川島君、負傷じゃないか」

「なあに、今のとばしるです」

「おおそうか。さあ、今の仇を討つてやれ」

砲は間断なく発射し、艦は全速力をもてはしる。わが本隊は敵の横陣に対して大いなる弧をえがきつつ、かつ射かつ駛せて、一時三十分過ぎにはすでに敵を半周してその右翼を回り、まさに敵の背後に出でんとす。

第一回の戦い終わりにて、第二回の戦いこれより始まらんとすなり。松島の右舷砲しばし鳴りを静めて、諸士官砲員淋漓たる汗をぬぐいぬ。

この時彼我の陣形を見れば、わが先鋒隊はいち早く敵の右翼を乱射して、超勇揚威を戦鬪力なきまでに悩ましつつ、一回転して本隊と敵の背後を撃たんとし、わが本隊のうち比叡は速力劣れる

がため本隊に続行するあたわずして、大胆にもひとり敵陣の中央を突貫し、死戦して活路を開きしが、火災のゆえに圏外に去り、西京丸また危険をのがれて圏外に去らんとし、敵前に残されし赤城は六百トンの小艦をもって独力奮闘重<sup>ちやうい</sup>困<sup>つ</sup>を衝いて、比叡のあとをおわんとす。しかして先鋒の四艦と、本隊の五艦とは、整々として列を乱さず。

敵<sup>てき</sup>の方<sup>かた</sup>を望めば、超勇焼け、揚威戦闘力を失して、敵の右翼乱れ、左翼の三艦は列を乱してわが比叡赤城を追わんとし、その援軍水雷艇は隔離して一辺にあり。しかして定遠鎮遠以下数艦は、わがその背後に回らんとするより、急に舳<sup>へんさき</sup>をめぐらして縦陣に變じつつ、けなげにもわが本隊に向かい来たる。

第二回の戦いは今や始まりぬ。わが本隊は西京丸が掲げし「赤城比叡危険」の信号を見るより、速力大なる先鋒隊の四艦を遣わして、赤城比叡を尾<sup>び</sup>する敵の三艦を追い払わせつつ、一隊五艦依然単縦陣をとつて、同じく縦陣をとれる敵艦を中心に大なる蛇<sup>じゃ</sup>の目をえがきもてかつ<sup>はし</sup>駛りかつ撃ち、二時すでに半ばならんとする時、敵艦隊を一周し終わつて敵のこなたに達しつ。このときわが先鋒隊は比叡赤城を尾<sup>び</sup>する敵の三艦を一戦にけ散らし、にぐるを追うて敵の本陣に駆り入れつつ、一括してかなたより攻撃にかかりぬ。さればわが本隊先鋒隊はあたかも敵の艦隊を中央に取りこめて、左右よりさしはさみ撃たんとすなり。

第三次の激戦今始まりぬ。わが海軍の精鋭と、敵の海軍の主力

と、共に集まりたる彼我の艦隊は、大全速力もて駛はせ違ひ入り乱れつつ相たたかう。あたかも二竜りゆうの長鯨を巻くがごとく黄海の水たぎつて一面の泡あわとなりぬ。

## 一の五

わが本隊は右、先鋒隊せんぽうたいは左、敵の艦隊をまん中に取りこめて、引つ包んで撃たんとす。戦いは今たけなわになりぬ。戦いの熱するに従つて、武男はいよいよわれを忘れつ。その昔学校にありて、ベースボールに熱中せし時、勝敗のここしばらくの間を決せんとする大事の時に際するごとに、身のたれたり場所のいづくたるを

忘れ、ほとんど物ありて空くうよりわれを引き回すように覚えしが、  
今やあたかもその時に異ならざるの感を覚えぬ。艦隊敵と離れて  
また敵に向かい行く間と、艦体一転して左舷敵に向かい右舷しば  
らく閑なる間とを除くほかは、間断なき号令に声かれ、汗は淋漓りんり  
として満面にしたたるも、さらに覚えぬ。旗艦を目ざす敵の弾丸  
ひとえに松島にむらがり、鉄板上に裂け、木ぼく板焦がれ、血は甲  
板にまみるるも、さらに覚えぬ。敵味方の砲声はあたかも心臓の  
鼓動に時を合わしつつ、やや間かんあれば耳辺の寂しきを怪しむまで、  
身は全く血戦の熱に浮かされつ。されば、部下の砲員も乱れ飛ぶ  
敵弾を物ともせず、装そうてん填し照準を定め牽索ひきなわを張り発射しまた装  
填するまで、射的場の精確さらに実戦の熱を加えて、火災は起こ

らんとするに消し、弾は命ぜざるに運び、死亡負傷はたちまち運び去り、ほとんど士官の命を待つまでもなく、手おのずから動き、足おのずから働きて、戦闘機関は間断なくなめらかに運転せるなり。

この時目をあぐれば、灰色の煙空をおおい海をおおうて十重とえは二十重たえに渦まける間より、思いがけなき敵味方の檣ほぼしらと軍艦旗はかなたこなたにほの見え、ほとんど秒ごとに轟ごうぜん然たる響きは海を震わして、弾だんは弾と空中に相うって爆発し、海は間断なく水柱をけ上げて煮えかえらんとす。

「愉快！ 定遠が焼けるぞ！」かれたる声ふり絞りて分隊長は叫びぬ。

煙の絶え間より望めば、こうりようき黄竜旗を翻せる敵の旗艦の前部は黄煙渦まき起こりて、あり蟻のごとく敵兵のうごめき騒ぐを見る。

武男を初め砲員一斉に快を叫びぬ。

「さあ、やれ。やつつけろッ！」

勢い込んで、砲は一時に打ち出しぬ。

左右より きようげき夾撃せられて、敵の艦隊はくずれ立ちたり。超勇はすでにまつ先に火を帯びて沈み、揚威はとくすでに大破して逃のがれ、致遠また没せんとし、定遠火起こり、来遠また火災に苦しむ。こらえ兼ねし敵艦隊はついに定遠鎮遠を残して、ことごとくちりぢりに逃げ出しぬ。いだわが先鋒隊はすかさずそのあとを追いぬ。本隊五艦は残れる定遠鎮遠を撃たんとす。

## 第四回の戦い始まりぬ。

時まさに三時、定遠の前部は火いよいよ燃えて、黄煙おびただしく立ち上れど、なお逃のがれず。鎮遠またよく旗艦を護して、二大鉄艦巍然ぎぜん山のごとくわれに向かいつ。わが本隊の五艦は今や全速力をもつて敵の周囲を駛はせつつ、幾回かめぐりては乱射し、めぐりては乱射す。砲弾は雨のごとく二艦に注ぎぬ。しかも軽装快馬のサラセン武士が馬をめぐらして重じゅうが鎧の十字軍士を射るがごとく、命中する弾丸多くは二艦の重鎧にはねかえされて、艦外に破裂し終わりつ。午後三時二十五分わが旗艦松島はあたかも敵の旗艦と相並びぬ。わがうち出す速射砲弾のまさしく彼が艦腹あたに中りて、はねかえりて花火のごとくむなしく艦外に破裂するを望み

たる武男は、憤りに堪え得ず、齒をくいしばりて、右の手もて劍の柄を破れよと打ちたたき、

「分隊長、無念です。あ……あれをござんなさい。畜生ッ！」

分隊長は血眼ちまなこになりて甲板を踏み鳴らし

「うてッ！ 甲板をうて、甲板を！ なあに！ うてッ！」

「うてッ！」武男も声ふり絞りぬ。

齒をくいしばりたる砲員は憤然として勢い猛く連べ放ちに打ち出しぬ。

「も一つ！」

武男が叫びし声と同時に、霹靂へきれき満艦を震動して、砲台内に噴

火山の破裂するよと思うその時おそく、雨のごとく飛び散る物に

うたれて、武男はとうと倒れぬ。

敵艦の発ち出したる三十サンチの大榴弾二個、あたかも砲台のまん中を貫いて破裂せしなり。

「残念ツ！」

叫びつつはね起きたる武男は、また尻居にとうと倒れぬ。

彼は今体の下半におびただしき苦痛を覚えつ。倒れながら見れば、あたりは一面の血、火、肉のみ。分隊長は見えず。砲台は洞のごとくなりて、その間より青きもの揺らめきたり。こは海なりき。

苦痛と、いうべからざるいたましき臭のために、武男が目は閉じぬ。人のうめく声。物の燃ゆる音。ついで「火災！ 火災！

ポンプ用意ッ！」と叫ぶ声。同時に走せ来る足音。

たちまち武男は手ありてわれをもたぐるを覚えつ。手の脚部に触るとともに、限りなき苦痛は脳頂に響いて、思わず「あ」と叫びつつのけぞり——くれないもや紅の靄閉させる目の前に渦まきて、次第にわれを失いぬ。

## 二の一

大本營所在地広島においては、十月中旬げつ、第一師団はとくすでに金州半島に向かいたれど、そのあとに第二師団の健児広島狭しと入り込み来たり、しかのみならず臨時議会開かれんとして、六

百の代議士続々東より来つれば、高帽腕車こうぼうわんしゃはいたるところ劍は佩馬蹄いけんばていの響きと入り乱れて、維新当年の京都のにぎあいを再びここ山陽に見る心地こころちせられぬ。

市の目ぬきという大手町おおもてまち通りは「参謀総長宮殿下」「伊藤内

閣総理大臣」「川上陸軍中將」なんどいかめしき宿札うちたるあたりより、二丁目三丁目と下がりては戸ごとに「徴発二応ズベキ

坪数〇〇畳、〇間」と貼札はりふだして、おおかたの家には士官下士の

姓名兵の隊号人数にんずを記せし紙札を張りたるは、仮兵舎バラックにも置きあ

まりたる兵士の流れ込みたるなり。その間には「〇〇酒保事務所」

「〇〇組人夫事務取扱所」など看板新しく人影の忙せわしく出入りするあれば、その店先にては忙いそがわしくラムネ瓶びんを大箱に詰め込み、

こなたの店はビスケットの箱山のごとく荷造りに汗を流す若者あり。この間を縫うて馬上の将官が大本營のかた方に急ぎ行きしあとより、電信局にかけつくるにか鉛筆を耳にさしはさみし新聞記者の車を飛ばして過ぐる、やがて鬱金木綿うこんもめんに包みし長刀と革囊かばんを載せて停車場ステーションの方より来る者、面黒々と日にやけてまだ夏服の破れたるまま宇品うしなより今上陸して来つと覚しき者と行き違い、新聞の写真付録にて見覚えある元老の何か思案顔に車を走らすこなたには、近きに出発すべき人夫が鼻歌歌うて往来をぶらつけば、かなたの家の縁さきに剣をとぎつつ健児が歌う北音の軍歌は、川向こののなまめかしき広島節に和して響きぬ。

「陸軍御用達」と一間あまりの大看板、その他看板二三枚、入り

口の三方にかけつらねたる家の玄関先より往来にかけて粗製毛布けつと防寒服よもの山と積みつつ、番頭らしきが若者五六人をさしずして荷造りに忙せわしき所に、客を送りてそそくさと奥より出いで来し五十あまりの爺おやし、額やや禿はげて目じりたれ左眼の下にしたたかな赤黒子あかほくろあるが、何か番頭にいつけ終わりにて、入らんとしつたたちまち門外を上手かみてに過ぎ行く車を目がけ

「田崎君……田崎君」

呼ぶ声の耳に入らざりしか、そのままに過ぎ行くを、若者して呼び戻さすれば、車は門に帰りぬ。車上の客は五十あまり、色赤黒く、頬ほおひげ少しは白きもまじり、黒くろつむぎ紬ちゆうやまの羽織かばんに新しからぬ同じ色の中山帽ちゆうやまをいただき蹴けこ込みに中形の鞆かばんを載せたり。呼び

戻されてげげんの顔は、玄関に立ちし主人を見るより驚きにかわりて、帽ぼうを脱ぎつつ

「山木さんじゃないか」

「田崎君さん、珍しいね。いったいいつ来たんです？」

「この汽車で帰京かえるつもりで」と田崎は車をおり、  
箆むしろなわ 繩なわ なんと取り散らしたる間を縫いて玄関に寄りぬ。

「帰京かえる？ どこにいつおいでなので？」

「はあ、つい先日佐世保に行つて、今帰途かえりです」

「佐世保？ 武男さん——旦那だんなのお見舞？」

「はあ、旦那の見舞に」

「これはひどい、旦那の見舞に行きながら往返いきかえりとも素通りは

実にひどい。娘も娘、御隠居も御隠居だ、はがきの一枚も来ないものだから」

「何、急ぎでしたからね」

「だって、行きがけにちよつと寄つてくださりやよかつたに。とにかくまあお上がんなさい。車は返して。いいさ、お話もあるから。一汽車おくれたツていいだろうじゃないか。——ところで武男さん——旦那の負傷けがはいかがでした？ 実はわたしもあの時お負傷けがの事を聞いたんで、ちよいとお見舞に行かなけりやならんならんと思つてたんだが、思つたばかりで、——ちようど第一師団が近ちかぢか々にでかけるといふので、滅法忙しかつたモンですから、ついその何で、お見舞状だけあげて置いたんでした。——ああ

そうでしたか、別に骨にも障さわらなかつたですね、大腿部だいたいぶ——はあそうですか。とにかく若い者は結構ですな。お互いに年寄りはこちらよつと指さきに刺とげが立つても、一週間や二週間はかかるが、旦那んざお年が若いものだから——とにかく結構おめでたい事でした。御隠居も御安心ですね」

中腰に構えし田崎は時計を出し見つ、座を立たんとするを、山木は引きとめ

「まあいいさ。幸いのついでで、少し御隠居に差し上げたいものもあるから。夜汽車になさい。夜汽車だとまだ大分時間だいぶがある。ちよつと用を済まして、どこぞへ行つて、一杯やりながら話すどしまししょう。広島ここの魚さかなは実にうまいですぜ」

口は着さかなよりもなおうまかるべし。

## 二の二

秋の夕日あまやすがわ天安川に流れて、川に臨める某なにがしてい亭の障子を金こんじ色きに染めぬ。二階は貴衆両院議員の有志が懇親会とやら抜けるほどの騒さわぎに引きかえて、下の小座敷は婢おんなも寄せずただ二人話ふたりもて杯さかずきをあぐるは山木とかの田崎と呼ばれたる男なり。

この田崎は、武男が父の代より執事の役を務めて、今もほど近きわが家やより日々川島家に通いては、何くれと忠まめやか実に世話をなすつ。如才なく切つて回す力量なきかわりには、主家の収入をぬ

すみてわがふところを肥やす気づかないなきがこの男の取り柄と、武男が父は常に言いぬ。されば川島未亡人いんきよにも武男にも浅からぬ信任を受けて、今度も未亡人いんきよの命によりてはるばる佐世保に主人の負傷をば見舞いしなり。

山木は持ったる杯を下に置き、額のあたりをなでながら「実は何ですて、わたしも帰京かえりはしても一日泊まりですぐとまた広島こゝに引き返すというようなわけで、そんな事も耳に入らなかつたです。それでは何ですね、あれから浪子さんもよほどわるかつたのですね。なるほどどうもちつとひどかつたね。しかしともかくも川島家のためだから仕方がないといったようなもので。はあそうですか、近ごろはまた少しはいい方で、なるほど、逗子に保養に

行つていなさるかね。しかしあの病氣ばかりはいくらよく見えてもどうせ死病だて。ところで武男——いや若旦那はまだ怒つていなさるかね」

腕わんの蓋ふたをとれば松茸まつだけの香の立ち上りて鯛たいの脂あぶらの珠たまと浮かめるをうまげに吸いつつ、田崎ひげは髯押しぬぐいて

「さあ、そこですがな。それはもうもとをいえば何もお家のためでしかたもないといったものの、なあ山木君さん、旦那の留守に何も相談なしにやつておしまいなさるといふは、御隠居も少し御氣随が過ぎたというものでな。実はわたしも旦那のお帰りまでお待ちなさるようにと申し上げて見たのじゃが、あのお氣質で、いったんこうと言ひ出しなすつた事は否いや応おうなしにやり遂げるお方だか

ら、とうとうあの通りになつたンで。これは旦那がおもしろく思  
 いなさらぬももつともじやとわたしは思うくらい。それに困つた  
 人はあの千々岩ちぢわさん——たしかもう清国あつちに渡つたように聞いたで  
 すか」

山木はじろりとあなたの顔を見つつ「千々岩！ はああの男は  
 このあいだ出征でかけたが、なまじつか顔を知られた報いで、ここに滞い  
 在中るうちもたびたび無心にやつて来て困つたよ。顔つらの皮の厚い男でね。  
 戦争いくさで死ぬかもしれんから香こうでん奠せんと思つて餞せんべつ別べつをくれる、その  
 代わり生命いのちがあつたらきつと金鷄きんし勲章をとつて来るなんかいつて、  
 百両ばかり踏んだくつて行つたて。ははははは、ところで武男さん君  
 は負傷けががよくなくなつたら、ひとまず帰京かえりなさるかね」

「さあ、御自身はよくなり次第すぐまた戦地に出かけるつもりでいなさるようですがね」

「相変わらず元気な事を言いなさる。が、田崎君<sup>さん</sup>、一度は帰京<sup>かえ</sup>つて御隠居と仲直りをなさらんといけないじゃあるまいか。どれほど気に入っていないなすったか知らんが、浪子さんといえどもはや縁の切れたもので、その上健康<sup>たっしや</sup>な方<sup>かた</sup>でもあることか、死病にとりつかれている人を、まさかあらためて呼び取りなさるといふ事でもきまいし、まあ過ぎた事は仕方がないとして、早く親子仲直りをしなさらんじやなるまい、とわたしは思うが。なあ、田崎君<sup>さん</sup>」

田崎は打ち案じ顔に「旦那はあの通り正直<sup>まっすぐ</sup>なお方だから、よし御隠居の方がわるいにもしろ、自分の仕打ちもよくなかったと

そう思っていなさる様子でね。それに今度わたしがお見舞に行つたんでまあ御隠居のお心も通つたというものだから、仲直りも何もありやしないが、しかし——」

「戦争中の縁談もおかしいが、とにかく早く奥様を迎よびなさるのだね。どうです、旦那は御隠居と仲直りはしても、やっぱり浪子さんは忘れなさるまいか。若い者は最初のうちはよく強情を張るが、しかし新しい人が来て見るとやはりかわゆるくなるものでね」

「いやそのことは御隠居も考えておいでなさるようだが、しかし——」

「むずかしかりょうというのかね」

「さあ、旦那があんな一途いちずな方かただから、そこはどうとも」

「しかしお家のため、旦那のためだから、なあ田崎君<sup>さん</sup>」

話はしばし途切れつ。二階には演説や終わりつらん、拍手の音盛んに聞こゆ。障子の夕日やや薄れて、ラツパの響耳<sup>おと</sup>に冷ややかなり。

山木は杯を清めて、あらためて田崎にさしつつ

「時に田崎君<sup>さん</sup>、娘がお世話になっているが、困ったやつで、どうです、御隠居のお気には入りますまいな」

浪子が去られしより、一月あまりたちて、山木は親しく川島未<sup>い</sup>亡人<sup>んきよ</sup>の薫陶を受けさすべく行儀見習いの名をもって、娘お豊<sup>とよ</sup>を川島家に入れ置きしなりき。

田崎はほほえみぬ。何か思い出<sup>い</sup>でたるなるべし。

## 二の三

田崎はほえみぬ。川島未亡人は眉まゆをひそめしなり。

武男が憤然席をけ立てて去りしかの日、母はこの子の後ろ影すがたをにらみつつ叫びぬ。

「不孝者めが！ どうでも勝手にすツがええ」

母は武男が常によく孝にして、わが意を迎うるに踟躕ちちちゆせざるを知りぬ。知れるがゆえに、その浪子に対するの愛もとより浅きにあらざるを知りつつも、その両立するあたわざる場合には、一も二もなくかの愛をすててこの孝を取るならんと思えり。思えるが

ゆえに、その仕打ちのわれながらむしろ果斷に過ぐるを思わざるにあらざりしも、なお家のため武男のためと謂いいつつ、獨斷をもて浪子を離別せるなり。武男が憤りの意外にはげしかりしを見るに及んで、母は初めてわが違算を悟り、同時にいわゆる母なるものの決して絶対的權力をその子の上に有するものにあらざるを知りぬ。さきにはその子の愛の浪子に注ぐを一種不快の目をもて見たりしが、今は母の愛母の威光母の恩をもつてしてなお死ひんに瀕したる一浪子の愛に勝つあたわざるを見るに及び、わが威權全くおちたるように、その子をば全く浪子に奪い去られしように感じて、かつは武男を怒り、かつは実家さとに帰り去れる後までもなお浪子ののしれるなり。

なお一つその怒りを激せしものありき。そはおぼろげながら方寸のいずれにかおのが仕打ちの非なるを、知るとにはあらざれど、いささかその疑いのほのかにたなびけるなり。武男が憤りの底にはちとの道理なかりしか。わが仕打ちにはちとのわが領分を越えてその子を侵せし所はなかりしか。眠られぬ夜半よわにひとり奥の間の天井にうつる行燈あんどうの影ながめつつ考うるとはなく思えば、いずくにか汝なんじの誤りなり汝の罪なりとささやく声あるように思われ、さらにその胸の乱るるを覚えぬ。世にも強きは自ら是なりと信ずる心なり。腹立たしきは、あるいは人よりあるいはわが衷うちなるあるものよりわが非を示されて、われとわが良心の前に悔悟の膝ひざを折る時なり。灸きゅうしよ所を刺せば、猛獸は叫ぶ。わが非を知れ

ば、人は怒る。武男が母は、これがために抑え難き怒りはなおさ  
 らに悶もんを加えて、いよいよ武男の怒るべく、浪子の悪にくむべきを覚  
 えしなり。武男は席をけつて去りぬ。一日また一日、彼は来たり  
 て罪を謝するなく、わびの書だも送り来たらず。母は胸中の悶々  
 を漏らすべきただ一の道として、その怒りをほしいままにして、  
 わずかに自ら慰めつ。武男を怒り、浪子を怒り、かの時を思い出  
 でて怒り、将来を想おもうて怒り、悲しきに怒り、さびしきに怒り、  
 詮せん方かたなきにまた怒り、怒り怒りて怒りの疲労つかれにようやく夜よも睡ねぶ  
 るを得にき。

川島家にては平常つねにも恐ろしき隠居が疝かん癩しやくの近ごろはまた  
 ひた燃えに燃えて、慣れしおんなばらも幾たびか手荷物をしま

かける間に、朝鮮事起こりて豊島ほうとうがざん牙山の号外は飛びぬ。戦争に行くに告別の手紙の一通もやらぬ不埒ふらちなやつと母は幾たびか怒りしが、世間の様子を聞けば、田舎いななかよりその子の遠征を見送らんと出で来る老婆、物を贈り書を送りてその子を励ます母もありというに、子は親に怒り親は子を憤りて一通の書だに取りかわさず、彼は戦地にわれは帝都に、おのおの心に不快の塊かたまりをいだいて、もしこのままに永別となるならば、と思うとはなく、ほのかに感じたる武男が母は、ついにののしりののしり我がを折りて引きつづき二通の書を戦地にあるその子にやりぬ。

折りかえして戦地より武男が返書は来たれり。返書来たりてより一月あまりにして、一通の電報は佐世保の海軍病院より武男が

負傷を報じ来しぬ。さすがに母が電報をとりし手はわなわなと打ち震いつ。ほどなくその負傷は命めいに関するほどにもあらざる由を聞きたれど、なお田崎を遠く佐世保にやりてそのようすを見させしなりき。

## 二の四

田崎が佐世保より歸りて、子細に武男のようすを報ぜるより、母はやや安堵あんどの胸をなでけるが、なおこの上は全快を待ちて一応顔をも見、また戦争済みたらば武男がために早く後こうさい妻を迎うるの得策なるを思いぬ。かくして一には浪子を武男の念頭より絶ち、

一には川島家の祀まつりを存し、一にはまた心の奥の奥において、さきに武男に對せる所行しわざのやや暴に過ぎたりしその罪？ 亡ほろぼしをなさんと思えるなり。

武男に後妻を早く迎へんとは、浪子を離別に決せしその日より早くすでに母の胸中にわき出いでし問題なりき。それがために数多からぬ知己親類の嫁しうべき嬢子むすめを心のうちにあれこれと繰り見しが、思わしきものもなくて、思い迷えるおりから、山木は突然娘お豊を行儀見習いと称して川島家に入れ込みぬ。武男が母とて白痴にもあらざれば、山木が底意は必ずしも知らざるにあらざらず。お豊が必ずしも知徳兼備の賢婦人ならざるをも知らざるにはあらざりき。されどおぼるる者は藁わらをもつかむ。武男が妻定めに窮し

たる母は、山木が望みを幸い、試みにお豊を預かれるなり。

試験の結果は、田崎がほほえめるがごとし。試験者も受験者も共に満足せずして、いわば婢おんなばらがうさはらしの種となるに終われるなり。

初めは平和、次ぎに小口径の猟銃を用いて軽々けいけいに散弾を撒まき、ついに攻城砲の恐ろしきを打ち出いだす。こは川島未亡人が何人なんびとに對しても用うる所の法なり。浪子もかつてその経験をなめぬ。しかしてその神経の敏に感の鋭かりしほどその苦痛を感ずる事も早かりき。お豊も今その経験をしいられぬ。しかしてその無為にして化する底ていの性質は、散弾の飛ぶもほとんどいずこの家に煎いる豆ぞと思おもい貌がに過ぐるより、かの攻城砲は例よりもすみやかに持ち

出<sup>いだ</sup>されざるを得<sup>え</sup>ざりしなり。

その心悠々<sup>ゆうゆう</sup>として常に春がすみのたなびけるごとく、胸中に一点の物無<sup>の</sup>うして人我<sup>にんが</sup>の別定かならぬのみか、往々にして個人の輪郭消えて直ちに動植物と同化せんとし、春の夕べに庭などに立ちたならば、霊<sup>たま</sup>も体<sup>たい</sup>もそのまま霞<sup>かすみ</sup>のうちに融<sup>と</sup>け去りてすくうも手にはたまらざるべきお豊も恋に自己<sup>おのれ</sup>を自覚し初<sup>そ</sup>めてより、にわかには苦勞というものも解<sup>そ</sup>し初<sup>そ</sup>めぬ。眠き目こすりて起き出<sup>い</sup>づるより、あれこれと追<sup>お</sup>い使<sup>つか</sup>われ、その果ては小言<sup>どなり</sup>大喝<sup>あてこ</sup>。もつとも陰口<sup>あてこ</sup>中<sup>あてこ</sup>傷<sup>すり</sup>は概<sup>お</sup>して解<sup>お</sup>かれぬままに鶉<sup>うの</sup>呑<sup>の</sup>みとなれど、連<sup>つる</sup>べ放<sup>はな</sup>つ攻城砲<sup>あてこ</sup>のみはいかに超然<sup>い</sup>たるお豊も当たりかねて、恋しき人<sup>うち</sup>の家<sup>うち</sup>ならずばとくにも逃<sup>い</sup>げ出<sup>い</sup>しつべく思<sup>い</sup>えるなり。さりながら父の戒<sup>い</sup>め、おり

おり桜川町の宅うちに帰りて聞く母の訓おしえはここと、けなげにもなお攻城砲の前に陣取りて、日また日を忍びて過ぎぬ。時にはたまり兼ねて思いぬ、恋はかくもつらきものよ、もはや二度とは人を恋わじと。あわれむべきお豊は、川島未亡人のためにはその乱れがちなる胸の安全管にせられ、家内の婢おんなおとこ僕には日ながの慰みにせられ、恋しき人の顔を見ることも無のうして、生まれ出いでてより例ためしなき克己と辛抱をもつて当てもなきものを待ちけるなり。

お豊が来たりしより、武男が母は新たに一の懊おうのう惱なうをば添えぬ。失える玉は大にして、去れる婦よめは賢なり。比較になるべき人ならねども、お豊が来たりて身近に使わるるに及びて、なすことごとくに氣に入るはなくて、武男が母は堅くその心をふさげるにかかわ

らず、ともすれば昔わがしかりもしののしりもせしその人を思い  
いでぬ。光を韞つめる女の、言葉多からず起居たちいにしとやかなれば、  
見たる所は目より鼻にぬけるほど華手はでには見えねど、不なれなが  
らもよくこちの気を飲み込みて機転もきき、第一心がけの殊勝な  
るを、凶に乗つては口ぎたなくののしりながら、心の底にはあの  
年ごろでよく気がつくと暗に白状せしこともありしが、今日の前  
に同じ年ごろのお豊を置いて見れば、是非なく比較はとれて、事  
ごとに思うまじと思う人を思えるなり。されば日にちにち々ち気にくわぬ  
事の出いで来るごとに、春がすみの化けて出いでたる人間の名をお豊  
と呼ばれて目は細々と口も閉じあえずすわれるかたわらには、い  
つしか色少し蒼あおざめて髪黒々としとやかなる若き婦人おんなの利発らし

き目をあげてつくづくとわが顔をながめつつ「いかがでございませす？」というようなる心地こころちして武男が母は思わずもわなななかれつ。「じやつて、病気をすつがわるかじやなつか」と幾たびか陳い弁わすれど、なお妙に胸むな先さきに込みあげて来るものを、自己おのれは怒りと思いつつ、果てはまた大声あげて、お豊に当たり散らしぬ。

されば、広島ここうさいの旗亭いに、山木が田崎に向かいて娘お豊を武男が後妻こうさいにとおぼろげならず言い出いでしその時は、川島未亡人とお豊の間は去る六月げつにおける日にっしん清の間よりも危いうく、彼出いだすか、われ出いづるか、危機いはいわゆる一髪いにかかりしなりき。

枕まくらベ近き小鳥の声に呼びさまされて、武男は目を開きぬ。

ベッドの上より手を伸ばして、窓かけ引き退のくれば、今向こう山を離れし朝日花やかに玻璃窓はりそうにさし込みつ。山は朝霧なお白けれど、秋の空はすでに蒼々あおあおと澄み渡りて、窓前一樹染むるがごとく紅くれないなる桜の梢こずえをあざやかに襯しんし出しぬ。梢に両三羽の小鳥あり、相語りつつ枝より枝におどれるが、ふと言い合わたるよう  
に玻璃窓のうちをのぞき、半身をもたげたる武男と顔見合わし、驚きたつて飛び去りし羽風はかせに、黄なる桜の一葉ばらりと散りぬ。

われを呼びさませし朝あしたの使いは彼なりけるよと、武男はほほえみつ、また枕につかんとして、痛める所あるがごとくいささか眉まゆ

をひそめつ。すでにしてようやく身をベッドの上に安んじ、目を閉じぬ。

あした朝静かにして、耳わずらわす響おともなし。鶏鳴とりき、ふなうた遠く

聞こゆ。

武男は目を開いて笑えみ、また目を閉じて思いぬ。

\*

武男が黄海に負傷して、ここ佐世保の病院に身を託せしより、すでに一月余り過ぎんとす。

かの時、砲台の真中まなかに破裂せし敵の大榴弾だいいりゆうだんの乱れ飛ぶにうたれて、尻居しりいにどうと倒れつつはげしき苦痛に一時われを失いが、苦痛のはなはだしかりしわりに、脚部の傷は二か所とも幸い

に骨を避けて、その他はちとの火傷を受けたるのみ。分隊長は骸も留めず、同僚は戦死し、部下の砲員無事なるはまれなりしがなかに、不思議の命をとりとめて、この海軍病院に送られつ。最初はさすがに熱もはげしく上りて、ベッドの上のうわ言にも手を戟にして敵艦をのしり分隊長と叫びては医員を驚かししが、もとより血氣盛んなる若者の、傷もさまで重きにあらず、時候も秋涼に向かえるおりから、熱は次第に下り、経過よく、膿腫の患もなく、すでに一月あまり過ぎし今日このごろは、なお幾分の痛みをば覚ゆれど、ともすれば石炭酸の臭の満ちたる室をぬけ出でて秋晴の庭におりんとしては軍医の小言をくうまでになりつ。この上はただ速やかに戦地に帰らんと、ひたすら医の許容を

待てるなりき。

思いすてて 塵ちりあくた 芥か よりも軽かりし命は不思議にながらえて、

熱去り苦痛薄らぎ食欲復するとともに、われにもあらで生を樂しむ心は動き、従つて煩ぼんのう悩もわきぬ。蟬せみは殻を脱げども、人はおのれを脱のがれ得ざれば、戦いの熱病ねやまいの熱に中絶なかたえし記憶の糸はその体たいのやや癒いえてその心の平生へいぜいに復かえるとともにまたおのずから掀かかげ起こされざるを得ざりしなり。

されど大疾よく體質を新たにするにひとしく、わずかに一紙を隔てて死と相見たるの経験は、武男が記憶を別様に新たなならしめたり。激戦、及びその前後に相ついで起こりし異常の事と異常の感かんは、風雨のごとくその心を簸ふるい撼うごかしつ。風雨はすでに過ぎた

れど、余波はなお心の海に残りて、浮かぶ記憶はおのずから異なる態をとりぬ。武男は母を憤らず、浪子をば今は世になき妻を思うらんようにその心の龕がんに祭りて、浪子を思うごとにさながら遠き野末の悲歌を聞くごとく、一種なつかしき哀かなしみを覚えしなり。

田崎来たり見舞いぬ。武男はよりて母の近況を知りまたほのかに浪子の近況ようすを聞きぬ。(武男の気をそこなわんことを恐れて、

田崎はあえて山木の娘の一条をばいわざりき) 武男は浪子の事を聞いて落涙し、田崎が去りし後も、松風さびしき湘しょうなん南べつしの別墅よに病める人の面影おもかげは、黄海の戦いとかわるがわる武男が宵しよ々うしよの夢に入りつ。

田崎が東に帰りし後数日すじつにして、いづくよりともなく一包みの

荷物武男がもとに届きぬ。

\*

武男は今その事を思えるなり。

### 三の二

武男が思えるはこれなり。

一週前ぜんの事なりき。武男は読みあきし新聞を投げやりて、ベツドの上にあくびしつつ、窓外を打ちながめぬ。同室の士官きのう昨日退院して、室内には彼一人ひとりなりき。時は黄昏たそがれに近く、病室はほのぐらくして、窓外には秋雨滝のごとく降りしきりぬ。隣室の患者

に電気かくるにやあらん。じじの響き絶え間なく雨に和して、うたた室内のわびしさを添えつ。聞くともなくその響おとに耳を仮して、目は窓に向かえば、吹きしぶく雨淋漓りんりとしてガラスにしたたり、しとどぬれたる夕暮れの庭はまだらに現われてまた消えつ。

茫然ぼうぜんとしてながめ入りし武男は、たちまち頭かしらより毛布ケットを引きかつぎぬ。

五分ばかりたちて、人の入り来る足音して、

「お荷物が届きました。……おやすみですか」

頭かしらを出せば、ベッドの横側に立てるは、小使いなり。油紙包いみを抱いだき、廿文字にじゅうもんじにからげし重やかなる箱をさげて立ちたり。

荷物？ 田崎帰いりてまだ幾日いくかもなきに、たが何を送りしぞ。

「ああ荷物か。どこからだね？」

小使いが読める差し出し人は、聞きも知らぬ人の名なり。

「ちよつとあけてもらおうか」

油紙を解けば、新聞、それを解けば紫の包み出でぬ。包みを解けば出でたり、ネルの単衣ひとえ、柔らかき絹物の袷あわせ、白縮緬しろちりめんの兵児帯おび、雪を欺く足袋たび、袖広き襦袢じゆばんは脱ぎ着たやすかるべく、真綿の肩ぶとんは長き病床に床ずれあらざれと願うなるべし。箱の内は何ぞ。莎繩くぐなわを解けば、なかんずく好める泡雪梨あわゆきの大なるとバナナのあざらけきとあふるるまでに満ちたり。武男の心臓むねの鼓動は急になりぬ。

「手紙も何もはいつていないかね？」

彼をふるいこれを移せど寸の紙だになし。

「ちよいとその油紙を」

包み紙をとりて、わが名を書ける筆の跡を見るより、たちまち胸のふさがるを覚えぬ。武男はその筆を認めたるなり。

彼女なり。彼女なり。彼女ならずしてたれかあるべき。その縫える衣の一針ごとに、あとはなけれどまさしくそそげる千行の涙を見ずや。その病をつとめて書ける文字の震えるを見ずや。

人の去るを待ち兼ねて、武男は男泣きに泣きぬ。

\*

もとより涸れざる泉は今新たに開かれて、武男は限りなき愛の涸々としてみなぎるを覚えつ。昼は思い、夜は彼女を夢みぬ。

されど夢ほどに世は自由ならず。武男はもとより信じて思いぬ、  
二人が間は死だもつんざくあたわじと。いわんや区々たる世間の  
手続きをや。されどもその心を実にせんとしては、その区々たる  
手続き儀式が企望と現実の間に越ゆべからざる障壁として立てる  
を覚えざるあたわざりき。世はいかにすとも、彼女は限りなくわ  
が妻なり。されど母はわが名によつて彼女を離別し、彼女が父は  
彼女に代わつて彼女を引き取りぬ。世間の前に二人が間は絶えた  
るなり。平癒を待つて一たび東に帰り、母にあい、浪子を訪うて  
心を語り、再び彼女を迎えんか。いかに自ら欺くも、武男はいわ  
ゆる世間の義理体面の上よりさることのなすべくまたなしうべき  
を思い得ず、事は成らずして畢。竟再び母とわれとの間を前に

も増して乖離せしむるに過ぎざるべきを思いぬ。母に逆らうの苦  
 はすでになめたり。

広い宇宙に生きて思わぬ桎梏にわが愛をすら縛らるるを、齒が  
 ゆしと思えど、武男は脱るる路を知らず、やる方なき懊惱に日  
 また日を送りつつ、ただ生しようし死ともにわが妻は彼女かれと思いてわず  
 かに自ら慰めあわせて心に浪子をば慰めけるなり。

今朝けさも夢さめて武男が思える所は、これなりき。

この朝軍医が例のごとく来たり診して、傷のいよいよ全癒に向  
 かうに満足を表して去りし後、一封の書は東京なる母より届きぬ。  
 書中には田崎帰りていささか安堵あんどせるを書き、かついささか話し  
 たき事もあれば、医師の許可ゆるし次第ひとまず都合して帰京すべしと

書きたり。話したき事！ もしくは彼がもつとも忌みかつ恐るるある事にはあらざるか。武男は打ち案じぬ。

武男はついに帰京せざりき。

十一月初旬、彼とひとしく黄海に手負いし彼が乗艦松島の修繕終わりて戦地に向かいしと聞くほどもなく、わずかに医師の許容ゆるしを得たる武男は、請うて運送船に便乗し、あたかも大連灣を取つて同灣ここに碇泊ていはくせる艦隊に帰り去りぬ。

佐世保を出発する前日、武男は二通の書を投函とうかんせり。一はその母にあてて。

## 四の一

秋風吹き初<sup>そ</sup>めて、避暑の客は都に去り、病を養う客<sup>ひと</sup>ならでは留<sup>とど</sup>まる者なき九月初旬<sup>はじめ</sup>より、今ここ十一月初旬<sup>はじめ</sup>まで、日の温<sup>あたた</sup>かに風なき時をえらみて、五十あまりの婢<sup>おんな</sup>に伴なわれつつ、そぞろに逗<sup>ず</sup>子の浜<sup>し</sup>べを運動する一人<sup>ひとり</sup>の淑女ありき。

やせにやせて砂に落つ影も細々といたわしき姿を、網<sup>ひ</sup>曳く漁夫、日ごと浜べを歩む病客も皆見るに慣れて、あうごとに頭<sup>かしら</sup>を下げぬ。たれつたうともなくほのかにその身の上をば聞き知れるなりけり。こは浪子なりき。

惜しからぬ命つれなくもなお永<sup>なが</sup>らえて、また今年の秋風を見るに及べるなり。

\*

浪子は去る六月の初め、伯母おばに連れられて歸京し、思いも掛けぬ宣告を伝え聞きしその翌日より、病は見る見る重り、前後を覚えぬまで胸を絞つて心血くれないの紅なるを吐き、医は黙し、家族やからは眉まゆをひそめ、自己おのれは旦夕たんせきに死を待ちぬ。命は実いちるに一縷いちるにつながれしなりき。浪子は喜んで死を待ちぬ。死はなかなかうれしかりき。何思う間もなくたちまち深井しんせいの暗黒くらつきにおちたるこの身は、何の楽しみあり、何のかいありて、世ながに永ながらえんとはすべき。たれを恨み、たれを恋う、さる念は形をなす余裕ひまもなくて、ただ身をめぐる暗黒の恐ろしくいとわしく、早くこのうちを脱のがれんと思ふのみ。死は実にただ一の活路なりけり。浪子は死をまちわびぬ。身

は病の床に苦しみ、心はずでに世の外ほかに飛びき。今日きょうにもあれ、明日あすにもあれ、この身の絆絶ほどしえなば、惜しからぬ世を下に見て、魂こん千万里の空くうを天に飛び、なつかしき母の膝ひざに心ゆくばかり泣きもせん、訴えもせん、と思えば待たるるは実に死の使いなりけり。あわれ彼女かれは死をだに心に任せざりき。今日、今日と待ちし今日は幾たびかむなく過ぎて、一月あまり経たれば、われにもあらで病やや間かんに、二月を経てさらに軽かろくなりぬ。思いすてし命をまたさらにこの世に引き返されて、浪子はまた薄命に泣くべき身となりぬ。浪子は実に惑えるなり。生の愛すべく死の恐るべきを知らざる身にはあらずや。何のために医を迎え、何のために薬を服し、何のために惜しからぬ命をつながんとするぞ。

されど父の愛あり。朝あしたゆうべに夕かに彼女が病床を省せいし、自ら薬餌やくじを与え、さらに自ら指揮して彼女がために心静かに病を養うべき離家はなれを建て、いかにもして彼女を生かさずばやまざらんとす。父の足音を聞き、わが病の間かんなるによるこぶ慈顔を見るごとに、浪子は恨みにはおとさぬ涙のおのずから頬ほおにしたたるを覚え、みだりに死をこいねごうに忍びずして、父のために務めて病をば養えるなり。さらに一あり。浪子は良人おととを疑うあたわざりき。海かれ山くずるるも固く良人の愛を信じたる彼女は、このたびの事一も良人の心にあらざるを知りぬ。病やや間かんになりて、ほのかに武男の消息を聞くに及びて、いよいよその信に印捺おされたる心地こころちして、彼女かれはいささか慰められつ。もとよりこの後のいかに成り行くべ

きを知らず、よしこの疾瘥やまいゆとも一たび絶えし縁は再びつなぐ時  
 なかるべきを感じざるにあらざるも、なお二人が心は冥々めいめいの間うち  
 に通いて、この愛をば何人なんびともつんざくあたわじと心に謂いいて、  
 ひそかに自ら慰めけるなり。

されば父の愛と、このほのかなる望みとは、手を尽くしたる名  
 医の治療と相待ちて、消えんとしたる彼女かれが玉の緒を一たびつな  
 ぎ留め、九月初旬はじめより浪子は幾と看護婦を伴のうて再び逗子の別  
 墅つしよに病を養えるなりき。

## 四の二

逗子に来てよりは、やまい症やや快く、あたりの静かなるに、心も少しは静まりぬ。海の音遠きひるすぎ午後、湯上がりのたい体を安樂椅子いすに倚よせて、鳥の音の清きを聞きつつうっとりとしてあれば、さながら去いにし春のころここにありける時の心地こころちして、今にも良人の横須賀より来たり訪とわん思いもせらるるなりけり。

べっしょ別墅の生活は、去る四五月のころに異ならず。幾と看護婦を相手に、日課は服薬運動の時間を違たがえず、体温を検し、定められたる摂生法を守るほかは、せめての心やりに歌詠よみ秋草を活いけなどして過ごせるなり。週に一二回、医は東京より来たり見舞いぬ。月に両三日、あるいは伯母、あるいは千鶴子、まれに継母も来たり見舞いぬ。その幼き弟はらから妹二人は病める姉をなつかしがりて、

しばしば母に請えど、病を忌み、かつは二人の浪子になずくを  
 もしろからず思える母は、ただしかりてやみぬ。今の身の上を聞  
 き知りてか、昔の学友の手紙を送れるも少なからねど、おおかた  
 は文字麗しくして心を慰むべきものはかえつてまれなる心地こころして、  
 よくも見ざりき。ただ千鶴子の来たるをば待ちわびつ。聞きたし  
 と思う消息は重に千鶴子より伝われるなり。

縁絶えしより、川島家は次第に遠くなりつ。幾百里西なる人の  
 面影おもかげは日夕につせき心に往来するに引きかえて、浪子はさらにその人  
 の母をば思わざりき。思わずとにはあらで、思わじと務めしなり  
 けり。心一たびその姑しゅうとの上に及ぶごとに、われながら恐ろしく苦  
 き一念の抑おさうれどむらむらと心むねにわき来たりて、氣の怪しく乱れ

んとするを、浪子はふりはらいふりはらいて、心を他に転ぜしなり。山木の女の川島家に入り込みしと聞けるその時は、さすがに心地乱れぬ。しかもそはわが思う人のあずかり知る所ならざるべきを思いて、しいて心をそなたにふさげるなり。彼女が身は湘南に病に臥して、心は絶えず西に向かいぬ。

この世において最も愛すなる二人は、現に征清の役に従えるならずや。父中將は浪子が逗子に來たりしより間もなく、大元帥とらうかこじゆう下に扈從して広島におもむき、さらに遠くりようとう遼東に向かわんとす。せめて新橋までと思えるを、父は制して、くれぐれも自愛し、凱旋がいせんの日には全快して迎えに來よと言ひ送りぬ。武男はあの後直ちに戦地に向かいて、現に連合艦隊の旗艦にありと聞く。秋雨

秋風身につつがなく、戦鬪の務めに服せらるるや、いかに。日々にちにちやや夜々陸に海に心は馳はせて、世には要なしといえる浪子もおどる心に新聞をば読みて、皇軍連勝、わが父息災、武男の武運長久を祈らぬ日はあらざりしなり。

九月末にいたり、黄海の捷しょうほう報は聞こえ、さらに数日すじつを経て負傷者のうちに浪子は武男の姓名を見出しぬ。浪子は一夜眠らざりき。幸いに東京なる伯母のその心をくめるありて、いづくより聞き得て報ぜしか、浪子は武男の負傷のはなはだしく重からずして現に佐世保の病院にある由を知りつ。生死しょうじの憂いを慰められしも、さてかなたを思いやりて、かくもしたしと思ふ事の多きにつけても、今の身の上の思うに任せぬ恨みはまたむらむらと胸を

ふさぎぬ。なまじいに夫妻の名義絶えしばかりに、まさしく心は通いつつ、彼は西に傷つき、われは東に病みて、行きて問うべくもあらぬのみか、明らさまにははがき一枚の見舞すら心に任せぬ身ならずや。かく思いてはやる方なくもだえしが、なおやみ難き心より思いつきて、浪子は病の間々に幾ひまひまを相手にその人の衣を縫い、その好める品をも取りそろえつつ、裂けんとすなる胸の思いの万分一も通えかすと、名をばかくして、はるかに佐世保に送りしなり。

週去り週来たりて、十一月中旬、佐世保の消印ある一通の書は浪子の手に残ちたり。浪子はその書をひしと握りて泣きぬ。

## 四の三

打ち連れて土曜の夕べより見舞に來し千鶴子と妹駒子は、今朝  
帰り去りつ。しばしにぎやかなりし家の内うちまた常のさびしきにか  
えりて、曇りがちな障子のうち、浪子はひとり床にかけたる亡な  
き母の写真にむかいて坐ざしぬ。

今日、十一月十九日は亡き母の命日なり。はばかり人もなけれ  
ば、浪子は手匣てばこより母の写真取り出いでて床にかけ、千鶴子が持もて  
來し白菊のやや狂わんとするをその前に手向たむけ、午後には茶など  
点いれて、幾の昔語りに耳傾けしが、今は幾も看護婦も罷まかりて、浪  
子はひとり写真の前に残れるなり。

母に別れてすでに十年ととせにあまりぬ。十年の間ととせ、浪子は亡き母を忘るるの日なかりき。されど今日このごろはなつかしさの堪たえ難きまで募りて、事ごとにその母を思えり。恋しと思う父は今遠く遼東にあり。継母は近く東京にあれど、中垣なかがきの隔て昔のままに、ともすれば聞きづらきことも耳に入る。亡き母の、もし亡き母の無事に永らえて居たまわば、かの苦しみも告げ、この悲しさも訴えて、かよわきこの身に負いあまる重荷もすこしは軽く思うべきに、何ゆえ見すてて逝ゆきたまいしと思おもう下より涙はわきて、写真は霧を隔てしようにおぼろになりぬ。

昨日きのうのようなれど、指を折れば十年ととせたちたり。母上の亡くなりたもうその年の春なりき。自身みづからは八歳やつ、妹は五歳いっつ（そのころは

片言まじりの、今はあの通り大きくなりけるよ）桜模様のあけほの曙

染ぞめ、二人そろうて美しと父上にほめられてうれしく、われは右

妹は左母上を中に、馬車をきしらして、九段の鈴木すずきに撮とらしう

ちの一枚はここにかけたるこの写真ならずや。思えば十年ととせは夢と

過ぎて、母上はこの写真になりたまひ、わが身は——。

わが身の上は思わじと定めながらも、味気なき今の境涯はあいにくにありありと目の前に現われつ。思えば思うほどなんの楽しみもなんの望みもなき身は十重とえはたえ二十重黒雲に包まれて、この八畳の間は日影も漏れぬ死囚ろうになりかわりたる心地こころちすなり。

たちまち柱時計は家内やうちに響き渡りて午後二点にじをうちぬ。おどろかれし浪子のはがるごとく次の間に立てば、ここには人もなく

て、裏の方に幾と看護婦と語る声す。聞くともなく耳傾けし浪子は、またこの室を出でて庭におり立ち、枝折戸あけて浜に出でぬ。空は曇りぬ。秋ながらうつとりと雲立ち迷い、海はまつ黒に響みたり。大気は恐ろしく静まりて、一陣の風なく、一波だに動かず、見渡す限り海に帆影絶えつ。

浪子は次第に浜を歩み行きぬ。今日は網曳する者もなく、運動する客の影も見えず。孩を負える十歳あまりの女の子の歌いながら貝拾えるが、浪子を見てほほえみつつ頭を下げぬ。浪子は惨として笑みつ。またうつとりと思いつづけて、うつむきて歩みぬ。たちまち浪子は立ちどまりぬ。浜尽き、岩起これるなり。岩に一条の路あり、それをたどれば滝の不動にいたるべし。この春浪子

が良人おつとに導かれて行きしところ。

浪子はその路をとりて進みぬ。

#### 四の四

不動祠ふどうしの下まで行きて、浪子は岩を払うて坐ぎしぬ。この春良人おつとと共に坐したるもこの岩なりき。その時は春晴うらうらと、  
 碧どりの空に雲なく、海は鏡よりも光りき。今は秋陰暗あんとして、空  
 に異形いぎようの雲満ち、海はわが坐す岩の下まで満々とたたえて、そ  
 のすぎきまで黯くろき面おもてを点破する一帆ぼんの影だに見えず。

浪子はふところより一通の書を取り出しぬ。書中はただ兩三行、

武骨なる筆跡の、しかも千万語にまさりて浪子を思いに堪えざらしめつ。「浪子さんを思わざるの日は一日も無<sup>これなくそ</sup>之候」。この一句を読むごとに、浪子は今さらに胸迫りて、恋しさの切らるるばかり身にしみて覚ゆるなりき。

いかなればかく枉<sup>まが</sup>れる世ぞ。身は良人<sup>おつと</sup>を恋い恋いて病よりも思いに死なんとし、良人はかくも想<sup>おも</sup>いて居たもうを、いかなれば夫妻の縁は絶えけるぞ。良人の心は血よりも紅<sup>くれない</sup>に注がれてこの書中にあるならずや。現にこの春この岩の上に、二人並びて、万世<sup>よろずよ</sup>までもと誓いしならずや。海も知れり。岩も記すべし。さるをいかなれば世はほしいままに二人が間を裂きたるぞ。恋しき良人、なつかしき良人、この春この岩の上に、岩の上——。

浪子は目を開きぬ。身はひとり岩の上に坐せり。海は黙々として前にたたえ、後ろには滝の音ほのかに聞こゆるのみ。浪子は顔打ちおおいつつむせびぬ。細々とやせたる指を漏りて、涙はらはらと岩におちたり。

胸は乱れ、頭は次第に熱して、縦横に飛びかう思いは梭のごとく過去を一目に織り出しつ。浪子は今年の春良人にたすけ引かれてこの岩に來たりし時を思い、発病の時を思い、伊香保に遊べる時を思い、結婚の夕べを思いぬ。伯母に連れられて帰京せし時、むかしむかしその母に別れし時、母の顔、父の顔、継母、妹を初めさまさまの顔は雷光のごとくその心の目の前を過ぎつ。浪子はさらに昨日千鶴子より聞きし旧友の一人を思いぬ。彼女は浪子

より二歳<sup>ふたつた</sup>長けて一年早く大名華族のうちにも才子の聞こえある洋行帰りの某伯爵に嫁<sup>とつ</sup>ぎしが、舅<sup>しゅうと</sup>姑の気には入りて、良人にきらわれ、子供一人もうけながら、良人は内<sup>うち</sup>に妾<sup>しやう</sup>を置き外に花柳の遊びに浸り今年の春離縁となりしが、ついこのごろ病死したりと聞く。彼女<sup>かれ</sup>は良人にすてられて死し、われは相思う良人と裂かれて泣く。さまざまの世と思えば、彼も悲しく、これもつらく、浪子はいよいよ黝<sup>くろ</sup>うなり来る海<sup>おもて</sup>の面をながめて太息<sup>といき</sup>をつきぬ。

思うほど、気はますます乱れて、浪子は身を容<sup>い</sup>るる余裕<sup>ひま</sup>もなきまで世のせまきを覚ゆるなり。身は何不足なき家に生まれながら、なつかしき母には八歳<sup>やっ</sup>の年<sup>つ</sup>に別れ、肩をすぼめて継母<sup>もと</sup>の下<sup>と</sup>に十年を送り、ようやく良縁定まりて父の安堵<sup>あんど</sup>われもうれしと思う間も

なく、姑しゅうとの気には入らずとも良人のためには水火もいとわざる身の、思いがけなき大疾を得て、その病も少しは痊おこたらんとするを喜べるほどもなく、死ねといわるるはなお慈悲の宣告を受け、愛し愛さるる良人はありながら容赦もなく間を裂かれて、夫と呼び妻と呼ぶることもならぬ身となり果てつ。もしそれほど不運なるべき身ならば、なにゆえ世には生まれ来しぞ。何ゆえ母上とともに、われも死なざりしぞ。何ゆえに良人のもとには嫁しつるぞ。何ゆえにこの病を発せしその時、良人の手に抱いだかれては死せざりしぞ。何ゆえに、せめてかの恐ろしき宣告を聞けるその時、その場に倒れては死なざりしぞ。身には不治の病をいただきて、心は添われぬ人を恋う。何のためにか世に永ながらうべき。よしこの病癒いゆ

とも、添われずば思いに死なん——死なん。

死なん。何の楽しみありて世に永らうべき。

はふり落つる涙をぬぐいもあえず、浪子は海おもての面を打ちながめぬ。

伊豆大島いずおおしまの方に当たりて、墨色に渦まける雲急にむらむらと立

つよと見る時、いうべからざる悲壮の音ははるかの天空より落と

し来たり、大海おもての面たちまち皺しわみぬ。一陣の風吹き出いでけるなり。

その風鬢びんをかすめて過ぎつと思ふほどなくまつ黒き海まなかの中央に一

団の雪わくと見る見る奔馬のごとく寄せて、浪子が坐ざしたる岩も

砕けよとうちつけつ。渺びようびよう々たる相洋は一分時ぶんじならずして千波

万波ばんば鼎なえのごとく沸きぬ。

雨と散るしぶきを避けんともせず、浪子は一心に水の面おもをながめ入りぬ。かの水の下には死あり。死はあるいは自由なるべし。この病をいだいて世に苦しまんより、魂こんぱく魄ぱくとなりて良人に添うはまさらずや。良人は今黄海にあり。よしはるかなりとも、この水も黄海に通えるなり。さらば身はこの海の泡あわと消えて、魂たまは良人のそばに行かん。

武男が書をばしつかとふところに収め、風に乱るる鬢びんかき上げて、浪子は立ち上がりぬ。

風はひょうひょう々として無辺の天より落とし来たり、かろうじて浪子は立ちぬ。目を上ぐれば、雲は雲と相追うて空を奔りはし、海は目の届く限り一面に波と泡とまっ白に煮えかえりつ。湾を隔つる桜

山は悲鳴してたてがみのごとく松を振るう。風吼え、海哮り、山も鳴りて、浩浩の音天地に満ちぬ。

今なり、今なり、今こそこの玉の緒は絶ゆる時なれ。導きたまえ、母。許したまえ、父。十九年の夢は、今こそ――。

襟引き合わせ、履物をぬぎすてつつ、浪子は今打ち寄せし浪の岩に砕けて白泡沸るあたりを目がけて、身をおどらす。

その時、あと背後に叫ぶ声して、浪子はたちまち抱き止められつ。

## 五の一

「ばあや。お茶を入れるようにしてお置き。もうあの方がいらつしやる時分ですよ」

かく言いつつ浪子はおもむろに幾を顧みたり。幾はそこらを片づけながら

「ほんとにあの方はいい方かたでございますねエ。あれでも耶蘇やそでいらつしやいますツてねエ」

「ああそうだツてね」

「でもあんな方が切支丹きりしたんでいらつしやろうとは思いませんでしたよ。それにあんなに髪を切ツていらつしやるのですら」

「なぜかい？」

「でもね、あなた、耶蘇の方では御亭主が亡なくなつても髪なんぞ

切りませんで、なおのことおめかしをしましてね、すぐとまたお嫁入りの口をさがしますとさ」

「ほほほほ、ばあやはだれからそんな事を聞いたのかい？」

「イイエ、ほんとでございますよ。一体あの宗旨では、若い娘<sup>もの</sup>までがそれは生意気でございましてね、ほんとでございますよ。幾が親類<sup>みうち</sup>の隣家<sup>となり</sup>に一人<sup>ひとり</sup>そんな娘<sup>こ</sup>がございましてね、もとはあなたおとなしい娘<sup>こ</sup>で、それがあの宗旨の学校にあがるようになりましてね、あなた、すっかりようすが変わつちまいましたね、日曜日にありますとね、あなた、母親<sup>おや</sup>が今日<sup>きょう</sup>は忙しい<sup>せわ</sup>からちつと手伝いでもしなさいと言いましたもね、平気でそのお寺にいつちまいますてね、それから学校はきれいだけれども家<sup>うち</sup>はきたなくていけない

の、母おつかさんは頑固がんこだの、すぐ口をとがらしましてね、それに学校に上がっていても、あなた、受取証じゅとくしやうが一枚書けませんでね、裁縫しやうとをさせますと、日が一日襦袢じゆばんの袖そでをひねくつていましてね、お惣菜そうざいの大根をゆでなさいと申しますと、あなた、大根を俎まない板たに載せまして、庖丁ほうちやうを持ったきりぼんやりしておるので、ございますよ。両親おやもこんな事ならあんな学校に入れるんじゃないやな。かつたど悔やんでいましてね。それにあなた、その娘こはわたしはあの二百五十円より下の月給の良人ひとには嫁いかない、なんぞ申しましてね。ほんとにあなた、あきれかえるじゃございませんか。もとはやさしい娘こでしたのに、どうしてあんなになつたんでございましょうね。これが切支丹の魔法でございましょうね」

「ほほほほ。そんなでも困るのね。でも、何だツて、いい所もあれば、わるいところもあるから、よく知らないではいわれないよ。ねエばあや」

心得ずといわんがごとく小首傾けし幾は、熱心に浪子を仰ぎつ  
つ

「でもあなた、<sup>やそ</sup>耶穌だけはおよし遊ばせ」

浪子はほほえみつ。

「あの方とお話ししてはいけないというのかい」

「<sup>やそ</sup>耶穌がみんなあんな方だとようございませがねエ、あなた。でも——」

幾は口をつぐみぬ。うわさをすれば影ありありと西側の障子に

映り来たれるなり。

「お庭口から御免ください」

細く和らかなる女の声響きて、忙いそがわしく幾がたちてあけし障子の外には、五十あまりの婦人の小作りなるがたたずみたり。年よりも老ふけて、多しらがき白髪を短くきり下げ、黒地の被ひふ布を着つ。やせたる上にやつれて見ゆれば、打ち見にはやや陰気に思われるれど、目あたたに温かなる光ありて、細き口もとにおのずからなる微笑あり。

幾いがあたかもうわさしたるはこの人なり。未いまだし。一週間以前の不動しはん祠畔の水屑みくずとなるべかりし浪子をおりよくも抱き留めたるはこの人なりけり。

ラツパを吹き鼓を鳴らして名を売ることをせざれば、知らざる

者は名をだに聞かざれど、知れる者はその包むとすれどおのずから身にあふるる光を浴びて、ながくその人を忘るるあたわずといふなり。姓は小川名は清子と呼ばれて、目黒のあたりにおおぜいの孤兒女と棲すみ、一大家族の母として路傍に遺棄せらるる幾多の靈魂を拾いてははぐくみ育つるを樂しみとしつ。肋膜ろくまくえん炎に悩みし病余の体たいを養うとて、昨月の末より此地ここに來たれるなるが、かの日、あたかも不動祠ふどうひらにありて囚らず浪子を抱いだき止め、その主人を尋ねあぐみて狼狽ろうばいして來たれる幾に浪子を渡せしより、おのずから往來の道は開けしなり。

## 五の二

茶もを持って来て今まか罷らんとしつる幾はやや驚きて

「まあ、明日あすお帰京かえり遊ばすんで。へエエ。せつかくおなじみになりかけましたのに」

老婦人もその和らかなる眼まみやこし光に浪子を包みつつ

「私わたくしもも少しとうりゆう逗留して、お話もいたしましょうし、ごあんばいのいいのを見て帰りたいのでございますが——」

言いつつ懐ふところ中より小形の本を取り出し、

「これは聖書ですがね。まだごらんになったことはございますまい」

浪子はいまださる書ものを読まざるなり。彼女かれが継母は、その英国

に留学しつる間は、信徒として知られけるが、帰朝の日その信仰とその聖書をば挙あげてその古靴及び反故ほごとともにロンドンの仮寓やしりにのこし来たれるなり。

「はい、まだ拝見いたした事はございませんが」

幾はなお立ち去りかねて、老婦人が手中の書を、目を円つぶらにしてうちまもりぬ。手品の種はかのうちに、と思えるなるべし。

「これからその何でございますよ、御気分によろしい時分に、読んでごらんになりましたら、きつとおためになることがあろうと思ひますよ。私わたくしも今少し逗とまり留ゆうしてありますと、いろいろお話もいたすのですが——今日はお告別わかれに私がこの書を読むようになりましてその来歴しまつをね、お話ししたいと思ひますが。あなたお疲れ

はなさいませんか。何なら御遠慮なくおやすみなすツて」

しみじみと耳傾けし浪子は顔を上げつ。

「いいえ、ちよつとも疲れはいたしません。どうかお話し遊ばして」

茶を入れかえて、幾は次に立ちぬ。

小春日の午後は夜よりも静かなり。海の音遠く、障子に映る松の影も動かず。ただはるかに小鳥の音の清きを聞く。東側のガラス障子を透かして、秋の空高く澄み、錦にしきに染まれる桜山は午後の日に燃えんとす。老婦人はおもむろに茶をすすりて、うつむきて被布の膝ひざをかいなで、仰いで浪子の顔うちまもりつつ、静かに口を開き始めぬ。

「人の一生は長いようで短く、短いようで長いものですよ。

私の父は旗本で、まあ歴々のうちでした。とうに人の有ものになつてしまったのですが、ご存じでいらつしやいませう、小石川こいしかわの水道橋を渡つて、少しまいりますと、大きな榎えのきが茂っている所があります、私はあの屋敷に生まれましたのです。十二の年に母は果てます、父はひどく力を落としまして後妻あともとらなかつたのですから、子供ながら私がいろいろ家事をやつてましたね。それから弟に嫁をとつて、私はやはり旗はたもと下の、格式は少し上でしたが小川うちの家にまいつたのが、二十一の年、あなた方はまだなかなかお生まれでもなかつたところでございますよ。

私も女大学で育てられて、辛抱なら人に負けぬつもりでしたが、

実際にその場に当たつて見ますと、本当に身にしみてつらいことも随分多いのでしてね。時勢ときが時勢ときで、良人おととは滅多うちに宅うちにいませず、舅しゅうと姑こに良人の姉きょうだい妹いまいが二人ふたり〓これはあとで縁ゆかりづきましたづが〓ありまして、まあ主人を五人もつたわけでして、それは人の知らぬ心配しんぱいもいたしたのですよ。舅しゅうとはそうもなかつたのですが、姑しゅうとめがよほど事つかえにくい人ひとでして、実は私の前に、嫁よめに來た婦人ひとがあつたのですが、半はん歳とせ足たりらずの間に、逃にげて歸かえつたといふことことで、亡なくなつた人をこう申すのははしたないようですが、氣きあらな、押し強い、弁べんも達者たつぱで、まあ俗せなに背せかを打うつて咽のどをしむるななど申ましますが、ちよつとそんな人ひとでした。私も十分辛抱しんぱうをしたつつもりですが、それでも時々は辛抱しんぱうしきれないで、屏風びょうぶの陰かげで泣な

いて、赤い目を見てしかられてまた泣いて、亡くなつた母を思い出すのもたびたびでした。

そうするうちに維新の騒ぎになりました。江戸じゆうはまるで鍋なべのなかのようでしてね。良人も父も弟もみんな彰義隊しょうぎたいで上野にいます、それに舅が大病で、私は懷妊みもちというのでしよう。ほんとに気は気でなかつたのでした。

それから上野は落ちます、良人は宇都宮うつのみやからだんだん函館はこだてまでまいり、父は行くえがわからなくなり、弟は上野で討死うちじにをいたして、その家族も失踪なくなつてしましますし、舅もとうとう病死をしましてね、そのなかでわたくしは産をいたしますし、何が何やらもう夢のようで、それから家禄かろくはなくなる、家財はとられま

すし、私は姑と年寄りの僕を一人連れましてね、当歳の児を抱いてあの箱根をこえて静岡しずおかに落ちつくまでは、恐ろしい夢を見たようでした」

この時看護婦入り来たりて、会釈しつつ、薬を浪子にすすめ終わりて、出で行きたり。しばし瞑目めいもくしてありし老婦人は目を開きて、また語りつづけぬ。

「静岡での幕士の苦労は、それはお話になりませんくらいで、將軍家がまずあの通り、勝先生かつなんぞも裏小路うらこうじの小さな家にくすぶつておいでの時節ですからね、五千石の私どもに三人扶持ぶちはもつたいないわけですが、しかし恥ずかしいお話ですが、そのころはお豆腐が一丁ちようとは買えませんで、それに姑はぜいたくになれて

おるのですから、ほんとに気をもみましたよ。で、私はね、町の女子供を寄せて手習いや、裁縫しゅうとを教えたり、夜もおそくまで、賃仕事をしましてね。それはいいのですが、姑はいよいよ気が荒くなりまして、時勢のしわざを私に負わすようなわけで、それはひどく当たりますし、良人おっとはいませず良人は函館後はしばらく牢ろうに入はいつていました。父の行くえもわかりませんし、こんな事なら死んだ方がと思つたことは日に幾たびもありましたが、それを思い返し思い返ししていたのです。本当にこのころは一年に年の十もとりましたのですよ。

そうするうちに、良人も陸軍に召し出さるるようになって、また箱根をこえて、もう東京ですね、その東京に帰つたのが、さよ

う、明治五年の春でした。その翌春良人は洋行を命ぜられましてね。ちようせき朝ちようせき夕せきの心配はないようになったのですが、しゆうと姑しゆうとの気分は一向に変わりませず——それはいいのでございますが、気にかかる父の行くえがどうしてもわかりません。

良人が洋行しましたその秋、ひどい雨の降る日でしたがね、小石川の知己しるべまでまいって、その家うちで雇うつてもらった車に乗って帰りかけたのです。日は暮れます、ひどい雨風で、私は幌ほろの内うちに小さくなっていますと、車夫くるまやはほとほと引いて行きましよう、まんじゆうがさ饅頭まんじゆうがさ笠がさをかぶってしわだらけの桐油合羽とうゆがっぱをきているのですが、雨がたらたらたら合羽から落ちましてね、ちようちん提灯ちようちんの火はちよろちよろ道の上に流れて、くるまや車夫くるまやは時々ほっほっ太息といき

をつきながら引いて行くのです。ちやうど水道橋にかかると、提灯がふつと消えたのです。車夫くるまやは梶棒かじぼうをおろして、奥様、お気の毒ですがその腰掛けの下にオランダ付け木（マッチの事ですよ）がはいっていますから、というのでしよう。風がひどいのでよくは聞こえないのですがその声が変に聞いたようですね、とやこうしてマッチを出して、蹴込みけこの方に向いてマッチをする、その火光あかりで車夫くるまやの顔を見ますと、あなた、父じやございませんか」

老婦人がわれにもあらず顔打ちおおいぬ。浪子は汪然おうぜんとして泣けり。次の間にも飲泣いきすすりの声聞こゆ。

## 五の三

目をぬぐいて、老婦人は語り続けぬ。

「同じ東京にいなながら、知らずにいればいられるものですね工。それから父と連れ立って、まあ近くの蕎麦屋そばやにまいりましてね、様子を聞いて見ますと、上野の落ちた後は諸処方々を流浪るろうして、手習いの先生をしたり、病氣したり、今は昔の家来で駒込こまごめのすみにごくごく小さな植木屋をしているその者にかかつて、自身はこう毎日貸し車を引いているというのでございますよ。うれしいやら、悲しいのやら、情けないのやら、込み上げて、ろくに話もできないのです。それからまあその晩は父に心づけられて別れましてね。

夜も大分だいぶんふけていました。帰るとあなたしゅうとは待ち受けていたという体ていで、それはひどい怒りおこよう苦にがりようで、情けないじやございませんか、私に何かくらい、あるまじいしわざでもあるように言いましたね。胸をさすツて、父の事を打ち明けて申しますと、気の毒と思つてくれればですが、それはもう聞きづらい恥はずかしい事を——あまり口惜くしくて、情けなくて、今度ばかりは辛抱も何もない、もうもう此家ここにはいない、今からすぐと父のそばに行つて、とそう思ひましてね、姑ふが臥ふせりましたあとで、そつと着物ものを着かえて、悴せがれⅡ六つでしたⅡがこう寝やすんでいます枕まくらもとで書き置きを書いていきますと、悴せがれが夢でも見たのですか、眠ねつたまま右の手を伸ばして「母かあさま、行いつちやいやよ」と申すのですよ。

その日小石川にまいる時置いて行つたのですから、その夢を見たのでしようが、びつくりしてじつとその寝顔を見ていますと、その顔が良人の顔そのままになって、私は筆を落として泣いていました。そうすると、まあどうして思い出したのでございますか、まだ子供の時分にね、寝物語に母から聞いた嫁姑の話、あの話がこうふと心に浮かみましてね、ああ私一人の辛抱で何も無事に治まることと、そうおもい直しましてね——あなた、御退屈でしょう？」

身にしみて聴<sup>き</sup>ける浪子は、答うるまでもなくただ涙の顔を上げつ。幾が新たにくめる茶をすすりて、老婦人は再び談<sup>だんちよ</sup>緒をつぎぬ。

「それからとやかく姑にわびましてね、しかしそんなわけですからなかなか父を引き取るの貢ぐの<sup>みつ</sup>ということではできません。で、まあごく内々で身のまわりⅡ多くもありませんでしたがⅡの物な<sup>る</sup>んぞ売り払ったり、それもながくは続かないのですから、良人の<sup>しるべ</sup>知己に頼みましてね、ある外国公使の夫人に物好きで日本の琴を習いたいという人がありましてね、それで姑の前をとやかくしてそれから月に幾たび琴を教えて、まあ少しは父を楽にすることができたのですが、そうするうちに、その夫人と懇意になりましたね、それは珍しいやさしい人でして、時々は半<sup>はんわかり</sup>解の日本語でいろいろ話をしましてね、読んでごらんささいといつて本を一冊くれました。それがね、そのころ初めて和訳になったマタイ伝――

—この聖書の初めにありますのでした。少し読みかけて見たのですが、何だか変な事ばかり書いてありまして、まあそのままにうちやつて置いたのでした。

それから翌<sup>よくとし</sup>年の春、姑はふと中<sup>ちゆうふう</sup>風になりましてね、気の強い人でしたが、それはもう子供のようになり、ひどくさびしがって、ちよいとでもはずしますと、お清<sup>きよ</sup>お清とすぐ呼ぶのでございますよ。そばにすわつて、蠅<sup>はえ</sup>を追いながら、すやすや眠る姑の顔を見えていますと、本当にこうなるものをなぜ一度でも心に恨んだことがあつたらう、できることならもう一度丈夫にして、とそうおもいましたね、精一杯骨を折つたのですが、そのかいもないのでした。

姑が亡くなりなりますとほどなく良人が帰朝しましてね。それから引き取るといふきわになつて、父も安心したせいですか、急に病氣になつて、つい二三日でそれこそ眠るように消えました。もう生涯会われぬと思つた娘には会うし、やさしくしてくれるし、自分ほど果報者はないと、そう申しましてね。——でも私は思う十分一もできませんで、今でも思い出すたびにもう一度活かして思う存分喜ばして見たいと思わぬ時はありませんよ。

それから良人は次第に立身いたします、悴は大きくなりまして、私もよほど楽になつたのですが、ただ氣をもみましたのは、良人の大酒たいしゆ——軍人は多くそうですが——の癖でした。それから今でもやはりそうですが、そのころは別してね、男子おとこの方が不行跡かた

で、良人なんぞはまあ西洋にもまいりますし、少しはいいのでしたが、それでも恥ずかしい事ですが、私も随分心配をいたしました。それとなく異見をしましても、あなた、笑つて取り合いませんのですよ。

そうするうちにあの十年の戦争になりました、良人——近衛の大佐でした——もまいります。そのあとに悴しよが猩紅熱こうねつで、まあ日ひる夜よるつきつきりでした。四月十八日の夜ばんでした、悴が小さい方でやすんでいますから、婢おんななぞもみんな寝せまして、私は悴の枕もとに、行燈あんどうの光で少し縫い物をしていますと、ついうとうといたしましたね。こう気が遠とくなりおますと、すうと人の来る気けはいがいたして、悴の枕もとにすわる者があるのです。たれか

と思つて見ますと、あなた、良人です、軍服のまままで、血だらけになりまして、蒼あおざめて——ま、あなた、思わずいったその声にふツと目がさめて、あたりを見るとだれもいません。行燈の火がとろとろ燃えて、悴はすやすや眠っています。もうすっかり汗になりまして、動悸どうきがはげしくうって——

その翌日から悴は急にわるくなりました、とうとうその夕刻に息を引き取りましてね。もう夢のようになりましてその骸からだを抱いているうちに、着いたのが良人が討死うちじにの電報しらせでした」

話者は口をつぐみ、聴者は息をのみ、室内しんとして水のごとくなりぬ。

やや久しゆうして、老婦人は再び口を開けり。

「それから一切夢中でしてね、日と月と一時に沈いつたと申しましたよ、何と申しましたよ、それこそほんにまつ暗になりました、辛抱に辛抱して結局つまりがこんな事かと思ひますと、いつそのままたまおらずに——すぐそのあとで臥わずらい病びょうましたのですよ——と思つたのですが、幸しあわせか不ふ幸しあわせか病気はだんだんよくなりましたね。

病気はよくなつたのですが、もう私には世の中がすっかり空から虚うつろになつたようで、ただ生きておるといふばかりでした。そうするうちに、知己しるべの勧めでとにかく家をたたんでしばらくその宅にまゐることにになりましたね。病後ながらぶらぶら道具や何か取り細めていきますと、いつでしたか筆筒たんすを明けますとね、亡くなりまし

た悴あわせの裕ほんの下から書ほんが出てまいりましてね、ふと見ますと先年外国公使の夫人がくれましたその聖書でございますよ。読むでもなくつい見ていますと、ちよいとした文句が、こう妙に胸に響くような心地こころもちがしましてね——それはこの書ほんにも符号しるしをつけて置きました——それから知己しるべの宅うちに越こしましても、時々読んでいました。読んでいますうちに、山道に迷った者がどこかに鶏とりの声を聞くような、まつくらな晩にかすかな光がどこからかさすように思いましたね。もうその書ほんをくれた公使の夫人は帰国して、いなかったのですが、だれかに話を聞いて見たいと思っっていますうちに、知己しるべの世話でそのころできました女の学校の舎監になって見ますと、それが耶蘇やそ教主義の学校でして、その教師のなかにまだ若い

御夫婦の方でしたが、それは熱心な方がありましてね、この御夫婦が私のまあ先<sup>せん</sup>達<sup>だつ</sup>になつてくださつたのですよ。その先<sup>せん</sup>達<sup>だつ</sup>に初<sup>はつ</sup>みはじめ<sup>みはじめ</sup>を教<sup>お</sup>わつてこの道<sup>みち</sup>に入りましてから、今年でもう十六年になりますが、杖<sup>つえ</sup>とも思<sup>おも</sup>うは実<sup>まこと</sup>にこの書<sup>ほん</sup>で、一日もそばを放<sup>はな</sup>さないでございませうよ。靈魂不死という事を信じてからは、死を限りと思<sup>おも</sup>つた世の中が広くなりまして、天の父を知つてからは親を失<sup>な</sup>つてまた大きな親を得たようで、愛の働<sup>はたら</sup>きを聞いてからは子を失<sup>な</sup>くしてまたおおぜいの子を持つた心<sup>こころ</sup>地<sup>もち</sup>で、望<sup>のぞ</sup>みという事を教<sup>お</sup>えられてから、辛抱<sup>しんぱう</sup>をするにも楽しみがつきましてね――

私<sup>わたし</sup>がこの書<sup>ほん</sup>を読<sup>よ</sup>むようになりましてしまつはまあぎツとこんなでございませうよ」

かく言い来たりて、老婦人は熱心に浪子の顔打ちまもり、

「実は、御様子はうすうす承つていましたし、ああして時々浜でお目にかかるのですから、ぜひ伺いたいと思う事もたびたびあったのですが、——それがこうふとお心やすくいたすようになりますと、またすぐお別れ申すのは、まことに残念でございますよ。

しかしこう申してはいかがでございますが、私にはどうしても浅ちよつと

日のお面識なじみの方とは思えませんよ。どうぞ御身おみを大事に遊ばし

て、必ず気をながくお持ち遊ばして、ね、決して短気をお出しな

さらぬように——御気分のいい時分ときはこの書ほんをごらん遊ばして—

—私は東京あちらに帰りましても、朝夕こちらの事を思っておりますよ」

\*

老婦人はその翌日東京に去りぬ。されどその贈れる一書は常に浪子の身近に置かれつ。

世にはかかる不幸を経てもなお人を慰むる誠まことを余せる人ありと思えば、母ならず伯母ならずしてなおこの茫ぼうぼう々たる世にわれを思いくくる人ありと思えば、浪子はいささか慰めらるる心地こころして、聞きつる履歴を時々思い出いでては、心こめたる贈り物の一書をひもとけるなり。

## 六の一

第二軍は十一月二十二日をもつて旅順を攻め落とす。

「お母<sup>かあ</sup>さま、お母さま」

新聞を持ちたるままあわただしく千鶴子はその母を呼びたり。

「何ですぬ。もつと静かに言<sup>もの</sup>をお言いなさいな」

水色の眼鏡<sup>めがね</sup>にちよつとにらまれて、さつと面<sup>おもて</sup>に紅潮<sup>くれない</sup>を散らし

ながら、千鶴子はほほと笑いしが、またまじめになりて、

「お母さま、死にましたよ、あれが——あの千々岩<sup>ちぢわ</sup>が！」

「エ、千々岩！ あの千々岩が！ どうして？ 戦<sup>うちじに</sup>死かい？」

「戦<sup>せんし</sup>死将校のなかに名が出ているわ。——いい気味！」

「またそんなはしたないことを。——そうかい。あの千々岩が戦<sup>う</sup>

死<sup>ちじに</sup>したのかい！ でもよく戦<sup>うちじに</sup>死したねエ、千鶴さん」

「いい気味！ あんな人は生きていたって、邪魔になるばかりだ

わ」

加藤子爵夫人はしばし黙然として沈吟しぬ。

「死んでもだれ一人泣いてくれる者もないくらいでは、生きがいのないものだね、千鶴さん」

「でも川島のおばあさんが泣きましようよ。——川島てば、お母さま、お豊とよさんがとうと逃げ出したんですツて」

「そうかい？」

「昨日きのうね、また何か始めてね、もうもうこんな家うちにはいないツて、泣き泣き帰っちゃいましたんですツて。ほほほほほようすが見たかったわ」

「だれが行ってもあの家うちでは納まるまいよ、ねエ千鶴さん」

母子おやこ相見あひまて言葉途絶えぬ。

\*

千々岩は死せるなり。千鶴子おやこ母子が右の問答をなしつるより二十日つかばかり立ちて、一片の遺骨と一通の書と寂しき川島家に届きたり。骨こつは千々岩の骨、書は武男の書なりき。その数節を摘みてん。

### 前文略

旅順陥落の翌々日、船せんきよ渠船舶等艦隊の手に引き取ることと相成り、将校以下数名上陸いたし、私儀も上陸つかまつ仕り候。激戦後の事とて、惨状は筆紙に尽くし難く 中略 仮設野戦病院の前を過ぎ候ところ、ふと担架にて人を運び居候を見受け申し候。

青毛布ケットをおおい、顔には白木綿しろもめんのきれをかけて有之これあり、その

きれの下より見え候口もと顚あっこのあたりいかにも見覚えあるよう

にて、尋ね申し候えば、これは千々岩中尉と申し候。その時の

喫きつきよう驚御察おどろしくださるべく候。中略 おおいをとり申し候

えば、色蒼あおざめ、きびしく齒をくいしばり居申し候。創きずは下腹

部に一か所、その他二か所、いずれも椅子山砲台いすざん攻撃の際受け

候弾創にて、今朝まで知覚有これあり之候ところ、ついに絶息いたし

候由。中略 なお同人の同僚につきいろいろ承り候ところ、

彼は軍中の悪にくまれ者ながら戦争のみぎりは随分相働き、すでに

金州攻撃の際も、部下の兵士と南門の先登をいたし候由にて、

今回もなかなか働き候との事に御座候。もつとも平生へいぜいは往々士

官の身にあるまじき所行も内々有之これあり、陣中ながら身分不相応の金子きんすを貯え居申し候。すでに一度は貔子窩ひしかにおいて、軍司令官閣下の嚴令あるにかかわらず、何か徵発いたし候とて土民に對し慘刻千万の仕打ち有之これあり、之すでにその処分も有之これあるべきところ中略 とにかく戦死は彼がためにもつけの幸いに有之べく候。母上様御承知の通り、彼は重々不埒ふらちのかども有之、彼がためには実に迷惑もいたし、私儀もすでに断然絶交いたしおり候事に有之候えども、死骸しがいに對しては恨みも御座なく、昔兄弟のように育ち候事など思ひ候えば、不覺の落涙も仕り候事に御座候。よつて許可ゆるしを受け、火葬いたし、骨を御送りおんおく申し上げ候。しかるべく御葬り置きくだされたく願ひ奉り候。

## 下略

武男が旅順にて遭遇しつる事はこれに止まらず、わざと書中に漏らしし一の出来事ありき。

## 六の二

武男が書中に漏れたる事實は、左のごとくなりき。

千々岩の死骸しがいに会えるその日、武男はひとり遅れて埠頭はとぼの方に  
 帰り居たり。日暮れぬ。

舎營の門口かどのきらめく歩ほしやう哨すうの銃剣、将校馬蹄ばていの響き、下士を  
 しかりいる士官、あきれ顔にたたずむ清人しんじん、縦横に行き違う軍

属、それらの間を縫うて行けば、軍夫五六人、焚火たきびにあたりつ。

「めつぽう寒いじゃねエか。故国うちにいりや、葱鮪ねぎまで一杯ぺえてえとこ

だ。吉きち、てめえアまたいい物引つかけていやがるじゃねえか」

吉といわれし軍夫は、分捕りぶんどなるべし、紫緞子どんすの美々しき胴衣どうぎ

を着たり。

「源公げんこうを見ねえ。狐裘かわの四百両もするてえやつを着てやがるぜ」

「源か。やつくれえばかに運の強えやつアねえぜ。博ぶつちやア勝つ、

遊んで褒美ほうびはもれえやがる、鉄砲玉あたア中りあたツこなし。運のいいた

やつのかつだ。おいらなんざ大連灣だいにんでもって、から負けちやつ

て、この拾一貫あわせよ。畜生ちきしようめ、分捕りでもやつけねえじゃ、ほんと

にやり切れねえや」

「分捕りもいいが、きをつけねえ。さつきもおれアうつかり踏ん  
 込むと、殺しに來たと思いやがったんだね、いきなり桶おけの後ろか  
 ら抜劍ぬきみの清兵やつが飛び出しやがって、おいらアもうちつとで娑婆しゃばに  
 お別れよ。ちようど兵隊さんが來て清兵やつめすぐくたばつちまやが  
 ったが。おいらア肝つぶしちやつたぜ」

「ばかな清兵やつじゃねえか。まだ殺され足りねえてんだな」

旅順落ちていまだ幾日もあらざれば、げに清兵しんぺいの人家に隠れて  
 搜いし出いだされて抵抗せしたため殺さるるも少なからざりけるなり。

聞くともなき話耳に入りて武男はいささか不快の念を動かしたつ  
 つ、次第に埠頭はとばの方かたに近づきたり。このあたり人け少なく、燈ともし  
 火びまばらにして、一方に建てつらねたる造兵廠しょうちやうの影黒く地に敷

き、一方には街燈の立ちたるが、薄月夜ほどの光を地に落とし、やせたる狗<sup>いぬ</sup>ありて、地をかぎて行けり。

武男はこの建物の影に沿うて歩みつつ、目はたちまち二十間を隔てて先に歩み行く二つの人影に注ぎたり。後影<sup>かげ</sup>は確かにわが陸軍の將校士官のうちなるべし。一人は濶<sup>かつだい</sup>大に一人は細小なるが、打ち連れて物語などして行くさまなり。武男はその一人をどこか見覚えあるように思ひぬ。

たちまち武男はわれとかの両人<sup>ふたり</sup>の間にさらに人ありて建物の影を忍び行くを認めつ。胸は不思議におどりぬ。家の影さしたれば、明らかには見えざれど、影のなかなる影は、一歩進みて止まり<sup>とど</sup>、二歩行きてうかがい、まさしく二人のあとを追うて次第に近づき

おるなり。たまたま家と家との間絶えて、流れ込む街燈の光に武男はその清人なるを認めつ。同時にものありて彼が手中にひらめくを認めたり。胸打ち騒ぎ、武男はひそかに足を早めてそのあとを慕いぬ。

最先に歩めるかの二人が今しも街の端にいたれる時、闇中を歩めるかの黒影は猛然と暗を離れて、二人を追いぬ。驚きたる武男がつづいて走り出せる時、清人はすでに六七間の距離に迫りて、右手は上がり、短銃響き、細長なる一人はどうと倒れぬ。驚きて振りかえる他の一人を今一発、短銃の弾機をひかんとせる時、まっしぐらに馳せつきたる武男は拳をあげて折れよと彼が右腕をたたきつ。短銃落ちぬ。驚き怒りてつかみかかれる彼を、武男は

打ち倒さんと相撲すまう。かの濶かつだい大なる一人も走はせ来たりて武男に力を添えんとする時、短銃の音に驚かされしわが兵士ばらばらと走はせきたり、武男が手にあまるかの清人を直ちに蹴倒けして引つくりぬ。瞬間の争いに汗になりたる武男が混雑の間より出いでける時、倒れし一人をたすけ起こせるかの濶大なる一人はこなたに向かい来たりぬ。

この時街燈の光はまさしく片岡中将の面おもてをば照らし出いだしつ。  
武男は思わず叫びぬ。

「やッ、閣下あなたは！」

「おツきみは！」

片岡中将はその副官といづくかへ行ける帰途かえりを、殊勝にも清しんじ

人のねらえるなりき。

副官の疵きずは重かりしが、中將は微傷きずだも負わざりき。武男は図らずして乃舅だいきゆうを救えるなり。

\*

この事いずれよりか伝わりて、浪子に達せし時、幾は限りなくよろこびて、

「ごらん遊ばせ。どうしても御縁が尽きぬのでございますよ。精出して御養生遊ばせ。ねエ、精出して養生いたしましょうねエ」  
浪子はさびしく打ちほほえみぬ。

## 七の一

戦争のうちに、年は暮れ、かつ明けて、明治二十八年となりぬ。

一月より二月にかけて威海衛落ち、北洋艦隊<sup>ほろ</sup>亡び、三月末には南の方澎湖列島<sup>かたほうこ</sup>すでにわが有に帰し、北の方<sup>かた</sup>にはわが大軍潮<sup>うしお</sup>のごとく進みて、遼河<sup>りようが</sup>以東に隻騎の敵を見ず。ついで講和使来たり、四月中旬には平和条約締結の報あまねく伝わり、三国干涉のうわさについて、遼東還付の事あり。同五月末大元帥陛下<sup>がいせん</sup>凱旋<sup>がいせん</sup>したまいて、戦争はさながら大鵬<sup>たいほう</sup>の翼を収むるごとく倏<sup>しゆく</sup>然<sup>ぜん</sup>としてやみぬ。

旅順に千々岩の骨を収め、片岡中将の危厄を救いし後、武男は威海衛の攻撃に従い、また遠く南の方澎湖島<sup>かた</sup>占領の事に従いしが、

六月初旬その乗艦のひとまず横須賀に凱旋する都合となりたるよ  
り、ひさびさ久々ぶりに帰京して、たえて久しきわが家の門やを入りぬ。

おも想えば去年の六月、席をけつて母に辞したりしよりすでに一年  
を過ぎぬ。幾たびか死生のきわを通り来て、むかしの不快は薄ら  
ぐともなく痕あとを滅し、佐世保病院の雨の日、威海衛港外風氷る夜  
は想いのわが家やに向かつて飛びしこと幾たびぞ。

一年ぶりに歸りて見れば、家の内何うちの変わりたることもなく、  
わが車の音に出で迎いえつる婢おんなの顔の新しくかわれるのみ。母は例  
のごとく肥え太りて、リュウマチス起これりとして、一日床にあり。  
田崎は例のごとく日にちにち々来たりては、六畳の一間に控え、例のご  
とく事務をとりてまた例刻に歸り行く。型に入れたるとき日々

の事、見るもの、聞くもの、さながらに去年のままなり。武男は望みを得て望みを失える心地こころちしつ。一年ぶりに母にあって、絶えて久しきわが家の風呂ふろに入りて、うずたかき蒲団ふとんに安坐あんざして、好める饌ぜんに向かいて、さて釣り床ならぬ黒ビロードの括り枕くくまくらに疲れし頭かしらを横たえて、しかも夢は結ばれず、枕べ近き時計の一二時をうつまでも、目はいよいよさえて、心の奥に一種鋭き苦痛くるしみを覚えしなり。

一年の月日は母子の破綻はたんを繕繕いぬ。少なくとも繕えるがごとく見えぬ。母もさすがに喜びてその独ひとりご子を迎えたり。武男も母に会うて一の重荷をばおろしぬ。されど二人ふたりが間は、顔見合わせしその時より、全く隔てなきあたわざるを武男も母も覚えしなり。浪

子の事をば、彼も問わず、これも語らざりき。彼の問わざるは問うことを欲せざるがためにあらずして、これの語らざるは彼の聞かんことを欲するを知らざるがためにはあらざりき。ただかれこれとともにこの危険の問題をば務めて避けたるを、たがいにとそれと知りては、さしむかいて話途絶ゆるごとにおのずから座の安からざるを覚えしなり。

佐世保病院の贈り物、旅順のかの出来事、それはなくとももとより忘るる時はなきに、今昔ともに棲すみし家に帰り来て見れば、見る物ごとにその面影おもかげの忍ばれて、武男は怪しく心地こころ乱れぬ。彼女かれは今いずこにおるやらん。わが帰り来しと知らずでやあらん。思おもいは千里も近しとすれど、縁絶えては一里と距はなれぬ片岡家、さ

ながら日よりも遠く、彼女が伯母の家は呼べば応うる近くにありながら、何の顔ありて行きてその消息を問うべきぞ。想えば去年の五月艦隊の演習におもむく時、逗子に立ち寄りて別れを告げしが一生の別離とは知らざりき。かの時別荘の門に送り出でて「早く帰つてちようだい」と呼びし声は今も耳底に残れど、今はたれに向かいて「今帰つた」というべきぞ。

かく思いつづけし武男は、一日横須賀におもむきしついでに逗子に下りて、かの別墅の方に迷い行けば、表の門は閉じたり。さては帰京せしかと思いわびつつ、裏口より入り見れば、老爺一人庭の草をむしり居つ。

## 七の二

武男が入り来る足音に、老爺じじいはおもむろに振りかえりて、それと見るよりいささか驚ていきたる体にて、鉢はちまき巻まきをとり、小腰こがを屈かめながら

「これはおいでなせえまし。旦那様アいつお帰けえりでござエましたんで？」

「二三日前に帰かえった。老爺おまえも相変わらず達者でいいな」

「どういたしましたして、はあ、ねッからいけませんで、はあお世話様になりますでござエますよ」

「何かい、老爺おまえはもうよっぽど長く留守をしとるのか？」

「いいや、何でござえますよ、その、先あとげつ月までは奥様——ウンニヤお嬢——ごご御病人様とばあやさんがおいでなさったんで、それからまア老翁わたくしがお留守をいたしておるでござえますよ」

「それでは先あとげつ月帰京かえつたんだね——では東京あっちにいるのだな」と武男はひとりごちぬ。

「はい、さよさまで。殿様が清国あっちからお帰りかえなさるその前まえに、東京にお帰りかえなさったでござえますよ。はア、それから殿様とごいっしょに京かみがた都に行かっしやりました御様子で、まだ帰京かえらっしやりますめえと、はや思うでござえますよ」

「京かみがた都に？——では病気がいいのだな」

武男は再びひとりごちぬ。

「で、いつ行つたのだね？」

「四五日前——」と言いかけしが、老翁じじいはふと今の關係を思い出

でて、言い過ぎはせざりしかと思ひ貌がにたちまち口をつぐみぬ。

それと感ぜし武男は思わず顔をあからめたり。

ふたり相対あひむかいてしばし黙然もくねんとしていたりしが、老翁じじいはさす

がに氣の毒と思ひ返ししように、

「ちよいと戸を明けますべえ。旦那様、お茶でも上がつてまあお休みなさつておいでなせエましょ」

「何、かまわずに置いてもらおう。ちよつと通りかかりに寄つたんだ」

言いすてて武男はかつて来なれし屋敷内うちを回り見れば、さすが

に守る人あれば荒れざれど、戸はことごとくしめて、手水鉢ちようずばちに水絶え、庭の青葉は茂りに茂りて、ところどころに梅子うめのみこぼれ、青々としたる芝生しばふに咲き残れる薔薇ばらの花半ばは落ちて、ほのかな香かおりは庭に満ちたり。いづくにも人の気けはなくて、屋後おくごの松せみに蟬せみの音ねのみぞかしましき。

武男はそうそう々に老翁じじいに別れて、頭かしらをたれつつ出いで去りぬ。

五六日を経て、武男はまた家を辞して遠く南征の途に上ることとなりぬ。家に歸りて十余日、他の同僚は凱旋がいせんの歓迎のおもしろく騒ぎで過ごせるに引きかえて、武男はおもしろからぬ日を送れり。遠く離れてはさすかになつかしかりし家も、歸りて見れば思いのほかにおもしろき事もなくて、武男はついにその心の欠あ

陥きを満たすべきものを得ざりしなり。

母もそれと知りて、苦々しく思えるようすはおのずから言葉の端にあらわれぬ。武男も母のそれと知れるをば知り得て、さしむかいて語るごとに、ものありて間を隔つるように覚えつ。されば母子の間はもとのごとき破裂こそなけれ、武男は一年後の今のかえつてもとよりも母に遠うざかれるを憾うらみて、なお遠うざかるをいかんともするあたわざりき。母子ほしは冷然として別れぬ。

横須賀より乗るべかりしを、出発なんなに垂なんとして障さわりありて一日じつの期をあやまりたれば、武男は呉くれより乗ることに定め、六月の十日というに孤影しょうぜん蕭然として東海道列車に乗りぬ。

## 八の一

宇治うじの黄檗山おうぼくざんを今しも出いで来たりたる三人みたり連れ。五十余りと見ゆる肥満おとこの紳士は、洋装きんがしらして、金頭きんがしらのステッキはを持ち、二十たちばかりの淑女おんなは黒綾くろあやの洋傘パラソルをかざし、そのあとより五十あまりの婢おんならしきが信玄袋おんなをさげて従まいたり。

三人みたりの出いで来るとともに、門前かどに待ち居まし三輛りようの車くるまがらからと引き来るを、老紳士おきなは洋傘パラソルの淑女おんなを顧かみて

「いい天気じゃ。すこし歩いて見てはどうか」

「歩あきましよう」

「お疲れは遊あそばしませんか」と婢おんなは口くちを添そえつ。

「いいよ、少しは歩いた方が」

「じゃ疲れたら乗るとして、まあぶらぶら歩いて見るもいいじやろう」

三輛の車をあとに従えつつ、三人はおもむろに歩み初めぬ。い  
うまでもなく、こは片岡中将の一行なり。昨日きのう奈良より宇治に宿  
りて、平等院を見、扇の芝の昔をとむら弔い、今日は山科やましなの停車場よ  
り大津おおつの方かたへ行かんとするなり。

片岡中将さんぬは去る五月に遼東より凱旋しつ。一日浪子の主治医を  
招きて書齋に密談せしが、その翌々日より、浪子を伴ない、婢ひの  
幾を従えて、飄ひょう然ぜんとして京都に來つ。閑静なる河かわぞいの宿を  
えらみて、ここを根拠地と定めつつ、軍服を脱ぎすてて平服に身

を包み、人を避け、公会の招きを辞して、ただ日にちにち々浪子を連れては彼女が意のむかうままに、博覧会を初め名所古刹こせつを遊覧し、西陣に織り物を求め、清水きよみずに土産みやげを買ひ、優遊の限りを尽くして、ここに十余日を過ぎぬ。世間よはしばし中将の行くえを失いて、浪子ひとりその父を占めけるなり。

「黄檗おうばくを出れば日本の茶摘みかな」茶摘みの盛季さかりはとく過ぎたれど、風は時々焙炉ほうろの香を送りて、ここそこに二番茶を摘む女の影も見ゆなり。茶の間あいいい々々は麦黄いろく熟うれて、さくさくと鎌かまの音聞こゆ。目を上ぐれば和州の山遠く夏がすみに薄れ、宇治川は麦の穂末を渡る白帆しらほにあらわれつ。かなたに屋根のみ見ゆる村里より午鶏の声ゆるく野づらを渡り来て、打ち仰ぐ空には薄紫に焦

がれし雲ふわふわと漂いたり。浪子は吐息つきぬ。

たちまち左手ゆんでの畑路みちより、夫婦と見ゆる百姓二人話しても出いて来たりぬ。午餉ひるげを終えて今しも圃はたに出いて行くなるべし。男は鎌を腰にして、女は白手ぬぐいをかむり、齒を染め、土瓶どびんの大きいなる手にさげたり。出会いざまに、立ちどまりて、しばし一行の様子を見し女は、行き過ぎたる男のあと小走りに追いかけて、何かささやきつ。二人ともに振りかえりて、女は美しく染めたる齒を見せてほほえみしが、また相語りつつ花茨いばらこぼるる畦路あぜみちに入り行きたり。

浪子の目はそのあとを追いぬ。竹の子笠かさと白手ぬぐいは、次第に黄ばめる麦に沈みて、やがてかげも見えずなりしと思えば、た

ちまち畑はたのかなたより

「郎ぬしは正宗まさむね、わしア錆さび刀、郎ぬしは切れても、わしア切れエ——  
ぬ」

歌う声哀々として野づらに散りぬ。

浪子はさしうつむきつ。

ふりかえり見し父中将は

「くたびれたじやろう。どれ——」

言いつつ浪子の手をとりぬ。

## 八の二

中将は浪子の手をひきつつ

「年のたつは早いもンじゃ。浪、卿はおぼえおまえておるかい、卿がちおまえつちやかつたころ、よくおとうさんに負ぶさつて、ぽんぽんおとうさんが横腹をけつたりしおつたが。そうじゃ、卿が五つ六つのころじゃつたの」

「おほほほほ、さようでございましたよ。殿様が負ぶ遊おんばしますと、少嬢ちいおじようさま様がよくおむずかり遊ばしたんでございますね。

——ただ今もどんなにおうらやましがっていらつしやるかもわかりませんでございますよ」と気軽に幾が相あいづち槌うちぬ。

浪子はたださびしげにほほえみつ。

「駒こまか。駒にはおわびにどつさり土産みやげでも持つて行くじゃ。なあ、

浪。駒よか千鶴さんがうらやましがつとるじやろう、一度こつちに来たがっておつたのじやから」

「さようでございますよ。加藤あちらのお嬢様がおいで遊ばしたら、ど

んなにおにぎやかでございましょう。——本わたくし当に私なぞがまあこ

んな珍しい見物さしていただきまして——あの何でございませうか、

さつき渡りましたあの川が宇治川で、あの螢ほたるの名所で、ではあの

駒こまざわ沢みゆきが深雪こまざわにあいました所でございませうね」

「はははは、幾はなかなか学者じやの。——いや世の中の移り変

わりはひどいもんじや。おとうさんなぞが若かつた時分は、大おおき

阪かから京へ上るといふと、いつもあの三十石で、鮓すしのごと詰め

られたもんじや。いや、それよかおとうさんの、二十はたちの年じや

つた、おおさいごう大西郷と有村ありむら——海江田かえだと月照師げつしようせんを大阪まで連れ出したあとで、大事な要がでて、おとうさんが行くことになつて、さああと追つかけたが、あんまり急いで一文もんなしじや。とうとう頬ほおかぶりをして跣足はだしで——夜じやつたが——伏見ふしみから大阪まで川堤かわとてを走つたこともあつたンじや。はははは。暑いじやないか、浪、くたびれるといかん、もう少し乗つたらどうじや」  
 おくれし車を幾が手招けば、からからと挽ひき来つ。三人みたりは乗りぬ。

「じや、そろそろやつてくれ」

車は徐々に麦圃ばくほを穿うがち、茶圃を貫きて、山科やましなの方かたに向かいつ。前なる父が項うなじの白髪しらがを見つめて、浪子は思いに沈みぬ。良人おっとに

別れ、不治の疾をいだいて、父に伴なわるるこの遊びを、うれし  
 といわんか、哀しと思わんか。望みも楽しみも世に尽き果てて遠  
 からぬ死を待つわれを不幸といわば、そのわれを思い想う父の心  
 をくむに難からず。浪子は限りなき父の愛を想うにつけても、今  
 の身はただ慰めらるるほかに父を慰むべき道なきを哀しみつ。世  
 を忘れ人を離れて父子ただ二人名残の遊びをなす今日このごろは、  
 せめて小供の昔にかえりて、物見遊山もわれから進み、やがて消  
 ゆべき空蝉の身には要なき唐織り物も、末は妹に紀念の品と、  
 ことに華美なるを選びしなり。

父を哀しと思えば、恋しきは良人武男。旅順に父の危難を助  
 けたまいしとばかり、後の消息はたれ伝うる者もなく、思いは飛

び夢は通えど、今はいづくにか居たもうらん。あいたし、一度あいたし、生命いきあるうちに一度、ただ一度あいたしと思うにつけて、さきに聞きつる鄙ひなうた歌のあいにく耳に響き、かの百姓夫婦のむつまじく語れる面影は眼前めまきに浮かび、楽しき粗布あらぬに引きかえて憂いを包む風通ふうつうの袂恨めしく――

せぐり来る涙をハンケチにおさえて、泣かじと唇くちびるをかめば、あいにくせきのしきりに濡れぬ。

中将は気づかわしげに、ふりかえりつ。

「もうようございます」

浪子はわずかに笑えみを作りぬ。

\*

やましな

山科やましなに着きて、東行の列車に乗りぬ。上等室は他に人もなく、浪子は開ける窓のそばに、父はかなたに坐ざして新聞を広げつ。

おりから煙を噴はき地をとどろかして、神戸こうべ行きの列車は東より

来たり、まさに出いでんとするこなたの列車と相ならびたり。客車

の戸を開あけたて閉する音、プラットフォームの砂利踏じやりみにじりて駅夫

の「山科、山科」と叫び過ぐる声かなたに聞こゆるとともに、汽

笛鳴りてこなたの列車はおもむろに動き初めぬ。開ける窓の下もとに

坐して、浪子はそぞろに移り行くあなたあなたの列車をながめつ。あた

かもかの中等室の前まへに来し時、窓に頬ほおづえ杖つえつきたる洋装の男と顔

見合あわしたり。

「まッあなた！」

「おツ浪さん！」

こは武男なりき。

車は過ぎんとす。狂せるごとく、浪子は窓の外にのび上がりて、手に持てるすみれ色のハンケチを投げつけつ。

「おあぶのうございますよ、お嬢様」

幾は驚きてしかと浪子の袂を握りぬ。

新聞手に持ちたるまま中将も立ち上がりて窓の外を望みたり。

列車は五間<sup>けんす</sup>過ぎ——十間過ぎぬ。落つばかりのび上がりて、ふりかえりたる浪子は、武男が狂えるごとくかのハンケチを振りて、何か呼べるを見つ。

たちまちレールは山<sup>さんかく</sup>角をめぐりぬ。両窓のほか青葉の山ある

のみ。後ろに聞こゆる帛きぬを裂くごとき一声は、今しもかの列車が西に走れるならん。

浪子は顔打ちおおいて、父の膝ひざにうつむきたり。

## 九の一

七月七日の夕べ、片岡中将の邸宅やしきには、人多く集つどいて、皆低声こごえにもと言えり。令嬢浪子の疾革やまあいたまれるなり。

かねては一月の余もと期せられつる京洛けいらくの遊より、中将父子の去月下旬にわかには帰り来たれる時、玄関いに出で迎えし者は、医ならざるも浪子の病勢おおかたならず進めるを疑うあたわざりき。

はたして医師は、一診して覚えぬ顔色を変えたり。月ならずして病勢にわかに加われるが上に、心臓に著しき異状を認めたるなりき。これより片岡家には、深夜も燈燃えて、医は間断なく出入りし、月末より避暑におもむくべかりし子爵夫人もさすがにしばしその行を見合わしつ。

名医の術も施すに由なく、幾が夜ごと日ごとの祈念もかいなく、病は日に募りぬ。数度の咯血、その間々には心臓の痙攣起こり、はげしき苦痛のあとはおおむね慄々としてうわ言を発し、今日は昨日より、翌日は今日より、衰弱いよいよ加わりつ。その咳嗽を聞いて連夜ねむらぬ父中將のわが枕べに来るごとに、浪子はほのかに笑みて苦しき息を忍びつつ明らかにもの言えど、う

とうととなりては絶えず武男の名をば呼びぬ。

\*

今日明日と医師のことに戒めしその今日は夕べとなりて、部屋へやは燈ともあまねく点つきたれど、声こゝろ高たかにももの言う者もなければ、しんしんとして人ありとは思われず。今皮下注射を終えたるあとをしばし静かにすとして、廊下伝いに離家はなれより出いで来し二人の婦人は、小座敷の椅子いすに倚よりつ。一人は加藤子爵夫人なり。今一人はかつて浪子を不動祠畔ふどうしはんに救いしかの老婦人なり。去年の秋の暮れに別れしより、しばらく相見ざりしを、浪子が父に請いて使しいて招けるなり。

「いろいろ御親切に——ありがとうございます。姪あれも一度はお目

にかかつてお礼を申さなければならぬと、そう言い言いいたして  
おりましたのですが——お目にかかりまして本望でございませよ  
う」

加藤子爵夫人はわずかに口を開きぬ。

答うべき辞を知らざるように、老婦人はただ太息つきて頭を下  
げつ。ややありて声を低くし

「で——はどちらにおいでなさいますので？」

「台湾にまいったそうでございます」

「台湾！」

老婦人は再び太息つきぬ。

加藤子爵夫人はわき来る涙をかろうじておさえつ。

「でございませんと、あの通り思っているのでございますから、世間体はどうともいたして、あわせもいたしましうし、いとまご暇いもいたさせたいのですが——何をいっても昨日今日台湾に着いたばかり、それがほかと違つて軍艦に乗っているのでございませから——」

おりから片岡夫人入り来つ。そのあとより目を泣きはらしたる千鶴子は急ぎ足に入り来たりて、その母を呼びたり。

## 九の二

日は暮れぬ。去年の夏に新たに建てられし離家の八畳には、燭よくだいの光ほのかにさして、大いなる寝台ねだい一つ据えられたり。その雪白なるシーツの上に、目を閉じて、浪子は横たわりぬ。

二年に近き病に、やせ果てし軀みはさらになやせて、肉という肉は落ち、骨という骨は露あらわれ、蒼白あおしろき面のいとど透きとおりて、ただ黒髪のみ昔ながらにつやつやと照れるを、長く組みまくらて枕上にたらしたり。枕もとには白衣の看護婦が氷に和せし赤酒せきしゆを時々筆に含まして浪子の唇くちびるを湿しつ。こなたには今一人の看護婦とともに、目くぼみ頬落ちたる幾がうつむきて足をさすりぬ。室内しんしんとして、ただたちまち急にたちまちかすかになり行く浪子の呼吸の聞こゆるのみ。

たちまち長き息つきて、浪子は目を開き、かすかなる声を漏らしつ。

「伯母さまは——？」

「来ましたよ」

言いつつしずかに入り来たりし加藤子爵夫人は、看護婦がすすむる椅子をさらに臥床とこ近く引き寄せつ。

「少しはねむれましたか。——何？　そうかい。では——」  
看護婦と幾を顧みつつ

「少しの間まあっちへ」

みたり三人を出しやりて、伯母はなお近く椅子を寄せ、浪子の額にかかるおくれ毛をなで上げて、しげしげとその顔をながめぬ。浪子

も伯母の顔をながめぬ。

ややありて浪子は太息とともに、わなわなとふるう手をさしのべて、枕の下より一通の封ぜし書を取り出し

「これを——届けて——わたしがなくなったあとで」

ほろほろとこぼす涙をぬぐいやりつつ、加藤子爵夫人は、さらに眼鏡の下よりはふり落つる涙をぬぐいて、その書をしかとふところにおさめ、

「届けるよ、きつとわたしが武男さんに手渡すよ」

「それから——この指環は」

左手を伯母の膝にのせつ。その第四指に燦然と照るは一昨年おとしの春、新婚の時武男が贈りしなり。去年去られし時、かの家に属

するものをばことごとく送りしも、ひとりこれのみ愛おしみて手離すに忍びざりき。

「これは——持もつて——行きますよ」

新たにわき来る涙をおさえて、加藤夫人はただうなずきたり。浪子は目を閉じぬ。ややありてまた開きつ。

「どうしていらッしやる——でしょう？」

「武男さんはもう台湾あちらに着いて、きつといろいろこつちを思いやつていなさるでしょう。近くにさえいなされば、どうともして、ね、——そうおとうさまもおつしやつておいでだけれども——浪さん、あんたの心尽くしはきつとわたしが——手紙も確かに届けるから」

ほのかなる笑えみは浪子の唇くちびるに上りしが、たちまち色なき頬のあたり紅くれなゐをさし来たり、胸は波うち、燃ゆばかり熱き涙はらはらと苦しき息をつき、

「ああつらい！ つらい！ もう——もうおんな婦人なんぞに——生まれはしませんよ。——あああ！」

眉まゆをあつめ胸をおさえて、浪子は身をもだえつ。急に医を呼びつつ赤酒を含ませんとする加藤夫人の手にすがりて半ば起き上がり、生命いのちを縮むるせきとともに、肺を絞つて一盞さんの紅血を吐きつ。昏こん々として臥床とこの上に倒れぬ。

医とともに、皆入りぬ。

## 九の三

医師は騒がず看護婦を呼びて、応急の手段<sup>てだて</sup>を施しつ。さしずして寢床に近き玻璃窓<sup>はりそう</sup>を開かせたり。

涼しき空気は一陣水のごとく流れ込みぬ。まつ黒き木立<sup>こだちうしろ</sup>の背ほのかに明るみたるは、月出<sup>い</sup>でんとするなるべし。

父中將<sup>はじめ</sup>を首として、子爵夫人、加藤子爵夫人、千鶴子、駒子、

及び幾も次第にベッドをめぐりて居流れたり。風はそよ吹きてすでに死せるがごとく横たわる浪子の鬢<sup>びんぱつ</sup>髪をそよがし、医はしきりに患者の面<sup>おもて</sup>をうかがいつつ脈をとれば、こなたに立てる看護婦が手中の紙燭<sup>ししよく</sup>はたはたとゆらめいたり。

十分過ぎ十五分過ぎぬ。寂しずかなる室内かすかに吐息聞こえて、

浪子の唇わずかに動きつ。医は手ずから一ひとさじヒの赤酒を口中に注

ぎぬ。長き吐息は再び寂しずかなる室内に響きて、

「帰りましょう、帰りましょう、ねエあなた——お母かあさま、来ま

すよ来ますよ——おお、まだ——ここに」

浪子はぱつちりと目を開きぬ。

あたかも林端に上れる月是一道の幽光を射て、惘もうもう々としたる

浪子の顔を照らせり。

医師は中将にめくばせして、片隅かたえに退きつ。中将は進みて浪子

の手を執り、

「浪、気がついたか。おとうさんじゃぞ。——みんなここにおる」

空を見詰めし浪子の目は次第に動きて、父中將の涙に曇れる目と相会いぬ。

「おとうさま——おだいじに」

ほろほろ涙をこぼしつつ、浪子はわずかに右手めてを移して、その左を握れる父の手を握りぬ。

「お母さま」

子爵夫人は進みて浪子の涙をぬぐいつ。浪子はその手を執り

「お母さま——御免——遊ばして」

子爵夫人の唇はふるい、物を得言わず顔打ちおおいて退きぬ。

加藤子爵夫人は泣き沈む千鶴子を励ましつつ、かわるがわる進みて浪子の手を握り、駒子も進みて姉の床ぎわにひざまずきぬ。

わななく手をあげて、浪子は妹の前髪をかいなでつ。

「駒ちゃん——さよなら——」

言いかけて、苦しき息をつけば、駒子は打ち震いつつ一ひとヒの赤酒を姉の唇に注ぎぬ。浪子は閉じたる目を開きつつ、見回して

「毅き一いさん——道みちちゃん——は？」

二人の小児こどもは子爵夫人の計らいとして、すでに月の初めより避暑におもむけるなり。浪子はうなずきて、ややうつとりとなりつ。この時座末に泣き浸りたる幾は、つと身を起こして、力なくたれし浪子の手をひしと両手に握りぬ。

「ばあや——」

「お、お、お嬢様、ばあやもごいっしょに——」

泣きくずる幾をわずかに次へ立たしたるあとは、しんとして水のごとくなりぬ。浪子は口を閉じ、目を閉じ、死の影は次第にその面をおおわんとす。中將はさらに進みて

「浪、何も言いのこす事はないか。——しつかりせい」

なつかしき声に呼びかえされて、わずかに開ける目は加藤子爵夫人に注ぎつ。夫人は浪子の手を執り、

「浪さん、何もわたしがうけ合つた。安心して、お母さんの所においで」

かすかなる微笑の唇に上ると見れば、見る見る瞼は閉じて、眠るがごとく息絶えぬ。

さし入る月は蒼白き面を照らして、微笑はなお唇に浮かべり。

されど浪子は永く眠れるなり。

\*

三日を隔てて、浪子は青山墓地に葬られぬ。

交遊広き片岡中将の事なれば、会葬者はきわめておおく、浪子が同窓の涙をおおうて見送れるも多かりき。少しく子細を知れる者は中将の暗涙を帯びて棺側に立つを見て断腸の思いをなせしが、知らざる者も老女の幾がわれを忘れて棺にすがり泣き口説けるに袖をぬらしたり。

なまひと

故人は妙齡の淑女なればにや、夏ながらさまさまの生け花の寄贈多かりき。そのなかに四十あまりの羽織袴の男がもたらしつるもののみは、中将の玄関より突き返されつ。その生け花には

「川島家」の札ありき。

## 十のー

四月よつきあまり過ぎたり。

霜に染みたる南天の影長々と庭に臥ふす午後四時過ぎ、相も変わ  
らず肥えに肥えたる川島未亡人は、やおら障子をあけて縁側に出い  
で来たり、手水鉢ちようずばちに立ち寄りて、水なきに舌鼓を鳴らしつ。

「まアツ松、——たけエ竹」

呼ぶ声ひとりに一人は庭口より一人は縁側よりあわただしく走り来つ。

恐慌の色は面おもてにあらわれたり。

「汝達は何をしとツか。先日もいつといたじやなつか。こ、これを見なさい」

柄杓ひしやくをとつて、からの手水鉢をからからとかき回せば、色を失える二人ふたりはただ息をのみつ。

「早はよせんか」

耳近き落雷にいよいよ色を失いて、二人は去りぬ。未亡人は何か口のうちにつぶやきつつ、やがてもたらし来し水に手を洗いて、入らんとする時、他の一人は入り来たりて小腰かがを屈めたり。

「何か」

「山木様とおつしやいます方が——」

言終ことわらざるに、一種の冷笑は不平と相半ばして面積広き未亡

人の顔をおおいぬ。実を言えば去年の秋お豊とよが逃げ歸りたる以後はおのずから山木の足も遠かりき。山木は去年このかたの戦争に幾万の利を占めける由を聞き知りて、川島未亡人はいよいよもつて山木の仕打ちに不満をいだき、召使いにむかいて恩の忘るべからざるを説法するごとに、暗あんに山木を实例にとれるなりき。しかも習慣はついに勝ちを占めぬ。

「通しなさい」

やがて屋敷に通れる山木は幾たびかかの赤黒あかほくろ子の顔を上げ下げつ。

「山木さん、久しぶりごあんすな」

「いや、御隠居様、どうも申しわけないごぶさたをいたしました。

ぜひお伺い申すでございましたが、その、戦争後は商用でもって始終あちこちいたしております、まず御壮健おめでとう存じます」

「山木さん、戦争じゃしつかいもうかつたでござんそいな」

「へへへへ、どういたしまして——まあおかげさまでその、とやかく、へへへへ」

おりから小間使いが水引かけたる品々を腕もたわわにささげ来つ。

「お客様の——」と座の中央もなかに差し出しいだして、罷りまかぬ。

じろり一瞥いちべつを台の上の物にくれて、やや満足の笑みえは未亡人の顔にあらわれたり。

「これはいろいろ気の毒でごあんすの、ほほほほ」

「いえ、どうつかまつりまして。ついほんの、その——いや、申しおくれましたが、武——若旦那様も大尉に御昇進遊ばして、御勲章や御賜金がございましたそうで、実は先日新聞で拝見いたしました——おめでとうございました。で、ただ今はどちら——佐世保においででございましたようか」

「武でごあんすか。武は昨日帰きのうつて来申きもした」

「へエ、昨日？ 昨日お帰りですか？ へエ、それはそれは、それはよくこそ、お変わりもございませんで？」

「相変わらず坊つちやまで困いますよ。ほほほほ、今日きょうは朝から出て、まだ帰いません」

「へエ、それは。まずお帰りで御安心でございます。いや御安心と申しますと、片岡様でも誠に早お気の毒でございました。たしかもう百か日もお過ぎなさいましたそうで——しかしあの御病氣ばかりはどうもいたし方のないもので、御隠居様、さすがお目が届きましたね」

川島夫人は顔ふくらしつ。

「彼女あいつの事じゃ、わたしも実に困こまりましたよ。銭はつかう、悴せがれとけんかまでする、そのあげくにや鬼婆おにばばのごと言いわるる、得えのかン媳よめご御ごじやつてな、山木さん——。そいばかいあいつが死しんだと聞いたから、弔儀くやみに田崎をやつて、生花はなをなあ、やつたと思おもいなさい。礼どころか——突つつ返かへして来き申ました。失礼しつれいじゃごあはん

か、なあ山木さん」

浪子が死せしと聞きしその時は、未亡人もさすがによき心地こころちはせざりしが、そのたまたま贈りし生花の一も二もなく突き返されしにて、万よろずの感情はさらりと消えて、ただ苦味にがみのみ残りしなり。

「へエ、それは——それはまたあんまりな。——いや、御隠居様

——」

小間使いがささげ来たれる一碗わんの茗めいになめらかなる唇をうるおし

「昨年来は長々お世話に相成りましてございますが、娘——豊とよも近ちかぢか々に嫁にやることにいたしましたして——」

「お豊どんが嫁に？——それはまあ——そして先方むこうは？」

「先方は法学士で、目下ただいま農商務省の〇〇課長をいたしておる男で、ご存じでございましたらどうか、〇〇と申します人でございました、千々岩ちぢわさんなどももと世話に——や、千々岩さんと申しますと、誠にお気の毒な、まだ若いお方を、残念でございました」

一点の翳かげ未亡人の額をかすめつ。

「戦争いくさはいやなものでごあんすの、山木さん。——そいでその婚禮いっは何日？」

「取り急ぎまして明後々日に定めきましてございますが——御隠居様、どうかひとつ御来駕おいでくださいますように、——川島様の御隠居様がおすわり遊ばしておいで遊ばすと申しますれば、へへ手前どもの鼻も高うございますわけで、——どうかぜび——家内も

出ますはずでございますが、その、取り込んでいますので——武  
——若旦那様もどうか——」

未亡人はうなずきつ。おりから五点をうつ床上とこの置き時計を顧  
みて、

「おおもう五時じゃ、日が短いな。武はどうしつろ？」

## 十の二

白菊を手にさげし海軍士官、青山南みなみちよう町かたの方より共同墓地に  
入り来たりぬ。

あたかも新嘗祭にいなめさいの空青々と晴れて、午後ひかりの日光は墓地に満ち

たり。秋はここにも紅くれないに照れる桜の葉はらりと落ちて、仕切りの籬かきに咲えむ茶山さざんか花かの香かおりほのかに、線香の煙立ち上るあたりには小鳥の声幽こもりに聞こえぬ。今いま笄こうがい町ちやうの方に過かたぎし車の音かすかになりて消えたるあとは、寂しずけさひとしお増さり、ただはるかに響く都城みやこのどよみの、この寂寞せきばくに和して、かの現うつつとこの夢と相共に人生の哀歌を奏するのみ。

生籬いけがきの間より衣の影ちらちら見えて、やがて出いで来し二十七八の婦人、目を赤うして、水兵服みななつの七歳ななつばかりの男児おのこの手を引きたるが、海軍士官と行きすりて、五六歩過あぎし時、

「母かあさん、あのおじさんもやつぱし海軍ね」

という子供の声聞こえて、婦人はハンケチに顔をおさえて行き

ぬ。それとも知らぬ海軍士官は、道を考うるようにしばしば立ち留まりては新しき墓標を読みつつ、ふと一等墓地の中に松桜を交え植えたる一ひとしきり画はかしよの塋域はかしよの前にいたり、うなずきて立ち止まり、垣かきの小門かんぬきうづの門を揺かせば、手に従つて開きつ。正面には年経たる石塔あり。士官はつと入りて見回し、横手になお新しき墓標の前に立てり。松は墓標の上に翠すいがい蓋がいをかざして、黄ばみ紅あからめる桜の落ち葉点々としてこれをめぐり、近ごろ立てしと覚ゆる卒そ塔婆とばは簇ぞくぞく々としてこれを護まもりぬ。墓標には墨痕ぼつこんあざやかに

「片岡浪子の墓」の六字を書けり。海軍士官は墓標をながめて石のごとく突つ立ちたり。

やや久しゆうして、唇くちびるふるい、嗚咽おえつは食いしばりたる齒を漏れ

ぬ。

\*

武男は昨日帰れるなり。

五か月前ぜんやましな山科の停車場に今この墓標の下もとに臥ふす人と相見し彼

は、征台の艦中に加藤子爵夫人の書に接して、浪子のすでに世に  
 あらざるを知りつ。昨日ひる帰りし今日は、加藤子爵夫人を訪といて、  
 午過ひるぐるまでその話はらわたに腸を断ち、今ここに來たれるなり。

武男は墓標の前に立ちわれを忘れてやや久しく哭こくしたり。

三年の幻影はかわるがわる涙の狭霧さぎりのうちに浮かみつ。新婚の  
 日、伊香保の遊ふどうしはん、不動祠畔の誓い、逗子ずしの別墅べっしょに別れし夕べ、  
 最後に山科やましなに相見しその日、これらは電いなすま光のごとくしだいに

心に現われぬ。「早く帰ってちょうだい！」と言ひし言は耳ことばにあられど、一たび帰れば彼女かれはすでにわが家やの妻ならず、二たび帰りし今日はすでにこの世の人ならず。

「ああ、浪さん、なぜ死んでしまった！」

われ知らず言ひて、涙なみだは新たに泉とわきぬ。

一陣の風頭上を過ぎて、桜の葉はらはらと墓標をうつつて翻りつ。ふと心づきて武男は涙なみだを押しぬぐいつつ、墓標もとの下に立ち寄りて、ややしおれたる花立ての花を抜きすて、持もて来し白菊をさしはさみ、手ずから落ち葉を掃い、内ポケットをかい探りて一通の書を取り出いでぬ。

こは浪子の絶筆なり。今日加藤子爵夫人の手より受け取りて読

みし時の心はいかなりしぞ。武男は書をひらきぬ。仮名書きの美  
 しかりし手跡は痕あともなく、その人の筆かと疑うまで字はふるい墨  
 はにじみて、涙のあと斑々はんはんとして残れるを見ずや。

もはや最後まで遠からず覚え候そうろうまま一筆ひとふで残しあげ参らせ候

今こんじよう生おんにては御目もじの節ふしもなきことと存じおり候ところ天

の御おんあわれ憐あわれみにて先日は不慮の御目おんもじ申しあげうれしくうれ

しくしかし汽車の内のこととて何も心に任せ申さず誠に誠おんに御  
 残り多く存じ上げ参らせ候

車の窓に身をもだえて、すみれ色のハンケチを投げしその時の  
 光景ありさまは、歴々と眼前に浮かびつ。武男は目を上げぬ。前にはた

だ墓標あり。

ままならぬ世に候えば、何も不運と存じたれも恨み申さずこのままに身は土と朽ち果て候うとも魂はたま永くなが御側おんそばに付き添い

「おとうさま、たれか来てますよ」と涼しき子供の声耳近に響きつ。引きつづいて同じ声の

「おとうさま、川島の兄にいさん君が」と叫びつつ、花をさげたる十ばかりの男児おのこ武男がそばに走り寄りぬ。

驚きたる武男は、浪子の遺書を持ちたるまま、なんだ涙を払ってふりかえりつつ、あたかも墓門に立ちたる片岡中将と顔見合わしたり。

武男は頭かしらをたれつ。

たちまち武男は無手むずとわが手を握られ、ふり仰げば、涙を浮か

べし片岡中將の双眼と相對いぬ。あいむか

「武男さん、わたしも辛きつかった！」

互いに手を握りつつ、二人が涙は滴々として墓標もとの下に落ちた  
り。

ややありて中將は涙なみだを払いつ。武男が肩をたたきて

「武男君さん、浪は死んでも、な、わたしはやっぱい卿あんたの爺おやじじゃ。し

つかい頼たのみますぞ。——前途遠しじや。——ああ、久しぶり、武  
男さん、いっしょに行つて、ゆるゆる台湾の話でも聞こう！」



## 青空文庫情報

底本：「小説 不如帰」岩波文庫、岩波書店

1938（昭和13）年7月1日第1刷発行

1971（昭和46）年4月16日第34刷改版発行

※1898（明治31）年から翌年にかけて「国民新聞」に連載されたとき、不如帰には「ほととぎす」と読みが示してあった。後に著者は、本作品を「ふじよき」と呼び、巻頭の「第百版不如帰の巻首に」にも、そうルビが付してある。だが、底本は扉と奥付に、「ほととぎす」とルビを振っている。

入力：鈴木伸吾

校正：林 幸雄

2001年2月16日公開

2011年8月27日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 小説 不如帰

徳富蘆花

2020年 7月12日 初版

## 奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>